

自然科學に過渡する時の概観と翻譯書、並に小森桃塙が「病因精義」、「泰西方鑑」、又「蘭方樞機」に就て

漢醫學が猶從來の陰陽五行、脈絡經運を説き、搗て、加へ宋以來の性理（儒醫學）を祖述してゐる時代に西洋では十七世紀より十八世紀の前半中にボオエルハアベ、ホフマン、スタアルの系統學派が擡頭して生活現象の發現、神經液、纖維、「アニイマ」(精氣)説等許多の學説が勃興して更に新生面を解剖、生理、之を概括して人身の研究を主とする一壇に展開して來た、是等趨勢はクルレシの神經病理説、モン、ベリエイ學徒の生氣説、ボルドオの自然説等も輩出せしめて生死の科學的問題に及び、次で又、組織學、病理總論なきが漸次創建せられて樹立するこゝとなり隨て診斷法も其端緒を開いて來た、如是して自然科

自然科學に過渡する時の概観と翻譯書、並に小森桃塙が「病因精義」、「泰西方鑑」、又「蘭方樞機」に就て 一七五

學なるものは十九世紀の初頭より其風潮を披播して益有力なる進捗を喚起し爲に從來之に混入した哲學をして自ら其前に低頭せしめ、多般の教理、崇拜も亦自ら後方に退き去るの觀を現じたのであつて是が我醫學の過渡時代であり初めて眞面目を發揮し來る運命を益々獲得するに至つた。

徳川時代の二百五六十一年間に於て限制せられた學問、學説が斷片的に不完全又不會得にもせよ矢張り我邦に傳來して多少の輪廓又は複雑なる内容を紹介したのである、而も其大體が或る學者間の質疑辯難に由て理會されたにせよ、猶長年月蟠屈して來た四元説又凝固流動兩質論なきが疾病の起因竝に生活現象上に依然として説かれ、要領も根據もなく漠然として懷抱せられ、醫師其人が最重きを措いた治療學、本草應用の方面に多少の混迷を來たした如き概が明らかであつた。

殊に神經液の病理なきは疾病の根源に提供され亦驕迎を受けた模様であつたが或は唯、一部の學者間にのみ是等諸説が風靡して居たかとも思はれる、而して

多くの中には是等の翻譯に當て何等是非の辨別もなく其一生を没頭した人を見受けた。

諸學説さしても皆臆説で懸案であつて定論では無いが然し皆、夫々系統を追隨したものと思ふの他は無い、それに翻譯家は是等系統の沿革を辨識し能はざりし境遇に於て其翻譯に會心さに甚大の刻苦を嘗めたことは察するに餘りある、況や其人の多くは今日謂ふ所の基礎醫學知識に其素養なるものが甚深からざりし人士なるに於ておやである。

當時、人體の組織學に就ても亦、肉體の組織及、纖維が明かにされて居たが、細胞の發見は縱令、一六五〇年頃のロオベルト、フックに起因し又は更にマルセルロ、マルヴィイギイの研究に在つたにしても皆夫れは植物の上であつた、實際の動物細胞はマチアス、ヤコップ、シュライデン及、シュワンの研究に淵源して之を一八三八年天保九年の發見とする、而して希代の傑人ルドルフ、ウィルヒョウに頼つて細胞病理學が創説され古來の體液病理學、其他過渡期時代の諸臆説

の壘堡を顛覆したしたのは一八五八年安政五年の事である。

猶過渡期時代に就て言を再びするが此時代に一時名聲を博した催眠術又は類似療法なども翻譯家に由て傳唱、宣傳もされた(例之、「平子」又「里私」を題する譯書)人の知る如く催眠術はメスマル(一七三四—一八一五)の主唱した所で諸大學の教授間に其黨朋も出來、果ては「耶穌日耳曼自然哲學派」: Die christlich-germanischen Naturphilosophen “なごいふ邪道のものを作り”人間を魅する惡魔の存在を證認する迄に立ち至つた、其説く所の動物磁石力は今日でも民俗間には多少の信仰を有し學徒からは研究を持續されてゐる又之に三十年も後れて「ホメオパチイ」を稱する類似療法が現出しサムエル、ハアネマン(一七七五—一八四三)から創て主唱され有力なる治療學を形成し一時は大權力を以て各國の醫療界を風靡し去らんとした。

史話下卷(三九四頁)華山の條項に於て概記した如く華山は天保九年一八三八三月

に江戸參觀の商館長、ヨハンネス、ウエルテイン、ニューイマンを訪ひ、磁石療法は何の謂、又現代の大醫は何人であるかを質問した、商館長の答はハアネマンといふのであつた、是に由て此類似療法が如何に其時代に宣傳されてゐたか、明かである、又、華山はコンスブルッフの事をも質問したが商館長は其人を詳かにせず答へ、又、ビシヨフ(蘭訓でビスコップである、後年箕作阮甫は其内科學を翻譯した)といふ大醫は來年、爪哇に來航すべしと話した(虛傳)、之を按ずるに此類似療法の一事は別段に我邦には渡來せざりし事にて幸福であつた、其理由は何事に據らず我邦の治療家は洋方に心酔する濃厚な傾向があつたといふ事に歸する、然し此療法の精神又基礎は追究もせられず擴張も仕なかつたが、現代の血清及免疫化學は此療法に多少の同趣意を「自家症」又は「自家療法」自家療法といふ點に持つて居ることも度外視することが出來ない。

以上、當時代の西洋醫學の風潮を概括的に摘記したが是等の事柄を明かにせざれば當時の翻譯書類の記する所を推測するに困難である、例之ば前記の小關

三英が「内科大成」の神經症中の所言、病症の學理又之に隨伴する療法の如き夫れである。

而して今日に在て或は何人も顧み且、讀過するもの恐らくは絶無なりと思ふが文政九年丙戌^{二六}の冬^{京都書肆吉田屋發兌}小森桃塙が講述、其子桃郭^{義真}が筆記、門人池田義之^{冬藏}が編次に成る「病因精義」(八卷)といふ書がある、其義之が識した凡例に「醫の道たる治療を以て主務とす、治療の標的は病因に在り」を括論した如く、病因を主とし論述したものである、先、當時翻譯家の常例に準じ漢文にて綱領を提げ和文にて之が註解を施こし行文は頗る暢達で力量あるものゝ頌贊し度い、於是、左に其五六節を鈔録して吾人の回顧に資し併せて當代の醫家が如是、思索念想を識り學び又之を治療上に如何に運用したかを知るの一端とて敢て贅ならずと信ずる。

病因精義の評論

受生第二、人之稟此生也、取元乎四、以成其體、神氣寓于中、以作其用者何。曰水、曰火、曰氣、曰土、是也。蓋水以爲始、火以長之、氣以養之、土以成質。四者相交焉、流而爲血液、凝而成形器、此謂凝固質、及流動質、一身之中雖有百物、解盡畢竟此二物已。是故康健也、疾病也、豈是皆莫不關係于此也。故爲醫者、不辨此二物之體用、則未可語其常及變也。

織絡第三、蓋人託胎之始、父母之精交感而四元集會焉、神氣氤氳活動焉。養以母之血液、而日滋息焉、氣質之中、自然有求力者、彼此相求而相結、以作基本、後復數回各相求其既結之氣質之相合者、而聚屬焉。漸以凝成此形質、而爲骨幹、爲諸膜、爲經脈、爲泌胞、爲諸臟諸器及皮肉毛髮。以其既成者見之、則雖質有剛柔、而形有殊異、精微解剖之、皆盡以纖毫絲狀圓長物、纏絡織成之也。故指凝形諸物之本體、總稱之曰織絡。故織絡者、一身百骸之根基而全體強弱之所係也。是故其稟生之始、受元氣厚重者、則織

絡剛實。而為人壯健。薄少者則反之而柔虛劣弱也。又就于其中，受水氣多者，則以其寒性凝固之質，結成之。而纖絡自緊強。受火氣多者，則以其熱性發暢之氣，寬舒之，相反而自緩漫。元氣之厚薄，水火之多少，相因而成種、人品。是其容儀態度及疾病盛衰之所以有萬不同也，不可不詳矣。

非病第八、非之近因，白脈閉塞，且痿弛也，白脈之爲物，脈狀而如實，起乎腦及脊髓，而經綸全身，通靈液，達神氣，以供知覺運動之用者，故靈液若粘凝，則不易流行焉。或於此，或於彼，留滯壅塞，而遏閉神氣，乃頑麻不遂也。蓋此病自卒中變來者固多，因及證共易知也，自餘輕重不均，由是推之，條理自分明矣。

痲痺第九、痲痺之近因，毒攻腦髓而白脈驟急抽掣也，故其方發也，知覺運動共廢，顛倒而不省人事，見支體強硬，固握搖擗，眼目旋回，吐沫放溺

等證。甚者間時亦所劫奪其精氣。而致痴騖，昏迷，沈神，鬱愁等證也，蓋其證有虛實，類似，傍發等之區別。其遠因有遺毒，自發，連及等之殊異。苟不用意察之。臨治安得適中。

勞瘵第二十八、勞瘵之近因，肺臟膿潰，且全身血液亦腐壞也。故肺癆及脇肋焮腫等，終未見此證者，則其當然，固不足怪也。然他內部諸臟膿瘍，若硬結腫，諸泌胞閉塞，及外部諸種腫瘍瘰癧，耳後發腫，癩瘡，瘻瘡，痘疹等以誘敗全身血液，而膿液來留于肺則皆共陷于勞瘵也。又有天稟勞瘵質人。一二遠因以誘之。便發此病者。又有血液稀薄，靈液缺乏，而諸液自敗，或胃化不健。乳糜不熟，以損壞諸液，雖不必吐膿痰，而發瘦削，內伏熱等，一般證治歸于同塗者。又諸久病終末，與此病同趣，不得證治不關涉者。故此病雖畢竟與肺癆末證一也。然其初所由來異者。則證治固不能同矣。況復類證傍發等，種、多端乎。此其所以不得不別立一門而詳論也。

嗜雜第三十八、嗜雜之近因、惡液浮聚于胃口、其氣上衝于胃管之所致也。其遠因、多食膏粱美味、以損膽液之功力、水油不和、將致腐敗、或膽液質變壞、或酸液聚攻、或風氣痞滯者之所患也。

以上鈔記する所を一讀して當時未だ組織學の發達其堂に上らず組織細胞の知識其耳に入らざるの折柄にして猶四元説、體液よりせる體質論を墨守し、神經（前文白脈に記するもの）の概念を誤り又病因を説くに肺癆、惡性腫瘍（次條に説く）に對する混同迷罔、嘗ならざるを見るのである、之を十九世紀の初葉にして實に隔世の感を惹起せしめる。

次に之を我爾德兒の譯本、「内科選要」、即、宇田川槐園、榛齋の譯又其校註したもの此「病因精義」を對照するに、概して此「内科選要」の文を引用採録（往々行文其儘）したものと謂ふべきである、蓋、ヨハンネス、デ、ゴルテルの原著は一七四四年延享元年に成り之が初譯は寛政四年九二七に、尋で其増補重訂（藤井

方亭の増譯は其原著一七七三年安永二年版に據る）は文政五年二二八に成就した、然る時は桃場の講述釋明したものは一に「内科選要」に據つたことを其年代よりして推測すべきである、但、「病因精義」の綱領篇の統論、受生、織絡、血液、攝養、原病の六節のみは恐らくは他の既譯の者、又我が讀過した者、或は漢醫學の素養を加味して翻案したものも復亦推測するのである、一般に此時代には引用を明らかにせざる行爲が「翻譯學者間に差支無かつたことかと思ふは非か」である、又此翻案の六節中には概して根據を失つてゐる空論、又淺薄にも漫に斷定して此斷定上に縱まゝに立論を左右にしたものを見受ける、是亦當時の一風潮であるを見做して更に是言を以て桃場其人の學識を評斷する訣では無い。

桃場は此病因論を根柢とし更に一生の精力を治療學上の處方類纂に傾注した如き觀がある、其網羅收拾の該博なるは當時前後に於て恐らくは之に挺出したものは無いと思ふ、此書は「泰西方鑑」(五冊)と名づけられ大學音博士岩垣松苗(「國史略」の著者)が文政丁亥中秋撰の序文がある、此文政丁亥は其十年二二八で

あり、前記「病因精義」刊行後一年である、此歳の三月には著述等身の玄澤が歿し、「フォン」、シイボルトは盛に日本植物の研究に没頭した年であつた。

此「方鑑」は原書九十餘部に據つてのみ編輯し在來の翻譯書には據る所、無い凡例に明かにしてゐる程、彼が藏什の富贍をも追懐せしめる、然し其「代用藥説」に於て我邦に存せざる植物を、存してゐる植物を代用する點に就ては首肯し得べからざる者が尠少で無い、此事は但、桃場の創見でなく嵐山、榎林其他の諸家が其途を先に開いたのである、第一、如何に形狀類似してゐるも或は科學上から同屬にしても主効成分の同じきものでなく又之を缺如してゐる者さへある、今、此代用本草の一例を記せば「カスカリラ」根 Cortex Cascarillae (是は Croton Eleftheria で大戟科に屬するもの)を幾那に相近いから或は水楊皮、檲皮、榛皮を代用すゝあるが如き、或は「ヂキタリス」葉を缺如する場合、苦瓢瀧 Lagenaria vulgaris, Ser. (胡蘆科)を代用する云ふ如きは科、屬、種、皆異なるのみかは、當時其主成分すら研究の無かつた物であつて如斯

底電愈瘡水

代用品が數十種羅列してあることは全く机上の空論とも言べきである。

然し此「方鑑」に取るべきは其巻五に於て外科の一項に八十六葉の紙數を費して諸般の外科疾患を區分し其種々の療法を網羅し出處(他も亦然りであるが)を明にして文獻を集成した事は當代外科療法を一統括した業績である、又應用の可否、處置操作の順序をも示教した好文藉を品評する、之に據て復、他の翻譯書の藥品名稱の轉訛、振假名の謬附なきも大約明瞭になる便宜がある。

今、此中から「底電愈瘡水」を次に鈔録する、

底電愈瘡水、刺戟血絡收斂之、爲輕止血藥、創傷輕證傳之速治、又諸打撲傷用之、消散脈外泛溢之凝血、或諸焮腫用之消散、或神經損傷等皆有效。

醋 燒酒各二八 綠礬精八十 沙糖九六

右内硝子燻固封、浸湯内、出藥氣、八日。濾過固封貯、臨用浸布外傳。

引用「底電内科治療書」

此底電の愈瘡水は明和安永以後の翻譯書に載らざるはなく吉雄、杉田、桂川諸家の瘍科に關する書中に必引出され又賞揚せらるゝものである。此ティデンは Johann Christian Anton Theden であつて普國、布列德力大王の軍醫總監隨一の人で軍陣外科の開祖である。其生活年時は一七一四乃至一七九七年で我正徳四年より寛政九年間である。又其愈瘡水 Aqua vulneraria は稀硫酸四二〇・〇 醋二四〇・〇 酒精七五・〇 蜂蜜八〇・〇 蒸餾水三〇〇・〇を正規とするが應用上、七八方の變方がある。謂はれ、彼土にては外科創傷に對し一時非常に應用した。いふことであつた。桃塙が「方鑑」は即、其變方の一であつて硫酸鐵(綠礬精の精字は酒精に緣故が無い)を使用してゐる。

次に癌腫に就て當時の考慮如何を述べるが、今日謂ふ癌腫は硬結、硬腫又は結核と名づけたことは長崎通詞の翻譯を首とし、江戸蘭學者も亦其聲に倣ひ之を結核、硬結腫或は蟹腫、蟹甲腫とも稱した。即、今日謂ふ結核の結核は明治

當時癌腫に對する意見

年代に確定したものである。漢醫家は今日の癌を漠然として失榮(榮養枯衰して惡液質となるの謂であつて佳名である)と稱し獨り乳岩にのみ判然「岩」を稱し爾來、青洲其他皆之に擬して岩を稱へた(今日の癌字は其頃の製字である)。然し他の部面に發生した癌には之を言ひ得ざりしは病理解剖學の皆無時代であつたからである。故に明治以前の結核なる譯名は概して今日の癌を稱した。いふ事を知る要がある。

此「方鑑」より先んずること三十年、桃塙は文化十三年一六に胡乙榮莫、蒲剛の「一七八〇」に出版した撰著を翻譯して「蘭方樞機」五と題し刊行した(此原著者のフカンは何邦の人であるか其書名を詳かにしない。「方鑑」の引用書符號中には蒲商内科治療書とあるは同人であらう、之をノイブルゲル及バアゲル共著の醫史中に搜索したが見當らない)此卷四「外科」部中に「結核癌瘡」の一章がある。今其記する所を掲げ且、之が註解を括弧にし尋で多少の意見を附記し様と思ふ。

蘭方樞機

當時の結核の
意義は癌なり
し事

結核は腋下或は乳房等の泌胞(今の腺)硬腫する也、終に劇痛する者は名けて閉癌^ミ曰ひ、其破壊する者を名けて開癌^ミなし亦潰癌^ミも曰ふ(此區別は已にハイステルの外科に見え耕牛の「紅毛瘍醫鑑」首章に説く所である)、其初めて核を結ぶや(今謂ふ結節である)僅に榛子大にして痛痒あるこ^ミ無し漸次に長大にして蝦脚^ミを畫くが如く、先赤色を發し次に紫色を帶び、或は青色或は淺綠色、後に黒色に變じ焮熱疼痛、中央に堆起し逐日増長して近傍の血脈も亦、復緊張し巨大累々して黒色を發見し遂に皮破れ肉爛れて酷厲なる稀水を流し經久にして濶大し周圍を侵蝕し疼痛惡臭殆^ミ堪ふべからず日に潮熱を發し食減じ力衰へ且、出血、眩暈或は拘急搖擗等の證を兼ね而して死す。

こある、是等記載は癌の性状、經過を概説するに當時の譯書に比し要領を得てゐる、其句中に「漸次長大にして蝦脚を畫くが如く」の形容は素より其名を出自せしめた、其名は希臘語の「カルキノス」、羅何語の「カンケル」即、蟹又蝦の

義でガレイノス(羅馬に於ける希臘の醫家で耶穌紀元後一三二乃至二〇〇年)が始て之を乳癌に用ゐた名稱である、此乳癌に靜脈が恰も蟹足様に擴がり走る處から其外觀に由り此甲殼類の名を附麗したのである、(甲殼の堅硬から出て、蟹足狀に靜脈が擴延するこいふ形容からの名である)、又、「拘急搖擗等の證を發して死す」こあるが、癌の末後は主として榮養上の障害、惡液質の將來(惡液質の名義は適切で無い)、悲酸なる轉歸を例とするが、此痙攣搖擗は合併症の存否以外に如何あるべきこ思惟する、次で此結核癌の治法として數項を掲げ記する中に^{ウイネン}勿乙念(維納府)醫師斯篤兒屈曰く芹葉鈎吻煎熬善く結核を治す、新舊に拘はらず之を用ふ、先、三、五釐を服して漸次増量し已に効を見るに至ては則頻々に多服し三四錢に至る或は餉劑若くは蒸劑に作りて之を外傳するも亦得。

こ識してある、此ストルクはステュルク Anton Stoerk であつて(自一七三二至一八〇三)、當時有名な奇行ある醫家アントオン、デ、ヘイン Anton de Haen

ステュルク及
ヘイン

(註) ヘインはワン、スウイテンと同郷人で共にボオエルハッペの門弟である、一七〇四年ハックに生れ、一七五四年維納大學内科教授となり一七七六年、職務中に死した、其生活中、實地家として凡ての治療上の邪説ペニクラチオンを打排し大著 *Ratio medendi in nosocomio practico Vindobonensis* (1758—79) 十五卷を公にした、是は臨牀年報で生理及、病論の批判的論文集で實際を確實を須要した、彼は體溫器を熱性疾患に應用すべきを宣言し解屍は臨牀上の實驗に照準するに必然執行すべきものであると奨励した、然るに彼は動物磁氣論、夢遊症なきを頻に當時の哲學者、無神論者に左袒、辨護し又惡魔マギイ及「ヘキセライ」(魔道)をも唱道したのであつた、故に後年、ウイルヒョウは斯人にして二重人格者ならんとは不可思議也と痛歎した。

の門弟で、「凡そ實驗を根據せねば皆是空論である」と主張し藥物の動學的、毒性的研究に努力し許多の毒草例之、「シキユウタ」、「コルヒクム」、「ヒオスシ

治癌藥品及療法

アムス、「プルサチルラ」、「ストラムモオニウム」等の實驗を仕た學者で文獻上に著名である、而して癌を治する芹葉鉤吻シクンは *Cicuta virosa*, L. であつて、從前の翻譯家は矢鳩答の字を當てたが矢鳩答は其異種、*C. maculatum*, L. である、然し毒力には異なる所が無い(我國産は大芹、毒芹シクンと呼び *C. nipponica*, Franch. である)、要するに毒物を以て悪性腫瘍を治すとした。

此他癌療法に輕味食品の攝生法、掃腸水銀丸の應用(毎七日に凡二三次、粘魚鬚湯の兼用(毎日三合許ある、此粘魚鬚シクンは百合科、土茯苓シクン同屬の山何首シクン *Smilax Sieboldi*, Miq. 水銀膏少量の外貼、一日二次、帛を以て溫覆數日、大抵消散すこある)、等を説き、若し夫れ無効ならば(結核日に増大堅硬)「始て切斷法の他に亦術の施すべき無し然れども所在に由り、刀を用ひ難く或は其人恐怖、之を肯んぜざれば則亦之を奈何シクンもなすべからず唯、後文所記の方法を以て其痛苦を緩和すべき也」と説くのである、後文所記の方法シクンは芹葉鉤吻の内外用連續の他に官醫保命シクン(保命シクンは惟ふにエヂンバラア府の人 Everard

Hermann Boerhave
1668—1738.
Gerhard van Swieten.
1700—1772.

Homeで格魯布論又、ジョン、ハンタアの著書を刊行した人を指すかと思はるるが、其官醫は大學教授の意であらうか不明である。この説く所に従つて面部の結核瘡に燒酒適宜に溶解した猛汞八毫許、朝夕内服、又龍葵浸(龍葵、イヌホ、ヅキ) Solanum nigrum, L.の内用(乳癌に神効あり、稱せられたもの)次に結核旁近に呼膿法或は發泡法(即、發泡打膿法)を施すの可なるを推賞した。

以上、自然科学過渡期時代の瘡療法梗概及當時の翻譯家が瘡を結核瘡瘡又單に結核も譯したこゝを並び書して多少瘡腫文獻資料に提供した。

宇野蘭齋の「西醫知要」(軍陣外科)書中

ワン、スウィテンの微療毒法、附載、

餘論二則

上文所記の如くライデン大學のヘルマン、ボオエルハアベ〔註してプールの系統的臨牀教授方が聲名を宇内に馳騁し又、桃李滿門の有様であつた、其一人が、ゲルハルド、ワン、スウィテンで維納大學に招聘を受け此「ボオエルハアビアン」派〔註して「プールの宣言し終に維納學派即、「ウィンドボオナ」, Vindobona」を樹立し、佛、英の濟生界を壓倒し長く醫學の中心地を形成した。〕

「ワン」、スウィテン〔一七四五年、女帝マリア、テレジアの招聘により侍醫となり次で「パロン爵」に叙せられた〕の治療書は夙に蘭人に由て輸入され、長崎通詞は勿論、江戸にも入り大槻玄澤の藏什〔斯微旬〕もなつた、而して長崎では吉雄如淵〔永保〕及、吳洲〔永民〕に傳はり醫生の習學に供せ

宇野蘭齋の「西醫知要」(軍陣外科)、書中ワン、スウィテンの微療毒法、附載、餘論二則

られた。

京都の田中尙謙(益)は玄澤門に學び後、長崎に往き研究中、此スウィテンの内科治療書を購ひ得て先、之が翻譯に従事した、時に其友人の宇野義平(義一)に儀に作る、名を廣生、號を蘭齋(ミ)曰つた)も同一の書を得、同じく之が翻譯に勉め其大半を完了して居た、某日、尙謙が長崎から歸洛して其譯稿を蘭齋に示した處、是は亦偶然の事であるにて遂に協力其稿本を修正し之を「西醫知要」(ミ)といふ題簽の下で文政八年(一八二五)十月に刊行せしめた。即、維納學派(「ウインドボォナ」)の治療學方針が我邦に紹介された訣である。

此書に序した小森桃塢文政六年の撰文及、蘭齋の題言、又原著の譯補者、蘭醫ヤコッブ、ハン、デル、ハールの序譯文竝に譯者の所言に據れば原書は「海上外科學」Zeechirurgie の提要であつて航海軍醫の爲に著はしたものである、原書は一七八〇年第五版の者で譯書より已に四十五年を先んじてるる舊版ものである、我邦の翻譯書で軍陣外科學に關するものは先、指を桂川甫周の「海上備要方」に屈

西醫知要の解題(軍陣外科書)

するが、是はヤン、コオウエンブルク撰、一七六六年即、寶曆十年版の者で金創門一部の譯であつた、(原名、「ゼイ、シユキユルシイ」一名「マタロオゼン、トロオスト」、「水兵自娛」)、文化十二年(一八二五)に其孫甫賢が之を校刊した(記するが、今日之を世に傳ふるや否や未考である、次に史話下卷四〇一頁にも記した大槻俊齋の「銃創瑣言」(獨逸の設劉私ヘリクスが原著、嘉永甲寅四月即安政元年(一八四四)の譯)は銃創のみに關したものであるが、此蘭齋譯成後、二十九年の間隔がある、又、内容に於て全く別途の者である、又史話上卷第三〇頁に記した「軍陣金瘡秘極卷」は吉永升庵の著であつて我邦戰國時代、金創家傳來の療法を洗鍊した固有のもので翻譯書で無い(延寶九年、即、天和元年(一六八一)に成つた)。

此「西醫知要」の内容に就て何等特記すべきことなく唯、普通の治療學であり、少しく航海中の攝生法に關して筆を着けたのみである、然し此「ワン」、スウィテン時代、維納學派の勃興に際し、當時、文化の隆昌と與に朝野に論なく流行

した娛樂疫、'Justseuche' (花柳病)に對する療法に其意見を追懐するは文獻上に必要を考ふるので次に其大略の零片を述ぶることにした。

當時の性病治療法

當時猶、淋毒、下疳と與に微毒は、一元説であつた、又微毒に就き、其初發の下疳又は淋(又微淋の名を附して)より漸次其毒物が血液中に循環し諸般の惡液を基つて諸症を惹起し終に骨質を侵蝕するに至り其經過は先、軟性なる「トオビュス」Tophus syphiliticus となり或は「グンミ」Gumma となり又、硬性なる「ノオシユス」Nodus 或は「エキスオストジス」Exostosis となり、激烈な夜痛 Dolores osteocopi (nocturni) を將來すといふに至る迄、説き去つてゐるが、其期の區劃に三元説は未だ接觸せずにある。

ワン、スワイテン液

治療法には一七五八年^{實曆}を記念とする「ワン」スワイテン液 Lignor van Swieten 又奇驗酒といふがある、是は猛汞丹(末)^{錢十六} 火酒^{十三貫三} 火酒^{百四十}から出來て其一匙を大麥煎汁に和して用ゆるのである。

此方は獨り彼土に喧傳した許りでなく、我邦にも長崎方面にも傳來し耕牛其他の人によつてブレンク外科、花柳病科の原書中の者と與に賞用されたと思惟する、又、當時已にトゥンベルクも「水銀水」なるものを教へたことは史話上卷^{第四六}に記して置いた。

當時又、此水銀(猛汞)を諸家の方法に従て應用した、今次に其一斑を紹介する。

一、プランカルト方(一六八四年)

猛汞^{錢一} 水^{百六} 隔日一匙、七回服用

二、氏名不詳、白前方

細葉白前根煎(白前^{Yakata} Cynanchum japonicum, Hemsl. 又 Vincetoxicum purpurascens, Morr. et Decne.) 猛汞^{三乃至五厘} 内服用又潰瘍に貼敷。

三、ガラスホイス方

白前根煎 火酒を加ふ、此根煎には前方の如く猛汞を加へたものである

が用量用法奥に記入を漏らしてある。

四、接骨木糕子コシキウ十六錢乃至 猛汞三乃至 五五 二十服に分ち用ふ、一日の用量不記。

但、「コンセルフ」は糖劑であつて砂糖を研和し軟膏様硬度にしたものである。

要するに蘭齋の譯述は原書に對し眞率なものであつたが、邦人に對しては譯述に俱に多少の註釋を施し又は殊に翻譯書に依頼する治療家に對し藥品の説明を殷懃にすべきである、彼の大槻、宇田川諸家は業已に其範を示してゐた。次に此等の點から餘論を掲げて置く。

餘論二則

餘論、一、土肥鸚軒著、世界微毒史第一五四頁

(前略)以上、蘭嶼獨諸家ノ意見ヲ通覽スルニ佛ノリコール氏ノ淋疾微毒、異毒說當時未ダ世ニ出デズ、且、下疳ニ對スル硬軟二元ノ區別尙渾沌タリシニ於テ今ヨリ觀テ自家撞着ノ論少カラザルハ勿論ナルモ之ヲ漢方醫說ニ

比スレバ精粗素ヨリ同日ノ談ニ非ズ是等西洋ノ微毒病理論ハ夙ニ大槻、吉雄、杉田、日野、緒方等ノ蘭學者ニ依リテ我國ニ輸入セラレ殊ニ微瘡新書、微毒一掃論、扶氏經驗遺訓等ノ諸書ガ斯學ノ發展ニ資スル所、頗ル大ナリシハ想像ニ難カラズ而シテ驅微法ニ關スル知識經驗モ亦漸ク國內ニ普及シタルナルベシ、只憾ムラクハ渠等蘭學者ノ徒ハ只管、西洋ノ學術ヲ輸入スルニ急ニシテ蟹行書ノ講說ト翻譯ヲ以テ學生ノ能事トナシ之ニ據リテ自家獨創ノ見ヲ立ツルニ暇アラズ其餘弊ノ及ブ所、明治大正ノ世ニ至ルモ漫リニ歐米ノ學術ヲ崇拜シテ毫モ自立スル所ヲ知ラザルコト彼ノ自ラ東夷ト稱シテ耻ザリシ徳川時代ノ腐儒ト殆ト擇ム所ナキ者多キヲ見ルナリ。

餘論、二、

之を按ずるに洋學者、換言すれば翻譯家の多數は西洋の文物に心酔し漫に崇拜を敢てした事は言ふ迄も無い、要は一般に根本素養の普通教育に缺く

所多く、殊に科學上の知識に甚貧弱であり論理に本づける批判能力が無かつた結果である、之を回顧するに翻譯の業は天文、醫藥、物産、植物、地理等に長崎の通詞から開始したのである、此等の人の多數は自家に凡ての基礎學科の素養又修養を求むることは叶はず唯、辯舌に勵み一生を此業に捧げ來つた、之に據つて然しながら學者は各方面に紹介を得、其知識聞見を擴大し得た、就中、治療の末にのみ扱々たる醫家は此領域に向て略ぼ輪廓の一部分にもせよ理會し得る様になり漸く進んでは基礎醫學の方面、解剖、理化學の方面に幾多の星霜間に於て知識を把握するに至つた、如是き状態に於て自家獨創の見を立つる迄に樞要とする経験を累積し得なかつた事は亦已むを得ざる事である。加旃、文章を理窟を釘釘とする漢醫家は幕府の要路を占め西醫學に對し異端を呼び蛇蝎視し甚だしく嫉妬猜疑の念を潑刺した、實際に無根の事實を構成し機を視ては讒誣を縦まにして極端の災厄を蒙らしめた、或は翻譯書を一々檢閲し漫に刊行を阻礙し又禁止

したのである、是等の點から自家獨創の見を發表し凡ての點に大手腕を奮ふことなきは夢にも考へ得られざる有様であつた（高良齋の驅梅要方の如きは發賣禁止になつた）又對譯辭書の刊行は其筋の不認可といふ下に空しく遷延して數歲月に及んだ等は論外の沙汰である、然るに天保弘化年度には外交事件は頓に煩悶となり、嘉永、安政に及びては志士縱橫議論沸騰もいふ有様で尊王攘夷、公武合體論等囂々として紛起し幕府の威力は、漸く財力と共に萎靡し終に慶應の革變に至つた、此騷亂状態は約十五年間を持續し明治の聖代になつたが其間、蘭學は見る影も無く其跡を没し、外國語は更に英學に移行し世上一般は掌を翻へすが如く英語の世の中に打て變つた、然し不可思議にも蘭醫學には同じく印度日耳曼語系たる獨逸語に何等變ずる所なく移行したのである、抑々蘭人が交通の開始から概して獨逸原書の蘭譯本を我邦に輸送したので外科を主とし内科、眼科、婦人科又、基礎醫學の原書は獨逸書で其學統は悉く獨逸系統であつた、夫れが明治の聖

代初年から獨逸系統の醫學育英の途を新たにし直接に其針路を指南するこ
 ミなつた。

學習の謂たる反復模倣して其眞理を攻究するのに在て、隨て學問には地
 理の境界は無いのである、歲月の相後れたるは止むを得ないが今や我醫學
 が雄を宇内に稱せんこしつゝあるこゝは人の皆認むる所である、於是、往
 昔を回顧するこいふこゝは亦至當であり自然である、即、蘭醫學は通詞又
 翻譯家に由て平戸、出嶋の一小點から東漸して京都大阪江戸に播敷し又敬
 崇すべき醫學者に由て兵學、政治學其他の實科學方面にまでも指を染むる
 に至つた、之を顧ふ時は彼等が漫に洋學に心酔して恍惚たりし事は却て是、
 我邦の文化開明に多大の貢獻を致したこいふ成績もなつたのである、是等多數の
 人々が明治大正の御代に在て贈位の鴻恩を荷つた事に於て堂々として立證
 された。

(壬申七月二十一日、理堂道人)

會津藩の醫事及、其蘭醫學開始

(小序) 記者たる我は會津藩士の家に生れ、生後三年、明治戊辰
 六八の兵亂に際會した、而して傳家の諸記録又文書は皆掠奪する所
 になつて我等肢體以外の者は何等遺存する者は無かつた、其後四十
 年間の星霜中、我父梅屋は我祖父美濃部克翁に偕は是等舊記の搜索
 又謄寫等に執掌當ならずであつたが素より九牛の一毫に過ぎない、
 今、父梅屋が大正十二年一月歿後の遺書群籍に就き閑に乘じ調査に
 励めたが、他の事項は兎に角、我主とする醫事上の事柄に關しては
 見出すべき資料が匱乏し其連續が歇絶してゐる又質問せんこしても
 今や故老皆亦空しである。

次に記する者は故に斷簡零墨の蒐集であつて連續が無い、連續な
 きものに史的の順序を追逐し得ない事は當然である、然し出來得る

限り整理して其道を踏んだこゝを一言する。

其一 發端及序説 藩醫及、醫學寮の創設、十全館、本艸家、

江戸に出でた人々。

今日會津藩の禮樂、文藝、武術其他の技術又、教育、政治等に關する文獻は「日新館志」に咲つべきである、此書は後文折に觸れて言ふ所なるが、吉村寛泰の編輯に成つたもので三十卷物である、寛泰は稿を易ゆる事四次、表葛を更むる事十又九年であつて文化二年〇一八に起稿し文政六年二一八三月に其稿を脱したのである(序文は古賀侗庵の撰で文化三年〇六八に成つてゐる)而して此大著は第七卷に於て醫師(本傳、外傳、本草學)に關するものを記録したのであるが、「館志」第五、第六、第九、第十五卷と與に五冊が全く此世から散佚し了し我主要とする醫師卷が或は此渾輿間に存在してゐない事となつた(註、今日傳はる「日新館志」原本は岩代大沼郡、川路村小谷に於ける初瀬川健増の所藏に歸してゐるもの殆ど皆無と謂ふべきである。

て此五冊を缺如し傳はらない、大正十二年中に菊池研介が之を鐵筆謄寫板にして七十部を限り有志間に配布した、父梅屋は是より先、已に明治四十五年中に初瀬川氏より借用且謄寫して我家に藏して在る。明治廿八年六月佐藤相城著、「會津史」十卷あるが書中、醫學上又醫人に關して記述するもの殆ど皆無と謂ふべきである。

之に據れば藩祖正之(土津公)が寛永二十年^{四三}七月、會津に移封されてから以來の醫師氏名、其事績、之を概して醫事の次第が文政初年迄、一切湮滅した譯である(好し他の記録類に散見するあるも)、於是、此缺本たる館志は止むを得ざる事として何等之に關し收束した文籍を搜索したが唯、安部井澹園(名は鱗、字は士龍)の「會藩編年略」中に於て正之侯時代に官醫、土岐長元が承應元年^{五二}に先儒が人主を輔導した成説を著はし之を秀忠に獻じたといふことを知つたのみである、而して此官醫たる土岐長元の事績が醫事上に如何であつたか今に考へ得られない。

尋で現在してゐる「日新館志」第十九卷「書目略解」の一篇「醫數類」(數は算學)中を覽るに書名、撰者氏名及解題が記入されてある、今、左に其全部のみを抄録する(原文は漢文なるが之を和文とした)。

本草日用集、横田俊益撰、「俊益年譜」、寛文十二年^{一六六}十二月の條に曰く之を著はし之を跋し之を雲庵に授く。

保産回生參考、横田俊晴撰、「俊晴年譜」元祿六年^{九三六}の條に曰く今茲、産書を編集し名けて「保産回生參考」と曰ふ。

經驗祕要五卷、山内持光撰

捷徑方鑑二卷(前後編)、同上

痘麻全書 同上

醫事獨見一卷 同上

卒病要方一卷 同上 右五部、山内氏祕して之を見るを許さず。

傷寒論經傳晰義十卷、兒嶋翻撰、此書祕藏して未だ之を見るを許さず。

古醫方晰義五卷、同上撰、諸名家の善説を摺摭し諸本の異同を是正す、國字を以て傍註標掲し以て蒙學に便せり、古醫の深意を發するは百世の拘擥を拔除し千載の懵懂を燭耀す謂ふべし、皆川愿、嘗て「傷寒論經傳晰義」に序し其書祕して未だ上木を許さず、是を以て姑く其序を取て之に冠し以て皆川氏が冲夫(翻)の字に取るあるを見る、其次凡例二十一條、其次、翻、醫學大意を口授し其男君玉之を筆記するもの凡て二十四條、卷末又口授筆記を凡四條を載す、享和二年^{〇二八}秋九月、江戸書肆逍遙堂上木す。

痘疹證治大成三卷、同上撰、「痘科鍵」は池田錦橋翁祕密口傳、悉く之を載す。痧脹晰義一卷、兒嶋翻自序に云く世に「痧脹玉衡」あり清の郭右陶の著はす所なり、説くもの以て痧ミなすは南方の有る所にして北方に之なし、况や吾が日東の人おや、遂に廢して之を論ぜず、余は然らずと曰ふ、春秋は魯史なり、莊の十八年秋、蝱あり蘇公、暴公は周人たり、雅に何人か斯編あり

て俱に孔子の取る所となり六藝に列ね、後世に播す、此に由て之を觀れば春秋の時、周魯亦之あり、清に至つて亦之あり誰か吾東方果して之れ無きや否やを知らんや、程應旂が所謂る病、固より古にあつて今や則ち亡きが如きに非ざる也、亦、今にあつて古は則ち亡き者の熱病ニ痘疹之の比に非ざる也、寛政二年九〇七春二月。

診脈精要一卷、同上撰、古人諸家の脈論を集め戴曼公、沈士鐸が發明を合せて之を詳審にす。

腹診精微二卷、同上撰、五雲子先生の腹診傳を首とし諸家の腹診説を合せ之を圖解して蒙學に便にす。

醫方訣三卷、同上撰、玄治法印が口授秘訣を集め五雲子傳來の方意を合せ治法を論じ以て諸生に便にせし也。

醫林良材二卷、同上撰、明の龔廷賢より五雲子に至る其傳來する所の奇方名方悉く之を集録す元ニ書名なきを翻之を名づく又、病門を分ち未だ謾りに

人に傳へず。

產育口傳抄一卷、同上撰、子玄子以來諸子の發明を合せ以て産科全書ニなす。

千年眼一卷、同上撰、文化二年〇五八秋九月、家少を携へて郷里に歸へり、途に山中を經、小酒店に憩ふ、一老翁あり鬚髮皎白、飄ニとして神人の如く奇論妙術、人の意表に出づ、翻嘗て仲景後の方を潛かに疑ふあり、翁の語るを聞くに及び恍然として得るあるに似たり、竟に是編を著はすニ備さに其自序に見ゆ、而して其所論數條は大凡汗吐下の三事のみ末に脚氣論一編を附す。

古醫方活套三卷、同上撰、未だ淨書に及ばず。

奇方類選十卷、同上撰、未だ淨書に及ばず。

安産要訣一卷、三宅世則撰、是書元名、保産機要、秦郡湯處士の著はす所なり、是より先、錢處士が「備閣寶生」大率此に類す、明の吳嚶集庵深く之を好尚

し以て朱丹溪が「產寶百問」、楊子建が「十產論」、陳自明が「婦人食方」、共に之に如かずこなす、京師醫、竹中通庵得て大に喜こび自ら之が錯簡を正し且、其發明する所を加へて之を刊行す、然れども漢文にして特に婦女子に便ならず、故に譯して和語をなし、専ら讀記に便にす云ふ。

詩經草木腊彙五卷、三浦壽庵撰、壽庵、草學を安田元仲に受く、專精一力、山野を探求し詩(經)の草木百七十餘品を得、其花葉根莖、腊して紙面に貼し和名、漢名、詳に其側に記し且、其出據を出し輯して大冊子こなす、序は則、武田釋、安田篤古及余、余弟篤敬、跋は則、其自述云ふ。末に文化七年一〇八秋八月書す。

仲景方藥草木腊彙一卷、同上撰、其體は詩の腊彙に同じ、序は則、安田篤古、跋は則、其自述、末に文化十年一三八夏五月書す。

醫道解惑指南記五卷、芳賀流水撰、部十五を分つ、曰く方劑、曰く分量、曰く水量、曰く水煎、曰く煎法、曰く藥品、曰く外候、曰く禁毒、曰く診脈、

曰く因困、曰く按腹、曰く主治、曰く丸散、曰く論義、曰く書論、又、人參部を附す。前後自序。末に文化八年一〇八秋八月書す。

醫考文義一卷、同上撰、初學及病家の爲に群書の精義を抄録す。

以上七人の醫家(一人は本草學者)其著書二十五部が登載してある、以て我藩に寛文、元祿以降、文化年度間に漢醫家又本草家として是の如き人々の有つたことを知るべきである、然るに其著の今日に傳ふるものあるや不明である、特に其中に秘藏して人に示さないもの、淨書せずして稿本の儘、家藏したさいふものもある又、安田元仲(篤古)及三浦壽庵の如き本草家(腊葉家)の氏名は白井光太郎が「日本博物學年表」中に見當らぬ所である、一言にして之を蔽へば明治戊辰の兵燹は是等の人の書物を湮滅したのである。

次に横田俊益父子に就て記さんに、俊益は山内氏勝なる名門の一族であつて

加藤嘉明に仕へ後、藩祖正之侯(慶長十六年^{一六}五月七日生、寛文十二年^{七二}二月十八日薨)に仕へた程朱學の儒者(儒醫)である、小字は三平、三友と曰ふた夙に林羅山(天正十一年^{八三}八月生、明曆三年^{五七}正月二十三日歿)の門に入て儒學を修め又醫道を野間三竹(玄琢の子、名は成大字は子苞、法橋、法眼、寛文の初、京師に入り御醫に擢んでらる、父の號、壽昌院を襲ぐ)に學び、獨り其才學のみでなく君子人として深く世に敬重せられた、元祿十五年^{〇七}正月六日壽八十三で歿した(即、其生年を推算すれば元和六年^{二〇}とかなる)、其著に「土津靈神言行錄」二卷あつて此世に傳へられてゐる(家藏本)又「本草日用集」五卷は「横田何求年譜」(家藏本)には承應元年^{五二}三十三歳の時の作としてある。前記「俊益年譜」寛文十二年^{七二}十二月に之を著はし之に跋して雲庵に授くこゝは舊著に跋して門下の雲庵に傳へたこと、解釋せらるゝ、又「何求年譜」延寶七年^{七六}六月、六十歳の時、左背に癰を發し當時の外科、岩田意慶父子(後文に記す)の治療を受けたが、自ら死を決し後事まで遺る所なく處理した、然るに

全癒恢復して益健康になつたこと見えてある、而して俊益(何求齋)は講經の餘暇、自ら家族中の病者又兒孫を醫療した事共が年譜中に散見する。

俊益の子俊晴は父の業を繼ぎ儒者として講所指南役となり、名聲も亦、父と等しく正之侯以下二代、正經(正保三年^{四六}十二月二十七日生、天和元年^{八一}八月三日薨)及正容(寛文九年^{六九}正月二十九日生、享保十六年^{三七}九月十日薨)に歴仕した、俊晴には男子なく弟俊將の子、先次郎俊孚を嗣としたが俊孚は在職中(延寶元年^{七三})奸臣を君側より除かん謀り却て讒誣に遭ひ、四年間遠郷の命を受けた、後、赦されて郷に歸り醫を以て世に立ち名聲が高かつた、俊晴は承應元年^{五二}十二月十六日、會津に生れ、自ら「日躬記録」を作り正徳四年^{一四}十二月に及んだが其六十三歳の時まであつて歿年が不詳である、先次郎、俊孚は正徳四年に十三歳で伯父の養子となつた、其歿年も不詳である。

註、以上「横田何求年譜」三卷、「俊晴年譜」一卷、及梅屋著、「會津人物史」卷五よりして其要を撮記した。

兒嶋翻(宗説)

會津藩教育考 卷二、學史下、
享和三年(一八〇三)四月
十七日の條下
に、江戸に滞
在してゐた侍
醫兒嶋宗説
(即翻)が江戸
から徂徠學派
の儒者、伊藤
金藏(藍田又
龜年と號じ
た)を伴なつ
て來た、金藏
は一月餘、日
新館で講筵
を開いたとあ
る

三浦壽庵

次に山内持光、三宅世則、三浦壽庵、芳賀流水に關しては座右の諸記録を簡
閱したが事蹟の微すべきが無い。但、兒嶋翻(前記著書十三部ある)は當時の大
家であつた事は其著に據り明らかである、翻名は宗説字は冲夫で、號を楊阜と
曰ひ身、侍醫となり其學識は秀邁と謂はれ又詩才にも長じてゐた、菊池五山が
「五山堂詩話」卷五に詠蝶七言律が載つてゐる、又彼が「傷寒論經傳晰義」は皆
川愿(淇園、文化四年〇一、五月十六日歳七十四にて歿)の序する所である、翻の
子名は未攷であるが、字を君玉と曰ひ父の業を嗣いだ、又翻の生活年代は明和
から文化年代に及んだ事は其著書中に由り分明である。

三浦壽庵は本草學を安田元仲に受けたとあり其著は文化七年又十年に成つた
として同じく文化年間に活躍した人と思はれる、此元仲は日新館醫學寮の別館
十全館の會讀師、安田忠の字である、此人に關し後文に於て更に筆を着ける。

更に又溯つて藩祖正之侯時代を考ふるに、「會津古人傳」文政十二年三月、若に正
水光義の著はす所

日向徳達

之侯の侍醫に日向徳達といふがあつた、是より先、正之侯は甲斐の長田徳本(永
正十年一三に生れ、寛永七年三〇二月十四日歿した、正之侯が二十歳の時に當
る)を召聘せんじした、然るに之を辭して門人中から此徳達を推薦したといふ
のである、今之を我父執、小川涉の「會津藩教育考」(明治十六年八月に成り昭
和六年十二月刊行)に案ずるに正之侯に召出されたのは寛永十七年四〇十月と
ある、然らば徳本歿後の十年である、徳達は召聘以來三百石、後、五百石に昇
進し侍醫中の隨一であつた、前記土岐長元の官醫となつたのは徳達の後であつ
たらう。

當時民間で之に拮抗し町醫を以て自ら任じた丸山一雲といふがあつて奇行に
富み専ら窮貧を賑恤するは醫の任務なりとして路の遠近を問はず往診施藥し、
其眼中には權門富豪を入れなかつた、其行蹟及二三の挿話が「會津古人傳」卷之
上に詳かであるが時の大老井深茂右衛門重光(萬治二年一六十一月より元祿二
年一六六月に至り隱居)を治療した行爲なきは奇抜である。

丸山一雲

又此時代、即、寛文二年^{一六六}三月に南蠻外科流の岩田意慶が市井から拔擢せられて官醫となり俸二十口を賜はり、寶永五年^{一七}壽八十四にて歿した。會津藩教育考」に記してある、是に據つて推算すれば其生年は寛永二年^{二五}である、即、前文に記した如く横田俊益が背癰を治療した人として其技術は南蠻流であつて以て閩洛派の大家に施治した對照は面白く思はれる、好し意慶は薄俸であつたにせよ(本道に對し凡て一般に如是であつた任用された上は必、其進退出所も明らかであつたに信ぜらるゝが其傳記が存在して居ない、唯、自按する所では意慶は恐らくは長崎に往き栗崎流又は吉田流の醫學を修めたものと思はるゝ、當時栗崎流は已に三四代の頃にも及び諸州に播延した時であつた。

元祿二年^{八六}に成つた「舊證類聚」にいふ記録には二人の外科醫名を掲げてある、一は藤田了甫、一は岩田權左衛門である、此は意慶其人の通稱と思惟する(藤田了甫に就ては之を後文に記する)、後年廣澤安任(字は士遠、牧老人と號じ、

容保侯が京都守護職時代の公用人)は其記憶に據れば岩田知足といふ名醫があつたが意慶とは別人である、其事は「會津古人傳」に出てゐると思ふところがある(前記教育考の欄外)、之を我所藏の「古人傳」中に檢出し得ない。

幕府が澤野忠庵の門人且、女婿の杉本忠恵を聘用したのは寛文の初年である、幕府親藩の會津藩が意慶を拔擢したのは其二年であつて正經侯時代であつた、即、殆ど同時に葡萄牙流の醫學が會津藩に行はれたのである。

此「舊證類聚」に當時の醫官氏名を祿高が記してある、日向徳遠五百石、中村芳庵三百石、關三宅二百五十石、田中玄與二百石、佐瀬甚九郎二百石、田中春佐百石、服部丹齋百石、澀谷香賑百五十石、即八人なるが日向徳遠の事は上文に記した、而して服部丹齋の他は事績不明である。

此服部丹齋に就て愚按では二代壽慶で玄沖と曰ふた人で無いかと思ふのである、前記「何求年譜」の正保二年^{四六}の條下、八月十八日外舅服部壽慶死、年五

十九歳とある、其六月に俊益は壽慶の女を娶つたのである、而して俊益が慶安二年^{一六}三月に江戸に赴き野間三竹の門に入て學び夏、三竹に台命を受けて洛陽に上つた時、妻の兄、服部玄冲も亦洛陽で醫を學んでゐたのである、俊益は常に之を教導訓戒して屢其危厲を救ふたこと記してある（恐らくは狭斜の遊を言ふのであらう）又其三年四月の條下には俊益は玄冲を携へて江府に到り玄冲は先、會津に還へり俊益は稍遅れた、承應二年^{一六}五月^{一六}玄冲其他の生輩、俊益が「固易傳義」の講釋を聴くことある、天和二年^{一六}四月晦日の條に龜娘、服部氏に嫁すことあるは玄冲の妻となつたことと思はる、貞享二年^{一六}八月九日玄冲罪ありて稽古堂の寓主、無爲庵如默（有名な隱逸傳中の人物）と與に小川庄、眞取村に放たる事ある、後、赦されて元祿十一年^{一六}九月^{一六}二月玄冲は月俸二十口を賜はり父名を襲ぎ壽慶と稱せしめられ十二月、新たに祿一百石を賜はる事ある、然し玄冲と丹齋同一人として疑ふべきは「舊證類聚」が元祿二年に成つた書であることすればである、爰に後考を待つ他のが無い。

藤田了甫

又「何求年譜」貞享三年^{一六}八月の條に醫師、山川玄周（又玄秀ともある）、及、森仙庵の名が見え、仙庵は俊益の女姪、勝娘の婿とある、又寛文十一年^{一六}七月の條下に前文岩田意慶の處で記した藤田了甫の事を掲げて、身賤役（外科を指したのである）を以て斗米（俸祿）を受け後に外治の業を以て醫工の列となる（官醫の意）と言ふてある、又此了甫は幽仙なる醫生を尊みなし其後を繼がしめんことを前年^{寛文十年}に死んだのである、家族の人は其後を立てんことを頻りに請願したが正經侯は輒く許されなかつた、於是、俊益が哀願することとなり始めて聽さるゝに至り、其祿を食むことが出來た事ある、即、意慶と與に此了甫、幽仙は外科を以て世に聞こえたのであつた。

次に醫學寮の創立と其沿革とに及び當時の本草家を説くこととする。

藩祖正之侯の志を紹ぎ正容侯は元祿元年^{一六}八月一之町に國學を起し聖廟を營

田中玄宰は會津藩相中の偉傑であつた(寛延元年十月八日生、文政五年八月七日歿、年六十)

み名稱を「講所」に曰ふた、後、更に殿堂、齋舎を造營した、享和三年〇三八月に大成殿聖廟釋奠の制を定め安部井鱗之が司業となり古屋兩(昔陽)に號す、後文再記)の意見を參し大老田中玄宰の總司の下に諸般の儀禮を準備し十月九日に遷座式執行と與に「日新館」に改め稱した、而して毎年春秋に釋典の禮を行なひ次年、即、文化元年〇四に始て文武兩道の學寮を完成したのである。

日新館の戟門を入て左方を西塾と稱し二經塾之を占め其北方に醫學寮なるものが狹隘ながら設備せられ、之には總教一人、助教二人、句讀師三人が其常任であつた、然し外に侍醫又目見醫師から撰擇して其教導を補佐せしめた、但、此醫學寮は已に講所時代から設立せられてあつた事は其享和元年辛酉十月〇一の令條に由て明らかである、夫には同社講習の第一義、時間、入學規定、修身本領等を宣し學科には本道、外科、小兒科、痘瘡科、本草科の五科を分ち各科には第四等から大一等迄五級制を定めた、又生徒は悉く士分より入學せしめ、彼の臣視せざる町醫師の子弟は入學不可能であつた、町醫師は當時扶持米を以て合

カ米を賜はり賤伎の者にして合力醫師に名づけられて居た(壓制行改法に於ける限定教育法)、又此令條なるものは時機に應じ多少の展開を期し時々改正されたこともあつた、而して開始より狹隘微弱な醫學寮は文化八年一八七月に五之丁米廩の西鄰に新築せられて十全館に改稱した。

先、之が造營を司掌すべき命を承けたのは醫師又は本草家(物産家)で會讀師といふ肩書の安田忠(篤古)及、學館預役吉村新兵衛寬泰(「日新館志」の著者)であつた、殊に寬泰は其建築費中に獻上した爲、符俸米を併せて祿一百石に昇進した、然るに約九年を経過し此十全館は文政三年二〇八に閉鎖するこゝになつて凡ての授業は再、舊醫學寮に併合した、其理由として記録したものは無いが當時經營及維持上の財政困難があつた事は他の點から十分に推測せられる。

後年の事であるが天保七年三六十一月に市在醫(此名稱は町醫師を爾く云ふたのである)の子弟が遊學資料(京都、長崎、江戸等)を募集した事がある、素より藩醫子弟の官遊、留學資の支給は醫學寮の側から及ばずながらも存在して

安田忠(篤古)
日新館志の著者
吉村新兵衛寬泰

るたが、市在醫の子弟は二三年が最多く四五年は稀に、未だ其蘊奥を究めざる内に歸國する者があるので加賀山翼(後文)は佐藤雄庵等と協議して封内の醫師一人で一個年金一步を積むこと十五年といふ期間とし其利子を以て遊學資に充つべく規定して建議した、此建議は有司も認可し封内の醫師も皆賛成し成立してから五年目になつて實行される事になつた(故に天保十二年^{一八}から文久年間^{六三}まで二十年間成立した訣である)。

我藩政は財政の一を漆と人参の栽培に求めたことは事實である、随て本草學者の採用も亦厚かつた、寛政六年^{九七}四月(一)に七年ともある江都から本草學者、佐藤平三郎成裕を招聘して正容侯は先、御徒之町の藩侯の御藥園に朝鮮人参の増殖に勤め更に、日新館所屬の穢多賀町の藥園(元來日新館大成殿の後背に藥艸園といふがあつて其草木種數、百餘種で豊富でなかつた)中に附子、黃連等より甘蔗、椎茸等の栽培に力を盡くし又近き山林地帯には漆を増殖せしめ

佐藤成裕

た。

前文に屢記した會讀師安田忠(篤古)は成裕の指導も受け相偕に郡村を巡回し漆の増殖の如き有益な事業を起した、當時の殖産の功業は此人に負ふ處夥大なものであつた、忠は文化元年^{〇四}に本草學指南に任ぜられ、藩の冠冕であつた、文政二年^{一八}に忠は其藏書五百餘卷を醫學寮に寄附し老年を以て隱退した、藩侯は痛く之を惜しまれ種々なる恩賞を賜はつた、後二十年、天保十年^{三九}八月八日に病に歿した(是等は都て系譜及墓碣に記するといふのであるが搜索多年未だ之を得られずにある)、前記、腊葉家の三浦壽庵は門人であつた。

安田忠

(註) 佐藤成裕は江戸の人で字を士紳、號を中陵とひ秀我堂を其堂號とした、年十七にして已に本草に通じ關左八州を歴遊して藥草を採集し、薩州侯、上杉侯、松山侯(備中)、水戸侯等に招聘せられ或は栽培の道、或は本草學を講じ、藥草と栽植法を教へ或は物産興業の本末を釋明し到る處に富源

の起すべきを説いて尊重を受けたことは尋常でなかつた(史話卷之上第四四八頁、吉雄耕牛ニ關繫參考、其著に温古齋を冠する「稜志」二卷、「附子辯」一卷、「金薯錄」、「山海庶品」一百卷等(天保元年)がある、嘉永元年(一八〇八)六月六日水戸に歿した、壽を享くる八十七であつた(生年は寶曆十二年^{六一七})。

是等栽培の努力は實際に數年ならずして會津人參として其名を東北に動かし其藥用功力の如きは文政二年一八業已に幕府の醫官(針科の侍醫)として有名な石阪宗哲(竿齋)號す、「針灸知要」の著者、シイボルト門下美馬順三、蘭譯、「日本」第二板に登載)に由て之を實驗に徵せられ朝鮮産も毫も差ふ所無しと説き、爾來漢醫家皆其聲に倣ひ、遂に本藩財源の一を爲すに至つた。

又本草學の研究も隨て旺盛となり醫學寮の師範役は期を定め生徒を引率して郊外山谷を跋涉し、藥草の採取をして腊葉をも造つた、或は學校奉行なきが先達となり數日の日程を費したといふ事であつた、今日是等に關する記録の湮滅

石阪宗哲(竿齋)の證言

は遺憾とする所である。

次に醫學寮師範として本草學者であつた云ふ次の二人に就て一言する。

杉原凱山

杉原凱山

は名を外之助、諱を愷といふた、文化三年(一八〇二)を以て若松に生れ、長じて安部井裝(幅山)の門に入て朱子學を修め最、經史に通じ後、帷を下して徒に教え、亦本草科に通じ、未だ世に公にせざりし著作數篇が家に傳えられてあつたが皆、明治戊辰の兵亂に亡佚したこの事である、天保の末年には學館預(アサヒヤ)役、大學助長兼、北學長となり後には醫學寮師補助、次で教授に擧げらるゝに至つた、當時、君子人を言えば人必、凱山を指した、明治三年に陸奥斗南に移り同四年(一八七三)二月十四日、六十六歳を以て病に三戸に歿した(杉原先生之碑、沖津醇撰、我祖父春武は晩年に及び(嘉永、安政の頃)、凱山の門に入り史學を修めた。

の家柄は元、金鼓役であつて嘉藏は先、之を繼紹し陣鼓、陣螺の製作に其妙を得るに到り、乃ち音頭おんどといふ名工の稱を得るまでに立身した、幼時痘瘡に罹り一眼を眇したが却て之が自慣の媒を爲した三人に言はれた、然るに文化五年一八一八正月、蝦夷唐太の征戍に際し陣將北原光祐に屬して唐太に赴いた(此時我曾祖父春温は利尻嶋を戍守して病に斃れた)、任畢り歸藩の後、毅然として志を立て江戸に赴き、檢校堀保己一の門に入り學に技に勵精數年に及んだ、殊に見る所あつて本草學に心力を傾注し日々郊外に出て草木を研究し寢食を忘れて屢、人の戒しむる所なつた、終に細草さいそう、微木びぼくの名稱、原質げんしつ或は藥草の効用悉く通曉せざるなきに至つた(之に關しては必、其師授する人のあつたこゝは當然である、然るに傳ふる所がない)、如是にして漸く人の驚き且服する所なつた曾津に歸來し、推薦せられて醫學寮の師範役しはんやく爲つた。

是よりして藥園の充實を謀り品類の分割ぶんかく之が擴張を以て任まかし數年なら

ずして其實を擧ぐるに至り、嘉藏は拔擢せられて「ハ寄合よあひあひなる首班しゅばん席せきなり、年割席の上よりは異數なり稱せられた、元來、其人そのひとなり精力一到を期し終に學寮中、眞個の師表を以て景慕せられたるは勿論、彼の山本晴幸に對する文壇獨眼龍也ぶんだんどくげんりゆう也仰がれ又、其著書「伊勢之海」三題する數(三百卷は亦以て其師の群書類從に匹敵する者である)迄、世評を博した。

此偉人の生歿年次凡て不明に歸し又本草に關する一切の隨筆にして浩瀚なる「伊勢之海」(古歌より題名)が兵燹に盡した事は一大損失であつた、其享年は七十又八十餘歳日はれ又其子孫の歌絶をも傳へられる。

小川涉、會津古人事歴、沖津醇會津士人偉行録、及梅屋が同書補遺に據る。

以上本藩側の醫事及醫人の概略であるが之が詳細を悉くさんここは記録の亡失上から不可能に歸した次第である、次に本藩の人にて江戸方面に傑出し名を著はした人物を列記する。

目黒道琢(目黒を略して驪も記す)

道琢(又道卓も)名は尙忠、字を恕公と曰ふた、會津の生家は何人であるか全く不明である、之が傳記を書く者は之が生年なきにも調査してゐない。

道琢は神童の稱があつた、年甫て三歳、已に文字を辨じた、稍長じて麻實を十露盤珠にして九章の術(九、算)を習つた、天資鋭敏であつて勉勵刻苦、白首猶倦まなかつた、又最校讐に長じ素問、靈樞を始め難經、傷寒其他に「書入」をして一行の間、其上下も餘白が無い位であつた。(淺田宗伯、杏林雜話中)。

或る記録では初め大番頭青木氏に、尋で白河樂翁に就たが皆辭し去つて寛政中、多紀家から推撰されて躋壽館の都講(助教)になつた。此大番頭青木氏は素より江戸の大御番頭を指したのであるか不明である、躋壽館は明和二年^{一七}の十一月に多紀家五代の元孝(安元)に由て開講され安永元年^{一七}に祝融の災に罹り寛政三年^{九一}に六代の元徳^{本講院}に由て再築又開講し醫學館と改稱し非常な擴張と隆昌であつたが文化三年^{一八}三月に復災焼し更に復再築せらる、

に至つた、即、道琢の就職は醫學館と改稱した以後の事であらうか一疑問である、又當時は白河樂翁執政の時であつた。

「日本醫學史」附録「日本醫事年表」天明四年^{一七}の條下に躋壽館は醫育速成又講習を開始し「百日教育の法」と名づけ二月十五日より一百日間、生徒を學塾に收容し、又外來生にも聽講を許した、其講例は舊式に準じ六部書を「定」しし受持を素問、多紀元簡。傷寒論、山田圖南及桃井陶庵。内經、難經、目黒道琢。靈樞、服部玄廣。本草、田村元雄及太田長元。難經、加藤俊丈。經絡、小阪元祐及岡田道民、其他經書科に井上金峨、吉田篁墩、太田錦城、龜田鵬齋等に配當した、又此一百日中には施藥(施療)があつて諸生は診治法を習ひ又醫案會(一月中七回)、疑問會(一月中、三回)、藥品會(百日中一次)なきの講習又實物の供覽等があつて内外諸生の數は四百人に上つた。多少文章を修補した、之に據る時は道琢は天明四年に已に躋壽館の都講であつたのである、即、寛政中の就職は改稱醫學館の云々云ふに過ぎないと思ふ、又「百日教育法」は僅に四

年を繼續したのみであつた。

喜多村香城の「五月雨草紙」に次の一挿話を記してある。「或る年、京都から荻野典藥大椽が来て温疫論を講じたが書中の膜原を募原ミコ講じ爲に區々たる字音の上から衆議を置然たらしめた其時、喜多村槐園（名は直、字は子温、即、香城及、栗本鋤雲の父）は古へ募、膜は通用文字にて音「バク」に非ざれば其意通ぜずと論じ、道琢も亦其説の是なるを説いて荻野の論は敗れ、直に京師に遁れ歸れり、其時、關東方にては禁裡醫師は如何取り扱ふべきやと醫學館より伺書差出したるに白河侯執政の附札にて關東御目見醫師同様たるべしとの沙汰あり此一事にて幕府の権力思遣られたり」とある、當時、道琢も亦御目見醫師をも兼ねてゐた、又、多紀元簡（七代、桂山、樸窓、樸蔭）は其著、「醫膜」附録中に「募原考」を物した。

道琢の著述として「参考檢穴編」二卷刊年不詳、「傷寒論集解」一卷、「嬰英館療治雜

話」三卷弘化四年刊が傳へられてゐる、又門人では伊澤蘭軒を首とし曾根惟中、西村玄周、鈴木素行（陽谷）の名が記録中に散見してゐる。

「皇國名醫傳」後篇下卷に據れば「寛政十年九七八恭廟（家齊）召し見る、是年卒す」とある、然し他説には寛政十二年説を掲げてゐる、又此「名醫傳」には著書に「靈樞箋」、「非々十四經辨」、「隨筆」等を掲げ飯溪イヒといふ別號をも記してある。

佐藤元莖

多紀家の別家として立つた多紀元堅（安叔、菴庭）の門人中に挺出した一人に會津出身の佐藤元莖といふがあつた、即、亦考證家の一人であつた、安政六年五九の醫心方、覆校職名中に權充醫學講書、校正醫書なる肩書を有し森立之（根園）淺田惟常（宗伯）と同役で、又小嶋尙眞、澀江全善、伊澤信道の諸氏と考證派を以て稱せられた。

元莖の著「時選讀我書」は三
元莖が文久三
年に校刊し又
明治六年に補
刊した者であ
る

佐藤元莖

佐藤隆岷

名は惟精、字を隆岷と曰ひ、號を活庵又谷神齋と曰ふた、人となり奇行に富み善く罵るゝを以て徽典館教官の林鶴梁（名は長孺、通稱伊太郎、江戸の人で三代武庫吏員の家に生れ一齋、懐堂、豊山の門を出て徽典館教官、遠州中泉の代官となり明治元年以來隠棲し同十一年一月年七十三で歿した、其平素勤王家である所から大正四年十一月、正五位を贈られた）から傳を作られ世に喧傳した、要するに「少うして奇志を負ひ善く罵り、名を天下に成さん」と欲して其初め郷關を出づる自らは葵章衣を穿ざれば、復生きて還らず」といふ骨子を以て一篇の名文章をなしたに過ぎない。

隆岷は江戸の一知人一商賈に頼つたが専ら會計を事とするを罵りて去り、轉じて諸家の食客となり易、論語、老莊より傷寒論其他を背誦するに至つた、最漢醫書に通曉して自得の境に入つたにも拘はらず罵辭去らずで人の自ら遠ざかるこゝろなり終に按摩を業とし餬口の資に供した、某の歳、荒川土州の妻、

久病十餘年、今猶癒えざる處から隆岷を招き診せしめた、土州は君の處劑は何だぞ聞いた、隆岷忽ち罵つて「君は醫師でないから醫術を知る譯はない、然し我術は疎で他に信ぜられないのは亦愧づる所である」と呼び鐵拳を奮て藥籠を粉砕し席を起つた、土州驚き且之を抑止し「君は奇人である、術亦奇であらう、是非に頼む」と陳謝するのであつた、隆岷は於是、善しと稱し方を處して終に何人も治し得なかつた久病を治愈せしめたのである、爾來醫名漸く揚がり、土州が清水府老となるに及び建白して侍醫に推薦した、是の如くにして侍醫になり葵章の紋服をも賜はり其志を果したのである。

傳記は是の如きである、其生死年月、仕官年度、皆、措いて問ふの要なき概あるは文章の上に遺憾である。

松本善甫（初代）及良甫（七代）、竝に良順。

延寶年中其元年は一六七三會津藩天満宮の神職に興江三郎興正といふがあつた、或時何

事かの原由で人を及傷して江戸に逃走した、此興正は位從四位上、官は中納言相當であつた、江戸に來てから母方、松本の姓に更へ善甫と改め先、漢醫學を何人かに學び、阿玉池邊にて開業し先、「口科」を以て漸く人の知る所となつた、尋で何人かに推薦せられて幕府に召し出され元祿五年十一月二十三日に常憲院(綱吉)御附となり六年二月十八日には慶米百俵十口を給せられ、法眼にまで昇進した、其歿年は元祿八年四月であつた。

其子孫、興滿、興信(寛政重修家譜第八輯には尙興、良庵に作る)、興長を経て興世郎、五代善甫に至り安永六年十二月浚明院(家治)に謁見(十六歳)天明四年十一月法眼に敍せられた、然るに其六年五月犬の喧嘩事件(我愛犬の件にて拔刀)の爲、御家改易となり(重修家譜詳記)、甲府に落延び落魄して寛政七年八月、年三十五歳を以て歿した(生年寶曆十六年、其女光子は祖父興長の里方、寄合醫師、數原白英(通玄)と曰ひ、尙白の養嗣子、明和六年四月歿、年五十六、寛政重修家譜第八輯中)の家に生長し其門下

文政武鑑、寄合御醫師數原通玄、千石、平川天神脇とあり

大澤良庵を尊養子として名を松本良甫、善賢と改めた、即、六代である、文政九年八月三十日、五十餘歳で病に歿した、此人に二男三女あつて其長が七代の良甫、名は戴、字は成伯で、號を護齋と稱し其一生は剛毅英敏を以て世に稱せられた。

此七代良甫は壯年にして父を喪ひ、母の訓育宜しきを得て勤學衆に挺んで、殊に交友を擇ぶを以て任じ、交を締すれば赤誠を傾け、死すとも辭する所でないといふ事であつた、即、其莫逆といふは佐藤泰然其人であつた、此泰然は通稱庄右衛門と曰ひ莊内領飽海郡升川村出身の佐藤藤助(後年名を信隆と曰ふた)の子である、又藤助は其郷を去り江戸に出で伊奈遠江守忠國(後の京都奉行)の御用人となり勢力あつた人である。

文政中シイボルトが醫學上の所見を傳聞し感憤して良甫は將來我邦の醫學は蘭學に非ざれば不可である、漢家は徒に陳腐なる舊套の墨守、一千年以前の章句を注釋するに一生を傾け何等研究の理を解せざるものであると喝

七代良甫と佐藤泰然

破し、遂に泰然の紹介を以て、足立長雋又は高野長英を師として研修するこゝなつた。加之、良甫は人となり至孝であつて當時賢婦人の名あつた老母に事ふるに心を盡し又弟妹にも友悌の情深く、人皆慕はざるは無かつた。天保十年^{一八}には爲に家名を恢復し寄合醫師より累進して奥醫師となり法眼に絞せられ家祿百俵高きなつた（「文久武鑑」、奥詰醫師中、松本良甫百俵、平川天神脇にあり）。

高野長英との
關係

高野長英は文政十一年^{二八}初冬に長崎を去り次年には九州より廣嶋に、尋で天保元年^{三〇}には京都又名古屋を経て十月末に江戸に來たが資力なく困窮甚しかつたので良甫は泰然と協議し資力一切を給附して麴町貝阪に開業せしめた是は全く兩人が師恩に報ゆるこゝいふ摯情からであつた。天保十年^{三九}五月長英投獄事件（蠻社遭厄）に際しては良甫は單に謹慎を命ぜられた（或は不問といふが眞なりとも言はれる）が、泰然は事、長崎留學中（天保九年中に江戸に歸つた

が）であるといふので幸に不問に附せられた。

佐藤良順、松
本良甫の養子
となる

佐藤泰然の二男に良順といふがあつて天保三年^{三二}六月十六日に生誕し長じて嘉永二年^{四九}年十八の時、良甫の養嗣子となり其女に配した、良甫は亦、泰然の交誼を重んじ能く時世に鑑み、安政四年^{五七}には西洋醫學傳習の取締に良順を推薦し以て良順が後年立身の地を作つたのである、故に良順も其偉才を伸ばし得て奥詰醫師兼醫學所頭取となり尋で奥醫師又醫學所頭取に進み法眼に進み父子相偕に侍醫又法眼になつて世間から復、異數まで評せられたのである。

徳川幕府の終焉に倍に良甫は身を退き閑散、老を養ひ、明治十年^{七七}二月六日壽七十又二を以て歿した、其生年は文化三年^{〇六}である、實子は棟一郎といふ。

又、良順(松本家八代)は順に改め明治年間の初頭より陸軍、醫總監となり英
 偉豪俊、醫界の耆宿、又功勞者として世に仰がれ明治二十三年には貴族院議員
 に敕任せられ、尋で男爵を授けらるゝに至つた等は人の皆知る所である、明治
 四十年^{〇七}三月十二日病を以て大磯の自邸に薨じ、其壽七十六であつた。其實
 子は本松に曰ひ、醫學博士である。

以上、吳博士シイボルト先生、八八一頁、寛政重修諸家譜第八輯、
 及鈴木要吉著瓊瓶(蘭學全盛時代ニ蘭疇の生活)等より參酌

其二 序説 藩の經學派 吉村寛泰兄弟 二洲の達見 江戸及
 會津に於ける蘭學所の創立 之に關聯の人物其他。

會津藩内に於て西醫學を祖述したものは嚮きに南蠻流外科の岩田意慶がある
 其後、此流亞の者は何如の顛末を取つたかは記録上全く不明である。

文化年度に他の諸藩は徐徐に蘭醫學を推獎する傾向を有して來た如く又醫學
 者自己は良澤、玄白、玄澤、槐園、榛園等の盛名に又其著譯本に寓目して舊想
 より醒覺して來た如く、文武兩道に於て他に輪せざらんとする會津藩は素より
 此傾向を援助する氣勢を示して來た。隨て崎陽に赴き直接に蘭醫に就かんし
 たもの(別に形式上、脱籍するに或は氏名を變ずるに或は謂ふので無く)或は天下
 を風靡する華岡青洲塾に入學したもの、或は江戸に出て杉田、大槻、宇田川の
 門に入つたもの又は文政年度に入り吉田長淑が蘭醫堂に入つて内科を研究した
 ものを輩出したのである。

青洲塾は漢蘭折衷派で鼓吹した以上其入塾は時勢猶未だ固陋を免れざる藩治
 又民俗に對し體面頗宜しきを得、第二に紀州藩にして會津藩に同様、幕府の親
 藩なるが故、士人の子弟が入塾を面目としたといふ關聯があつた、今爰に青洲
 塾が春林軒及合水堂門人録^{與博士の青洲外科}陸奥の條下より摘録すれば

文化十一年正月九日

會津若松新道 板橋昌庵

同 十四年六月二十日

會津 外嶋良碩

同 十五年五月二十二日

會津醫官 平井良伯

同 同

會津若松 高久長庵

安政六年五月二十八日

會津藩中 高橋順甫

こいふ五人の氏名がある、而して此門人録以外に門人の有る筈は無いが故老の話では前後二十人位は藩より入塾せしめたこいふ事である、要するに會津藩に青洲外科が傳播し其道を此僻幽山間の境に開いたのである、其醫官平井良伯といふ人に關し行蹟を調査したが凡て不明である。

又、文化年間に横山周仙といふ人があつて自費で長崎に赴き、蘭醫に就て學んだこある(會津藩教育考の醫學寮の一項中)、其実績の傳ふるものが無いが如きはき人士は好し少數せせんも必、他にもあつたこ思はる、先、江戸にて、杉田、大槻、宇田川の家塾に音傳れ、語學に稍通じた上に長崎に赴いて蘭醫又通詞から更に修得する所あつたこ、推測するも亦當然である、而已ばかりで

平井良伯

横山周仙

無く京都知名の蘭醫家の許へも馳せた人達すら是等年代には必、在つたこ、疑ふべくも無い、凡て佚亡した記録上の事であるから致し方が無いが、京都の賀川家に留學して産科を修め又歸郷して賀川氏を名乗つた者さへあつた、其他、尾州の馬嶋流の眼科を標榜して民間に流行した町醫が其世代を追ひ一兩家あつた、(後年で嘉永五年初秋出版の「若松縁高名五幅對、番附」を覽るに醫家に關し大醫、賀川、羽入、鈴木、阪井、百崎、醫家、澤井、平井、小池、塚原、三浦、流行醫、馬嶋瑞園、石田能玄、關良真、齋藤玄智、武藤英順の氏名が見えてゐる、是等は亦、研究資料の一である)。

吉田駒谷門人

吉田長淑(自安永八年七七至文政七年二八)の「蘭醫堂門人譜」中には會津村醫赤羽隆庵、會津侯臣荒井求意、會津兒嶋宗悦三人の氏名が見えてゐる、此兒嶋宗悦三享和、寛政年度の漢醫家兒嶋翮(宗説、楊皇)は子孫關繫の存否を詳かにしない、但、兩者間、約二十年の年次を先後すると思はる。

之に次で説かん事、會津蘭學所の創設に先立ち、經學派及、前文に記した吉村寛泰の事及、蘭療法を開いた先鞭者吉村二洲(寛泰の弟、篤敬)の業績である。

元來我會津藩の經學は正之侯以來、朱子學を墨守し、横田俊益の主張を基礎として以て藩の存在中、後年迄、是を以て徹底し、他の古學派又陽明學派の如きも亦、參考として極て寛大に包容した概があつた、寛文五年三月、正之侯は山崎闇齋を招聘し延寶元年迄八年間、賓師として一百口の扶持を給しつゝ、垂加流として神道をも加へ、殆ど我藩の祭政を制定し、眞個に模範を隣藩に迄も示したのである、而して復、中江藤樹の門、岡山淵(通稱源右衛門)が仙臺で其學派を擴延してから會津では其門人として中野理八郎義都(會津干城傳)の著者といふ陽明學者も出で、此人は其學徳から見彌山社司に成り又著述家として名を馳せ、寛政十年五月に年七十一歳にて歿した、是に由て若松城外の村邑では此陽明學の傳播を見、且、在野の遺賢として多數あつたのである(岡山淵の門人

として會津及地方では就中、荒井眞庵及、大河原杏庵(養白)の二人の名が傳へられてゐる、兩人とも又、醫師であつた、其間、荏苒、古學派も藩中に入て來て、熊本の古屋昔陽が藩命で寛政三年九二月、五十口で招聘せられた、昔陽は通稱、重次郎、名は鬲、字は公歎、曰ふて幼より江戸に出で徂徠學を學んだ人である(後、其兄、鼎、字は公餗(愛日齋)が天明十年正月年六十八で歿したので熊本時習館訓導の職を襲ぐこととなり江戸に住してゐた)。

此古學派の門人として吉村寛泰が傑出した、即、前記、我藩の文物史といふべき大文獻「日新館志」の著者である、猶他に此人の著述が數十部あるこの事である、寛泰の事績は文籍悉く戊辰兵燹に烏有となつた爲に其詳細の事柄が湮滅したが、父梅屋は之を慨し多年之が調査に苦心し大正二年九月に其小傳を著した此小傳は自寫本「日新館志」卷一に漢文にてものせられた之に據るに寛泰字は文蔚、號を南山、通稱は新兵衛、曰ふた、父は蓮性、祖父は本性といひ皆、法諱で傳はり、士人としての氏名が佚してゐる、又二三の挿話様のものもあるが之を省略して此章の冒頭に記し

た如く、十有九年間の苦辛を積み、「日新館志」を著はしたが一時は時の大老に
で偉人であつた田中玄宰（先考梅屋の著に「玄宰事蹟」及「年譜」の二卷あつて
其一生を詳かにしてゐる）の死に會し氣阻撓したのであつた、一日國老西郷近
光の勸誘ミ友人上野信好の輔佐ミを得て慨然更に執筆し、公事以外は門を杜ぎ
家具を賣りて資を造り遂に大成し、剩さへ前文に記した如く十全館建築費を獻
上し、之が爲に其功を以て祿百石に進み擧げられて南學教授ミもなつた、後、
天保年中には本草家、安田忠三與に醫學寮教官ミなり晩年ながら育英の上に大
に盡くす所があつた、而して此以後の事は其歿年ミ共に不明である。

二洲の事歴

此寛泰の弟篤敬は二洲ミ號じ兄ミ與に儒醫學の教育を受けた、但、此漢醫方
の師は何人であつたか不明である、長じて醫學寮の都講ミなり吉益東洞が「傷
寒論類聚方」又「方極」等より李東垣、王肯堂の明代漢醫方に及び又更に時勢の
推挽に鑑みて「醫範提綱」、「内科撰要」又は「解體新書」其他の西譯諸書及、本草
に關しても西説を取捨して講説したのである、其講説本は「東西對方」ミ題して

其諸藥方は漢蘭を折衷し寮生間の備忘録に供したものと傳へられる、是より先、
弘化年間一八四四乃至四七二洲は長崎へ出張を命ぜられ蘭醫學又は是等教育に關し取調を
仕た、即、我藩の醫學寮は遅蒞ながら二洲の達見に由りて公然ミ蘭醫學を一事
攻學科ミして納入するに至つた。

傳ふる所では二洲は人ミなり温厚なる君子人であつて少しも其長を人に誇る
如き事がなく其意見ミして我邦の醫學は一變して舊態を廢棄すべきであること
を時々人に説いたミの事である、餘力、國風に長じ歌集數卷あつたが戊辰の亂
に總て紛失した以上、日新館圖説及
赤城小橋所説に據る

安政四年一八五七の事なるが江戸芝の藩邸内に蘭學所を開設すべく決定され、尋
で着手したのである。

（參攷）江戸に於ては安政四年八月、伊東玄樸、戸塚靜海等蘭方を以て江
戸市内に門戸を張るもの八十餘名、種痘所を神田阿玉池に設置した、其實

蘭學所の開設
史

は蘭醫學の研究、講習に當つたのである、後年火災に罹り文久元年一八六〇十月初て西洋醫學所を建設した。

如是くにして會津蘭學所は其六年一八六二六月二十八日に落成し同九月八日に至り更に會津若松なる醫寮内にも設置するこゝになつた。

芝の藩邸内の蘭學所で招聘した教師は第一に杉田梅里門の神田孝平であつた（旗下で竹中丹後守の家臣であつた、政治學者として明治時代に盛名を馳せ明治三十一年七月、男爵となり七月五日薨去した）、凡ての事端が詳かでないが、當時漢醫家中の先達と稱せられた加賀山翼の如きは藩命に由り幕府の醫官、法眼伊東玄樸（沖齋）、其子玄信（貫齋）又玄信の實兄、織田研齋（武州多摩郡、府中祠官織田筑後の二男、織田筑後後に猿渡盛徳と改稱）等に就て蘭學を修業するこゝになつたといふは思ふに安政四年中の事であつたらう、之に尋で復、長州の奥醫、山根敬藏（伊東玄樸が象先堂門人は舍密術を以て世に聞えたので、翼は此人に就き更に學ぶ事になつた。

醫學寮の教員

「梅里遺稿」の詩稿中に送孝平神田君遊會津の詩があつて安政丁巳即て四年の事である蘭學所創設の時よりして孝平は協議に參與したことを證する。

加賀山翼及其日記（翼、號を涓陽と曰ふ）

化學者山根敬藏

其「加賀山日記」（「會津藩教育考」の引用に據る）を見るに安政六年六月二十八日の蘭學所開校式は翼の建議する所に由て行なはれ、規則、學課規案は皆、翼の手に成り又前記の如く神田孝平、伊東玄樸父子及織田研齋に教授を囑託したと記してある。

又若松に於ける醫學寮内の蘭學科新設に關しても其「主立役」（當時の職名、今の主監）は矢張り加賀山翼であつて、前記の吉村二洲老人と與に相協力して教授すべき旨を命ぜられた、且、此時舍密學者山根敬藏は若松に來て教授するこゝとなり其舍密所なる講堂は假に河原町の商家を假り受け、講筵と實試をを開始したこの事である、是等に關し詳細な記録が兵燹の爲に烏有に歸し、斷篇離合の有様で事の順序に明瞭を缺いてゐるこゝを遺憾とする。

其後の事と思ふが會津蘭學所の長として公式に野村監物が任命され山本覺馬、南摩八之丞（綱紀）が教授役となり次で川崎尙齋、古川春英、馬嶋瑞園等が其任に就いたこの事である、余は是等の人々に就て惟識り得たこゝを次第なく

次に書き綴るこゝにいた。

猶之を一括すれば是等の事績は幕末僅に六七年間の事であつて此偉にして美なる文化事業は濟生又社會事業と與に内外多事多難なる政變擾亂の渦中に盤旋し去られ洵いたる人心は歲月と與に激變して英傑、雄俊有爲の人は空しく槍火兵馬の間に斃れ、如是き事業は總て亡滅し巨萬の文籍は文化と與に烟塵に歸したので、人をして空しく國破れて山河在りを歌はしむるのみであつた。

國破山河在

野村監物

野村監物

に關し遺憾ながら其名字、稱號等が不明であり其出處其事蹟が湮滅した、沖津醇が著「會津藩士人偉行録」には「監物世祿二百石、官を歴て町奉行となり治績が多く人皆之に歸伏し其德行を欽仰した、戊辰の難に方り圍城中に在つたが其途に支ふべからざるを知り、慷慨措かず遂に屠腹した時に年八十（一に七十八に作る）と記すのみである、而して其自盡の日が不明であるが「會津史」

には重圍中の戦死者中に其名が見へる。

此際、蘭學所は日新館と與に兵燹に罹り焼失したのである。

秋山左衛門

秋山左衛門（諱、字、號、不明）

は前記、吉村二洲の二男であつて秋山太一郎の後を嗣いだ、儒學を米澤喜四郎（安部井帽山と同時の人で最、「左傳」に精しい人であつた、天保年中、歳七十で歿した）に學び博く史學に通じ、長じて日新館北學長に擧げられ、後醫學師範役となり最、育英に力を盡くした、戊辰八月圍城中、野村監物の自盡と同時に亦自ら銃を以て其顛を貫き死に就いた。

武藤英淳

武藤英淳 前記嘉永番附に英嗣とあるは誤である

吉田長淑の門下、兒嶋宗悅の弟子中に武藤英淳といふがあつた、其諱を重興と稱し父を友益と曰ふた、友益は元、南部の人なるが某の歳、會津に來り耶麻郡

小田附邑に移り醫を以て名を遠近に馳せた、英淳は幼より人々氣節を異にし兒嶋宗悦の門に入て蘭學及、醫學を研究し刻苦精勵數年の後、蘭方を以て身を立て門を開き、遂に師の薦舉ミ藩の拔擢ミを以て藩の醫官に擧げられた、其年次は亦不明である、英淳の長ずる所は金創療法なるが亦、内科に精通したミの事である。

文久二年^{一八}露人復、蝦夷の北邊を侵犯するミいふ事で幕命に依り我藩は復亦出兵して征戍の任に當つた、英淳は即、從軍して蝦夷に航し尋で樺太に征戍した(彦按ずるに此一項は或は誤聞誤記であらう、露人の關繫は文化五年^{一八}以後十二年に至るまで年々打續き天保二年^三厚岸の暴行、嘉永六年^五樺太久春古丹築柵の件位で大事件は無かつた、安政六年^五十一月に奥羽六大藩に蝦夷地の幾分を賜はつた時、會津藩は根室北半部及斜里地方を得たのである、而して文久二年中には露人ミは蝦夷に於て何等の交渉が無かつたミ考へる)。

明治戊辰^六の亂に英淳は朱雀四番士中隊長、佐川官兵衛の部隊に屬し越後

方面に出で専ら創傷兵の治療に従事した後、町野源之助隊が之ミ交替するに際し更に復、之に屬し療養指導日夜に互り勉むる所尋常でなかつた、英淳は人々爲り容貌魁偉で深目大口、又資性は忠直で屢軍事上に獻策し深く攻守上に開眼、慮かる所があつた、秋八月に入り其軍中に於て班を待醫に進めらる、命に接したが軍は益不利、敵は到る處に火を縱ち掠奪暴行を敢てし、砲聲日夜地を動かして已まざるに及び英淳は先、意を決し故里に歸て親舊ミ訣飲し其夜、毒を仰ぎ悠然として死に就いた、是が九月五日で享年猶五十一であつた、英淳には子無く、即、妻弟、登を養つて嗣ミした、又我祖父春武は曾て英淳ミ與に杉原凱山^{前文に記してある}の門に在て經史を修め忘年の交を訂し漆膠營ならずであつた、而して我祖父は英淳ミ一日を差へ九月六日、西柳原口に於て國難に殉じ壽六十二を以て終つたのである。

以上の事實は父梅屋が「武藤英淳傳」(漢文)に據つたのである、是等醫事上に關した人達の氏名、行蹟の傳ふべきもの素より他に多々あるこは言を

俟たない、然るに故老亦慨して前記の如く自盡し、終に復聴くべき無く、記録は散佚又兵燹に歸して徴すべきが無い、於是、人をして兵亂は文化を破壊するものにして轉た愴然たらしめる。

山本覺馬

山本覺馬

通稱義衛、名を良晴といふた、年甫めて九歳（生年推算文政十一年二八であるから九歳は天保七年三八である）日新館に入り文武兩道を學び二十四歳の時、大内流の槍術を究めた、嘉永六年五八に江戸に出て大木忠域に従て蘭學を修めた。

大木忠域、通稱藤十郎又、忠益で米澤藩士の家に生れ、長じて堀内忠亮の門に學び、後、坪井信道の次女に配し養子となり改めて坪井爲春と稱し芳洲と號じた、安政年間に鹿嶋藩の醫員となつた（文政七年二八に生れ明治十九年八八に歿した）。

大木忠域（益）
（後の坪井爲春）

尋で佐久間象山に従て火技の法を究め遂に自ら「着發銃」命中して爆發するものと云を發明するに至つたこの事である、其後、日新館の教諭に擧げられ尋で新設の蘭學所長に推選せられた、覺馬の素志は時勢に鑑み師、象山の薰陶もあつて藩の兵制改革竝に舊制火繩銃の廢止に在たが、故陋なる有司又志士間の激越なる論諍もなつて覺馬は閉門一年の罪に問はれた、然るに時勢は之を許さないで藩侯松平容保は覺馬を赦し更に命するに軍事取調役兼大砲頭取の任を以てし職俸十五人口を賜はつた、元治元年六八京都に勤まり藩侯を輔佐し、慶應三年六八七月十八日、蛤門の役に大砲役として殊功を建てた、當時偶、眼病に罹り、已むなく清淨華院中に靜養し遂に全く失明の人となつた、覺馬蘭學に精通し其失明前の事なるが藩侯の前にて蘭書（兵學）を講じ、發露太だ流暢なもので滿堂皆耳を傾けて肅然としたと言はれてゐる。

明治元年六八正月の變に薩兵に捕はれ幽囚となつたが、小松帶刀、西郷隆盛と舊識の故を以て優遇を受け閏五月、仙臺藩邸の病院に入り翌年赦されて更に

京都府顧問となり勳精、府の治績を挙げ明治八年十一月新嶋襄上野の人を佐けて「同志社英學校」を起した、十二年には創設の京都府會議長となり二年の後、疾を以て之を辭したが猶、京都商工會議所會頭に擧げられ明治二十五年一八十二月二十八日壽六十五で歿した又覺馬の妹八重子は新嶋襄に嫁し和歌を善くし賢夫人の稱があつた會津士人傳行録、人名辭書、梅屋著「松屋落葉」等に據る

南摩綱紀

通稱、三郎又八之丞、名を綱紀號を羽峰と曰ふた、會津藩の鉅儒である、又明治の聖代に在て東京大學教授、尋で高等師範學校教授を歴仕した、弘化四年一八年二十五、藩侯容敬の命で昌平黌に入學し在學八年を終り更に蘭學修業の命を受けたのは安政元年若くは其二年一八五中の事である缺く其師は梅里杉田成卿及、石井密太郎即、成卿の歿、四年前の事である、又此石井密太郎の氏名は新撰洋學年表、安政二年の下欄に勝海舟手記、江戸在住蘭學者五十八人中に見

えてゐるが、後の石井信義又其父であるか不明である、「近世名醫傳」卷三には石井信義、安政の初、父に従つて美作より江戸に移る記すが或は別人であるか未考であるであつた、其後、大阪に赴き、緒方郁藏が適齋塾に入門し更に修學した。

緒方郁藏
(坪井信道門人)

緒方郁藏、名は維嵩、字は千文、號を研堂又獨笑軒と曰ふた、本姓大戸氏、備中梁瀬村の人である、弱冠、江戸に遊び漢籍を昌谷精溪、蘭學を坪井信道に學び、醫道に志した、既にして同門の先輩、緒方洪庵が業を大阪に開き名聲高かつたので就て之に従はんこし、去て之に赴き其業を補佐するこゝとなつた、後、洪庵と兄弟の約を訂し緒方氏を冒すこゝとなり別に北久太郎町に醫門を張り「南北適齋塾」と稱し盛名一代を風靡した、又土佐藩の子弟教養を託せられ明治三年、大阪醫學校少博士に任じ同四年七月壽五十六を以て病に歿した、研堂人として沈黙寡言、唯、讀書以外に娛しむ所なく「内外新法」、「日新醫事抄」、「散花錦囊」等の著あつて家に傳ふこの事で

ある。

羽峰は安政四年^{五八}に加賀山翼^ミ偕に藩侯に建言して蘭學所創立を提案し^吉村二洲の項参照爲に藩士から反目疾視、攻撃難詰を受け一時は身を危ふしたこの事であつたが、在再二年遂に江戸藩邸内に、次で若松城下に創設せられ、醫學科が成立して羽峰は其教諭に任命された。

其後の經歷に關しては大略、土屋鳳洲著「羽峰小傳」(「羽峰遺稿」卷一所載、又三嶋中洲の「補傳」)に盡くしてあるので之を省略する、羽峰の生年は文政六年^{二八}十一月二十日、歿年は明治四十二年^{〇九}四月十三日、行年八十七である、我先考梅屋は高田幽囚中、之に師事し又、明治の初年、叔父眞琴は其養子となつた、眞琴は牧羊家として職を青森縣に奉じ後、去て札幌郡輕川に來り開懸に従事し明治十四年^{八八}十一月二十六日、病を以て札幌に歿した、享年僅に二十四であつた。

川崎尙齋

丹後出石藩醫家の出身であるが安政六年^{五八}會津藩に聘せられ蘭學所教諭に擧げられた人である、尙齋通稱、正之助といふたが藩臣となつて藩祖の諱を避けて庄之助と改めた、年壯にして江戸に出て杉田、大槻尋で坪井諸家の門に入し蘭語及醫學を修め又時の舍密家に就き舍密術に習熟し終に安政六年の推撰に及んだ、萬延元年^{六〇}に砲術修業は蘭學所から分離し又、學校奉行の管理を解いて更に其専務の主宰を置くこゝなり尙齋は舍密術擔當の上から蘭學所を出て専ら彈機製造の任に當り喇叭銅製の「パトロオン」(兵士の帶ぶる胴亂で蘭語の Patrontasch である)等を製作した、當時又、與に協力した人は古川春英(後項所記)で多少其功績を擧げ、又他の防衛に従ふ譜第の軍事役をして顔色なからしめたことも言ひ傳へられる。

尙齋は人となり灑落恬澹で胸中復一物なしと迄、人に稱せられた、後年斗南移封の地に赴き何事か計畫したが事外人に連累し爲に遷延して解決に及ばな

つたと言はれた、明治六年^{一八七三}轅軻不遇で東京で客死した。

三六〇

古川春英

古川春英(源二郎)

春英名は留吉又、源二郎といひ、河沼郡駒板村農家の子に生れたが、幼より英敏、人に絶し、十二歳にして已に醫家山本春隴^{不詳}の家弟になつて醫術を修めた、其歲月は總て不詳であるが或時、春隴を以て師となすに足らずし伴狂を粧ひ走つて大阪に赴き緒方洪庵の門に入り蘭醫學を講究し刻苦精勵、五六年にして師の許す所になつて其實地診療にも參加した、安政四年、江戸に蘭學所が開設せられたに聞き猶一層の育英上研究する所があつて同六年に窃かに晝錦行を賦して歸郷した、然るに春英は法を脱して藩外に出奔したといふ事が問題となり且、法にも問はるべきものといふことが舊醫家の側からも出て其沙汰に及ばんとする時、野村監物は之を聴き、時下此急務に際し此人材を空うするは不可なりとして其次第を有司又大老に迄、上陳し遂に之を不問に附するといふ事に落着した。

ふ事に落着した。

初俸は一ヶ月三分の微俸冷官で、當時尙齋は四口俸であつた、萬延元年、蘭學所の改革で春英は別に自ら見る所ありとして尙齋に佩刀を附し名を山川海介^いと稱し郷關を脱して復大阪に赴き再、洪庵の門に於て恩師を補佐した、元治元年、藩侯、京都の守護職邸第にては醫師を聘して邸内に勤務せしむる要望が急且、切で意を、春英に屬するこゝ頻りであつたにも拘はらず、之を受けないで倉皇、長崎に往き蘭醫ボオドイン A. F. Baudin に就き更に研修を續行したのである、然るにボオドインは慶應元年^{一八五八}秋頃か歸國するこゝになつた。

ボオドイン

ボオドインはウトレヒト陸軍軍醫學校の教官であつたがボムベ、ワン、メルデルフット J. L. C. Pompe van Meerdervoort. (Jonkheer 爵) が文久二年^{一八六二}十二月三十日歸國した爲、其後任して其十二月二十五日に長崎に來り長崎稻荷岳の新築病院に診療を教導に盡力した人である、慶應元年に歸國し又明治元年^{一八六八}に來朝し同二年に大阪醫學校教師、同四年七

三六一

月東京大學東校の教師となりて前後十一年其教導の功は甚大であつた、殊に外科、眼科に精通し明治初年の大家は概してボムベミボオドイン兩家の教授を受けざるは無かつた、ボオドインは歸國後、閑地に退き一八八五年明治十八年に歿した。

春英の志は殊に新進の病理學を研鑽せんとするにあつて其苦勞身に逼るを意せず、僚友二三を拉して長崎に赴き研學に日を送つたが偶戊辰の騷亂となりて急遽歸郷した。

此時、松本良順は其部下十數人と共に會津方面に来て兵士の創痍者治療を擔當し日夜非常な繁忙を極めた、春英はボオドイン門下に於て良順と相識るが故に其麾下に投じ蘊蓄を爰に發揮したのである、戰役終て北郊の島村治療所長となり癡兵又不具者の後療法其他衛生上の施設又、役後必將來する流行病等に就て萬端の防衛を講じ、旁ら少年を集めて解剖、生理又病理學等を教へ、兵燹の

餘、何等書籍皆一空で其上、購入の途も無かつたが、僅かに一書を得れば、自ら謄寫して先、之を少年等に授け、以て自ら毫も倦む所が無かつた、居常、前年空しく朝敵といふ名を蒙つた此耻を雪ぐは先、英才を輩出してからの後の事であるに決意し、此教育の任責を以て將來必、爲す所あらん人に語り殊に徳智兩育は言ふ迄もなく急務であり、西人の時勢世情に鑑み教育制度は改革して一變せざるべからずと説き慨世憂國の念に深かつた、後、此治療所が若松に移され之が長くなつて盡瘁復、舊の如しであつたが明治三年七〇になつて偶、ボオドインが東京に在るに聞き（前文では四年、東京大學東校の教師となるにありが）依然師を懐ふの情に堪へ難く之に逢ふの暇を請ひて將に發足せんとした時、偶、流疫腸霍扶斯であつたらうに感染して病牀に就き愈えずして歿したこの事である、人となり峻直で博愛の念に深く又才學豊富で凡てに超絶してゐた。

春英が命數盡くるに同時に、會津、即、若松の醫事は一時、其史上に亦、終焉を告げたといふことである、然し我父梅屋の言に據るに明治三年に舊藩士は

山内頤庵

或は三浦煥か
未攷
共に松本良順
の門下より出
づ

陸奥下北部の斗南(田名部一帯)に移封さるゝことになつた、素より二百五十年來の祖先の地を棄て去るの情に忍びざる人は多數あつて、中には殘疾不具又重患の者の移動し難いものが一百數十人を算した爲に春英の後任、山内頤庵は所長となつて醫員三名、計吏二名を督して是が殘務に當つた、其一切の結了、即上記の患者痊癒期待に猶九、十個月を要するのであつた、我父梅屋は當時其「用局長」(職名)として専ら整理の任に執掌したが其用度即、經營支給に凡て餘裕なく一ト方ならぬ苦心を仕た又、當時醫員としては伊東玄岱又三浦某借しむらくは其名を佚したが極力其任を完うした等の事なごは聖世何等傳ふる所なく今日俯仰轉た感愴に堪えざる事である。

以上、小川涉「古人事歴」、梅屋「松の落葉」卷五、我少年時代屬稿の「見聞私乘」等から抄録した、而して山内頤庵及伊東玄岱に關して調査したが未だ目的を達せずにある、伊東氏は殊に我父執として之を青森に識り今猶其面貌を髣髴せしめる。

赤城信一

赤城信一(小橋)

會津猪苗代の儒醫、阿部昌榮の第三子で名を信一、號を小橋と號じ天保十二年一八六月二十五日に生れ伯父赤城泰和の養子となつた、安政三年一八五月十六歳五六吉村二洲門に醫學を修め次で江戸に出て織田研齋江戸醫學所の講師又伊東貫齋信一に従つて蘭醫學を修め秀才を以て儕輩に推重せられた、偶、江戸に虎列刺流行(安政五年七月一八長崎から西海、山陰、山陽、東海及奥羽)に際して會津藩は小橋に藩邸の「醫師假雇勤」を命じて邸内の病者診療を司管せしめた、年少の醫人でもあり其俸僅に三口といふ事であつた、此流疫は其八月中、江戸城下、死者三萬を越えたといふのであつたが十月頃より終熄して小橋は再、伊東貫齋の家に入り拮据、其診療を介補した、元來、容貌端麗な人であるが豪邁で細事に拘はらない事から一日、何事か一場の葛藤にて衆の責を負ひ辭して故山に歸つた。

文久二年十月一八年二十二の時、室廣瀨氏を娶つたが此歸郷は元治元年一八の頃で、悠遊、猪湖畔の釣客となつて吟嘯、其日を送つた、慶應二年二月一八

に藩は小橋を起して大嶋生略不に長崎に留學せしめ將來の醫事に爲す所あらん
 ました、於是、先、五人俸となり且、旅資、束脩等を給せられ郷關を出たので
 ある、當時言ふ迄もなく尊攘の論や公武合體論で京師は紛擾の中心であつた、
 小橋が京都に着するや砲兵隊附醫官を命ぜられ爲に長崎留學は其儘になり同三
 年十二月九日の變に従軍して大阪に駐まり明治戊辰、伏見の役後には江戸より
 會津に歸つた、偶々其八九月の戦役に松本良順が其部下に創傷治療に鞅掌、繁
 忙を極めてゐるので江戸にて舊知の間柄でもあり寢食を忘れ日夜之を補佐し、
 春英と與に努力した、八月二十三日若松城は開城し役後の處理一層の煩雜を極
 め小橋は鹽川又北方其他に部落の病院又治療所に奔走従事又は擔當醫師を監督
 した、九月四日に命があつて病卒約三十名を米澤に輸送するこゝなつた、小
 橋之を引率して將に國境を出でんこした時、米澤藩吏強項之を拒絶したのであ
 る、爲に已むを得ず大鹽驛迄、立戻つた處、大鳥圭介、古屋作左衛門等の諸將
 が其軍を擧げて道を要するのである、其所以を問へば是より猪苗代に入り若松

を衝いて之を恢復せんとの言であつた、小橋今や如何とも爲すべきなく筆紙盡
 くす能はざる艱難を忍び山路溪谷を上下し病卒を負擔し沿途加療しつゝ終に福
 嶋に入り尋で仙臺に北上し悉く病卒を伊達氏邸内に依託したが小橋に別を惜し
 み泣かざるものなかりし云ふ。

是より小橋は身を海軍に投ずるの機を得て長鯨艦に搭乗し渡嶋茅部の鷺木濱
 に上陸し川汲嶺を超えて五稜廓に入り、榎本武揚の麾下に投じた、而して高松凌
 雲の監督下に於て力を建築し設備に擧げ偕に内科患者の診療は勿論、創傷の
 療法、繃縛に至るまで盡瘁、寢食を忘るゝ許りであつた。

明治の聖代、小橋は身を開拓使の醫務に奉仕し、公立室蘭病院長、然別嶺山
 醫長を歴仕し其間、復札幌に業を開くこゝ數年、殊に札幌醫事講談會の重職に
 就き其勤勉未だ嘗て一日の閑を甘んぜず終に病を得て明治二十九年一八八二月一
 日壽五十八を以て家に歿した、小橋は若松以來、我父梅屋に最親愛なる間柄で
 あつたので、其札幌にある間は當時青年たりし我を視るこゝ厚く、細大ミなく

薰陶する所があつた。

以上、明治四十二年六月北海醫報第九卷第一號中掲載の「小橋自傳」、詩鈔」に據て述べた一篇に據る、今より之を觀る時は會藩没落時に在て古川春英及赤城小橋は人傑であつた事を窺ひ知られ又春英の如きは二豎の犯す所ならざれば後年、中央に於て必、盛名を揚げた一人である。

馬嶋杏雨
(瑞園)

馬嶋杏雨(秀益、瑞延の子)

祖先是紀伊國安田村に住した小松維盛の裔孫である、父彌三郎は江戸に病歿し、母は其生家の下總國小見川村に身を寄せたが、子秀益は江戸に出で傳家寶刀を賣て學資をなし幕府の醫官馬嶋瑞伯の門に入り眼科を修めた、苦學するこゝ七年の後、瑞伯の親戚、瑞乙、子なき爲、其後を承くるこゝなり氏名を冒して瑞延といふた、文化七年一〇諸國歴遊の途に上り會津に來た處、遠近名を聞いて治を請ふもの膺集し又、藩主忠恭(容衆、享和三年九月生、文政五年二

鈴木玄泰

月薨)が眼病を治し竟に藩醫に抱へられ俸米を給し士班に列するこゝなつた、瑞延に二子あつて長は瑞謙、次は杏雨其人である、而して瑞謙は亦、醫を瑞伯に學び、家を繼で藩醫になつた。

杏雨(瑞園)は鈴木玄泰(會藩醫)に就て醫を學び、尋で日新館醫學寮に入り、内外痘瘡小兒、本艸の五科を卒業して安政中に藩醫となり、職を江戸金杉の砲臺に奉じた、萬延元年一八歸國して醫學寮の講師となり文久三年一八には侍醫に進み、照姫に從て江戸に遷り賞賜算なしといふこゝであつた、戊辰の役には圍城中にあつて藩侯を擁護し班は右筆上に進んだ、後、藩侯が因幡又紀伊兩藩の江戸邸に幽囚せらるゝに隨從し、赦後は亦、斗南に移つた、明治四年一八致仕して其七年に大藏省十一等出仕となり十一年一八職を辭した、刀圭の餘暇、書畫を好み鑑識に長じて名あつたこゝは人の知る所である、大正九年二〇一月五日壽九十六を以て家に歿した。(生年は文政八年一八)

以上、南摩羽峰が「馬嶋杏雨翁生傳」及孫彰が其追記に據る)

既に前文小序に言ふが如く「會津藩の醫事」の一篇は資料缺乏の爲に不完全な者である、而して後に傳ふべき事は猶多々あると思ふが之を他日の採收に待つ他なしとして茲に筆を擱した。

彦

勝海舟と蘭學修行

梅里、杉田成卿の門から明治の聖代に及び神田孝平（前文、會津藩蘭醫學の項中参照）、加藤弘之（天保七年生誕、十七歳、佐久間象山、杉田梅里の門に蘭學研究、後、大木忠益^{評井爲春}の門に入る、二十五歳、蕃書取調所の助教、其後省略、明治二十六年男爵に叙せられ、大正五年二月九日薨、壽八十二）、細川潤次郎（土佐の人、兵學を高嶋秋帆に學び明治元年開成學校譯局教授、法制學者、明治三十三年男爵に叙せられ、大正十二年七月二十日、九十歳にて薨去）等の學者が輩出し是等は勳功を以て華族に列せられた、素より皆、蘭學の教養を受け明治になつて轉じて英學又獨逸學者もなり政治、法制、哲學、教育、技藝の諸方面に向て西洋の智識を扶植し又啓發した事は言ふ迄もなく亦、今人の知る所である。

却説、幕末の偉人勝海舟(安房)も亦、蘭學を修め殊に亦、非常な苦學をした人であつた、今次に其次第を叙する。

幕府の小臣に勝左衛門太郎といふがあつて、其子に麟太郎といふが文政六年三月二十一日に生れた(叔父に、御徒士頭、小谷燕齋といふがある)、十七歳の時、家督を嗣ぎ、小祿の微臣であつたが後年には旗本まで進んだ。

劍道の師として有名な嶋田見山(虎之助)は海舟に、今日の時勢、兵學は西洋の學を講究するを急務とするといふ卓見を以て縷々説諭した、海舟は熟慮した上、斷然意を決して蘭學を修めんと志した、其時、年は二十二、三の頃であつた、先、鍛冶橋邸内の箕作阮甫の門を訪ひ志を述ぶることとなつた、當時素より不如意な生計であつたに拘はらず金百疋を費し弊衣長刀の體で面會を求めた、阮甫は徐に之に接し又其態度を視て之に諭すに、「蘭學の修業は江戸兒の如く性燥急なるものゝ能くする所が無い、故に中道にて挫折するよりは寧ろ修めざるに若くはない」といふのであつて其一考を促がした(明治三十二年、民友社發行、

勝海舟、上十三頁)、此點に就き一説として海舟は二十三、四であつたから「洋學は年を取てから修むるは晚いから止めるが宜しい、それより他の道へ精進されたら」云々阮甫は諭したとある(吳博士著、「箕作阮甫傳」、二九四頁、清水卯三郎の話)、又一説に海舟が砲術を研究せんとして大砲筒上の横文を視て之を読み得ざるに憤慨して蘭學に志したともある。

然し江戸兒麟太郎は其志を決しては心を易ゆる人物では無かつた、弘化二年四月八歳二十三にして或人の紹介を求めて筑前、黒田侯の家臣永井助吉に費を以て弟子入りをする事になつた。

永井助吉

永井助吉は通稱太郎、字は士訓、青崖と號じた、學才あつて藩侯黒田長博(文化三年八月生、明治二十年三月薨、年七十七)に任用され、命に依て翻譯の業を司つてゐた、其著譯に「萬國輿地方圖」弘化三年、一八四六年「泰西三才正蒙」嘉永五年がある、箕作阮甫の秋坪宛書牘に「永井太郎、「三才正蒙」中に「此都にても餘り風聞不宣、日本を滿州種に申候に至つては水戸風の人物甚扼腕致

い候可笑事に候」こある、又此人の生死年月未考である。

海舟の精勵尋常でないのに感激し青崖は黒田侯の圖書室に出入することを得、煎して海舟が寢食を忘れ蘭書を自由に閲讀することを得又、候にも數々謁見するの榮を得た。

赤城小橋を其人とするを事實なりと曰ふ説がある

桂川國幹(諱齋學人)が「和蘭字彙」を刊行して、世に公にしたのは安政五年戊午一尺の事である、而して其價は全部で六十兩一説には三十兩又二十五兩ともあるが六十兩と云ふは昂價に過ぐると思ふの貴きに書生の手には入り兼ねたのである、海舟は已むなく當時蘭醫の赤城某余は會津藩の赤城が所藏本を一年十兩の謝料で借用し日夜之が謄寫の業に従事した、既未考にして業を卒へ更に復一部の謄寫を終り遂に賣却して謝料と筆紙料とを辨ずるこを得た、其海舟の私藏本末葉には次の言が誌されてゐるこの事である。

弘化四丁末秋、業に就き翌仲秋二日終業、予此の時、貧骨に到り夏夜無燭、冬夜無衾、唯日夜机に倚て眠る、加之、大母病氣に在り、諸妹幼弱不解事、自ら椽を破り柱を割て炊ぐ、困難到于爰、又感激を生じ一歲中、二部の謄

海舟の苦學如徒之を視て如何となすや

寫成る、其の一部は他に鬻ぎ其の諸費を辨ず、嗚呼此の後の學業、其の成否の如き不可知、不可期也。

勝 義 邦 記

之に據れば弘化四年一尺の秋から翌年一尺の八月二日、即海舟が年二十五及二十六歳の時、約一年間に全部一千八百十九葉一葉六行の字彙を二回反復謄寫したのである、彼は少年にして已に多大の家債を繼承し家を擧げて儉素其消却に苦心し剩さへ國家實用の學に通ぜんとして蘭學に志し其貧苦、骨に徹しながらも、一室三四枚の疊は破れ悉く天井板を剝し取て薪炭に換へながらも、且亦、老母は病牀に就き諸妹は幼弱で事を解せざるこ多きながらも、毅然として其間に處し、猛然として將來の研鑽の爲に此謄寫を完結したのである。

往時、福井方亭、亦、花野井有年は「江戸波留麻」を二回も謄寫し學資に供したこいふ事は有名である、然し「和蘭字彙」の謄寫に到ては「江戸波留麻」に

比して其量を倍獲してゐる、又林洞海は其譯本「瘋兒藥性論」十卷を謄寫し一部三兩で有志の需に應じ三十部に及んだといふ事も亦有名である、此他新宮涼庭が文化八年、廣嶋の蘭醫、中井厚澤の藏書譯本數種を六十五日間で四十五冊謄寫したといふ如き事がある、皆自己の研究に供したことは勿論であるが、一面之を售て學資としたのである。前哲の苦學力行は後人の模範たることは論を俟たない。

如是き苦學の逸話は尙多く傳へられてゐるが、今之を記すこゝを省略し海舟は如是くして遂に蘭學に精通するに至つた、殊に師見山の教訓もあつて心を砲術の研究に専らにし嘉永三年^{一八〇八}以來、象山の門に入り門弟中屈指の人となつた其五年^{一八一八}十二月には象山は海舟の妹順子と結婚し(象山年四十二、順子十七、元治元年七月象山刺客の兇刃に斃れた後、年二十九で落飾し名を瑞枝を改め、象山が妾腹の子、恪二郎の生存中は何呉もなく其面倒を見た、明治四十一年一月、七十三にて病歿、師弟親姻の關繫もなつた、又此年から海舟と號じたこの事であ

る、象山は此結婚時に伊木億右衛門に與へた書翰中に「旗本衆中珍らしいき人物にて漢學も可也出來、西洋書も頗る讀め申候」と稱贊してゐる(宮本仲著、佐久間象山六二三頁)。

海舟は尋で自ら鍛工を雇備し小銃の製作に従事し遂には諸藩の依囑をも引請け、野戰砲の如きものを鑄造するに至つたこの事である。

安政二年^{一八二五}正月に幕府は海舟を拔擢して蕃書翻譯御用を命じ「蕃書調所」の翻譯員とした、是は大久保忠寛(一翁、當時、調所頭取、海舟を師とし蘭學を修めた)の推舉に依つた、如是して海舟は江戸兒たるに拘はらず、素志を貫徹し、蕃書調所の翻譯員として却て其任命が箕作阮甫又杉田成卿教授職の任命よりも一年を先んじたのであつた。

理堂饒舌

一、長目飛耳

「管子」卷十八の第五十五「九守」の項中に「主參」云いふがあつて、參は衆言を參用するニ意味し、一ニ曰ク長目（能く遠きを見るの意）、二ニ曰ク飛耳（能く遠きに聞くの意）、三ニ曰ク樹明（明を立て、臣下に欺かれない様にの意）、明知千里之外、隱微之中、曰ク動姦（隱微の中は最見難い而も能く之を知るのである、動姦は姦邪の心を悚動すといふ意又動は洞の誤りで姦邪の心を洞察するといふ説もある）、姦動則變更矣（悚動せられて姦邪は其所爲を變更するの意）ありて如是く解釋せらるゝ、今日之を科學研究上に流用して實に趣味多き文字と思はる、即、之を言ひ換へれば讀書、講議（耳、目）に聰明な許りでなく之に因て凡ての因果を明かにし眞理に透達し顯微鏡檢、細菌培養、血清反應等に由り以

て隱微を洞察するは是我等の學問であり又、由て以て變に應じ機を露はし遂に技能を治療に發揮するを得るは是、自然に於ける真正なる面目なりを解し得べきである。

大槻玄澤(磐水)は文化五年戊辰〇八の晩夏に其書屋壁に七言絶句、近友東方今古賢。讀書長目已多年。遠師絕域西洋學。飛耳自娛名哲篇。を題して研鑽已まざるの意を寓した、又「芝蘭堂新元會圖上の諸贊題語中に宇田川槐園(字晋名記)は、飛耳謝偏聽、衆善公擇五大洲。長目絕瞽爭、全象竝觀四元行。」を名聯を題した、又、玄澤は「蘭學會盟引」を其圖上に記し關防に白文の「飛耳長目」の篆印を捺してゐる、而して此新元會は言ふ迄もなく寛政六年閏十一月十一日が西曆一七九四年一月一日に相當するので蘭學會盟を芝蘭堂に招待して宴を張つたのである。

玄澤の孫、修二(如電)は「磐水事略」の末に玄澤が「白澤」を題する一文一則を

記した。

東望山ニ澤獸アリ能ク言語ス、王者ノ徳、幽遠ヲ照ス時ハ至ル。黃帝巡狩シテ東海ニ至ル、此獸言語スト。云云。東海ニ異人アリ能ク西方侏離ノ言語ヲ吐ク。然トモ敢テ缺舌ノ音ヲ好ムニアラズ、唯其異言ノ長ヲ擇ンデ我が聲音ノ不足ヲ補フ、コレ亦幸ニ王者ノ徳、幽遠ヲ照ス、昇平ノ時運ニ遭ヒ、四目兩口ノ民ナリ、此人ヲ呼デ白澤トイフ、一人ニシテ二人、白唱フレバ澤和ス、白ト澤トハ一體分身ナリ、其人井泉ヲ好ム、白ハ道士井ノ傍ニ在リ、澤ハ大井ノ前ニ在リ、玄ノ又玄、其徳モ亦幽遠ナリ、恒ニ耳ヲ飛シ目ヲ長ズルハ言語ヲナシ、世ヲ化シ民ヲ濟フヲ以テ意トナス、コレ禽ニアラズ、獸ニアラズ、濟衆ノ師タリ、嗚呼、知ラズ識ラズ、其名暗合ス、コノ白澤モ聖代ノ麒麟騶虞ヲ出スノ類ナランカ、奇ナラズヤ、怪ナラズヤ、呵呵。

恰も莊叟の寓言の如く、古文を咀嚼し、賦の如く興の如く、比喻、隱約の間に現

はれ、抱負自尊、玄白玄澤は俱に玄の又玄、王者の徳あつて一體分身、能く提唱和同し、長目飛耳、見聞を幽遠隱微の境に致し、化世濟民を以て意こなす。云ふ如きである、其「道士井」は往時、濱町の「山吹の井戸」で杉田家の天真樓門前五六間の處であつたが今の明治座の裏にあるこいふ古井であつた又「大井」は木挽町の玄澤の邸傍にあつた大井戸を指したこの事である。

以上の文獻に由て玄澤が終始、言にする長目飛耳の四字の淵源を明かにし又其生平の意が遠く萬里の山河を相隔てゝる西洋の學術研究に其長を取り其蘊奥に及び以て我邦の文化に資するあらんことを冀ふこいふ抱負を以て、言を澤獸に託して、其衷心を吐露したこいふ思はる。

今猶一言を陳して置くこいは玄澤が諸記録類を涉獵看過するに此四字の出處を別に示して居らぬ事である。

一、詩人廣瀨旭莊、蘭醫家を罵詈す、又其人の性異常症

其一 緒 説

廣瀨旭莊又梅墩(初、秋村)と號し名は謙吉といひ淡窓の弟である文化四年五月十七日一八〇七年。天保六七年の頃、江戸に出で羽倉簡堂兄淡窓の門下に寄り又林述齋門に出入した、天保九年に大阪に去りて帷を下し、約五年の後、肥前大村侯に招かれ、同十五年には再、江戸濱町又久松町で私塾を創め、四年許りで復、大阪に、文久元年には故郷日田に走り同三年頃には三たび大阪に、攝津池田に其棲住移轉全く不定で即離極まり無く人をして一種異様の感を起さしめる、嘉永六年一八二五年に米艦が浦賀に來た時、慨然として國防策を論じ幕府に上書した、夫れは「識小篇」と題し六千七百言の大論として當時を驚動した。

詩人廣瀨旭莊、蘭醫家を罵詈す、又其人の性異常症

自然を謳歌する旭莊は其「梅墩詩鈔」二編下、天保五年の作「送桑原子華歸天草」三といふ七言古詩で四換韻、二百八十四句即、一千九百八十八字の一大篇を賦した、其第一解で蘭方醫家を罵り盡くし又普通醫家にも及ぼし醫の態度が貧富に對して豹變するを嘲り第四解に於ては天草の土俗、痘瘡を忌み、迷信に陥るり山中に逃奔する狀を描き且、笑ふのである、今次に其第一解六十六句を抄出して此詩人の抱懷一端を示して我參考に資する。

俗醫嗷嗷皆誰人、其業鼓舌與搖唇、或言漢醫疎不密、治疾莫如蘭方新、一物不知以爲耻、細及蚊睫大天垠、皮膚筋骸毛髮血、分割釐析治人身、牛溲馬勃敗鼓屬、換以蠻名作奇珍、蟹行文字世所昧、橫讀如流駭癡民、術雖平々口妙々、張肝其目瞰高旻、若渠所述皆有効、人壽亦應齊靈椿、或言蘭醫拘難活、師古宜溯岐與秦、首論汗吐次論下、不說陰陽不說因、猛劑厲藥轟肝肺、唐錢漢升和君臣、死者非我是天也、墨守古徵具開陳、病雖可除人乃斃、

猶負嬰孩以千鈞。若渠所行果無誤、足提刀圭役鬼神。或又插花耽棋局、風流擬入韻士倫。閩里偶有垂死客、子姪環坐守吟呻、不唯涸魚望江水、使人汗流招請頻。我棋未終且姑遲、比至臯某無由振。或又絃服而令色、夙夜唯拜公路塵。杏樹門庭關白日、梨園風月侍青春。俳優蓄之供歌舞、宦豎視之廁妃嬪。一年長與岑連絕、終日空追麴蘖親。曾聞醫者仁之術、如何變爲佞之鄰。或又貪如慕蠶蠹、積貨與山競嶙峋。逢伴未問疾輕重、望屋先知家富貧。見其蜘蛛網簷者、纔入戶階眉已蹙。婁人之子何煩我、一診未訖幾欠伸。歸途若爲人馬從、便令門生口氣噴。見其鴛鴦止屋者、不覺莞爾現本真。侍婢敷氈勸上座、却避下風自逸巡。菓出辭菓茗辭茗、卑讓吾敢當大賓。甘言不厭長緩頰、苦思偏愁或逆鱗。傍見鞍飾肩輿具、驚謝鄙性未習馴。下略

今之に對し一々之を辯疏する要を見出さぬが博學多識の名を博した此大詩人が未だ西洋の譯書を繙かざる以前又蘭學醫にも交際なく唯普通一般、俗人の口

吻に慣從して數十句を賦したものと見られる、而して罵詈を以て快適なりとす
 る、此性癖の人には好資料であつた且又、其言ふ所は根據なき支離の空言であつ
 て恰も憤怒した者の言辭が辻褄合はぬものと全然同様である、而して此作が天
 保五年^{三〇}にすれば猶、日田に居た頃で未だ江戸に來らざる前の事である、當時
 の九州詩人中には往々にして或は醫弊を罵るこいふ流行もあつた如くである、
 例之、龜井南溟は伊呂波謠(邦歌)で醫弊を嘲笑した、之を旭莊は一誦し「論南
 溟先生伊呂波謠」を題して五言古詩で例の如く庸醫を罵倒してゐる、殊に「欲
 焰鍛刀圭、舌鋒資劫掠」の二句十字の如きは倪玉舟村は十字深刻到骨と評した
 が實際に寛恕すべからざる暴言侮辱である、如是きは賦興以外の川柳調と同一
 視すべきものである。

次に旭莊の「追思錄」に由て研究する。

「追思錄」は其亡夫人を追思した懺悔録であつて「儒林叢書、隨筆部第一」に
 登載してある、今之を讀過して次の要項を摘録する。

- 一、天保元年十二月、筑後、朝田の足立氏を娶つた、其翌年旭莊が性暴急(此
 行爲詳かならざるも略、知察するに足る)事へ難しみて歸寧し再還へらな
 かつた、旭莊は深く前非を悔いた。
- 二、天保三年十一月更に筑後山本郡吉本村神職合原安藝守の女、松子を娶り、
 烈火の性(此性字、今日所謂、性に適合する)を謹しみ、無理非道の暴行(事
 過ぐれば後悔すこある)を爲さざる事を誓ひ、誓書を書いて交附した。
- 三、然るに此非理叱責(是等の成語、凡て原文の用語を其儘に書く、以下倣
 之)が勃如きして起り(發作)、松子は身を逸して後園李樹の下に逃れ或は
 器物の抛擲、嗔恚怒憤到らざる無き爲、松子は樓上の押入に遁け置るゝ等
 依然として改まらない、是等、暴急輕躁(之に伴なふ淫行は勿論)持續する
 こと十三年、松子は寛緩遲重、甚閑靜、淡蕩、禪機ある如くであつた(旭
 莊其對手に禪機ありまなすも亦詩想か)。
- 四、旭莊は二十五歳にして家を繼ぎ、二十九歳まで代官鹽明府の意に逆ふこ

數十度(委曲不詳)、三十八歳にして此禪機ある松子を喪つたのである(後文に復、詳説する)、松子の弟、新助は旭莊の養子となつたが天保十三年十一月二十六日病の爲に(五六月來、下利云云)死亡した、旭莊は松子の介抱不行届、寧ろ之を殺した(憤怒、暴行を演じた)。

五、天保十五年五月二十六日、松子は江戸に来て夫旭莊の久松町の家塾に同棲した、間もなく、煩渴、下利、腹痛、寒熱往來といふ如き病症に罹つて主治醫は深川冬木町の坪井信道であつた、其病症の一進一退に任せ、伊東玄樸、鹽田順庵(名は泰、本姓官河氏、幕醫、鹽田宗温の養子となり天保十三年六月、外班直醫となつた嘉永六年米人國書を奉じ來つて通信互市を要求した際に慨然として「海防彙議」四十卷を著はして一本を昌平覺に納め恩賞を得た、安政二年順庵は家を携へて函館に移住し六年に學校及病院を建設した、文久二年、幕府は召還して寄合班に進め醫學教諭を兼ねしめたが、國變に際し處士となり復、召されて幕命を受け函館に役した、戊辰の役後、

鹽田順庵

東京に歸り明治四年二月七日六十七歳にて病歿、順庵は號を松園と謂ひ、性剛簡を以て有名であつたが時、立合又診療を爲した、殊に信道は從來、旭莊と交り深く、遂に義兄弟の約を爲すに至つた程で、松子の治療上には一ト方ならぬ苦心を拂つた、猶松子は自ら惡疽、妊孕を信じたが、經水は閉鎖し全身次第に瘦削し面色は桃花の如く格別艶美となり腹部は漸くに脹滿を増し來る有様であつた、十月三日松子が衣服を取て裁縫してゐるのを見て旭莊は倏忽忿怒し忽ち衣服、鍼箱を抛つて大聲號泣した、松子は唯、痛く其罪を謝するのみであつた、爾來再、下利歇まずして腹部は益痞滿し來るので、旭莊は更に大槻俊齋、多紀樂春院(元堅)、荳庭、當時法眼、又漢醫、兒玉宗慎なきを其相談に招き心を盡くした、順庵は隣家であつたことゝて日々來診したが煩渴、苦悶止むなく羸瘦日に加はり遂に十二月十日に死亡した、其時松子は二十九歳、旭莊は三十八歳であつた。

六、松子歿後六年即、嘉永二年、旭莊は大阪で山名氏を迎へた、先妻の月忌

初十日には旭莊は必、持齋するので山名氏は甚不快の様子であつた（旭莊の妄想、或る時、山名氏が神主（位牌）の前で點燈焚香の狀、不敬なりと信じてゐた處、果せる哉、三ヶ月間打續き其位牌が佛壇から落ち花瓶は碎け香爐は倒れるといふ譯で旭莊は忿怒、山名氏は非常に恐懼した、是より先、妾として平野氏といふが、（矢張り嘉永二年中の事實）旭莊から理不盡に叱咤せらるゝ時、必、先妻奥方の位牌に對し不敬、粗末の事があるから其罰である（理不盡）と數々宣告せられたといふ事であつた。

以上、旭莊自家の告白に據つて節約其要を摘したのであるが、大約、旭莊は性異常症で興奮性體質又「シゾイド」性體質に見る所の能動的残忍性色情症（「サチスムス」の症狀群を現じた人であつた）を思惟せしめる。

而して證狀の形容が雜駁であるが、暴急、無理非道、叱責、憤怒、理不盡、器物抛擲等の行爲が必、發作して現じ（他の性的行爲は詩人として之を筆に

するこゝを避け又不可能を察するが、必、之に隨伴したこゝは言ふまでも無い）之が爲、先、第一に夫人になつた足立氏は堪へ兼ねて離絶し次に合原氏（松子）は其觀察に時機を誤らぬ時は其身を隱匿して跡を晦まし或は忍耐して其靜止を待ち意に任せ以て忍辱十三年に及んだ、然るに糖尿病、又恐らくは腸及、腹膜結核に罹り在再衰弱し五六ヶ月の経過を以て幽冥の域に歸したのである。

如是、性異常症に罹つてゐる人が其一面には大詩人として名詩に富み、清の愈曲園（樾）をして「東國詩人之冠冕也」と呼ばしめ、其著「東瀛詩選」中に旭莊の詩篇を撰集して二卷の多きに及んだ。

性異常症殊に残忍性色情症に憤怒の行爲を伴ひ、又は小にして罵詈に現するこゝも考へられる、即、桑原子華が天草に歸るを送るに、先、蘭醫家を罵り辱かしめ、牛溲、馬勃の類に蘭名を賦して珍藥に擬するこゝか、横行文字を流るゝが如く讀んで癡民を駭かすこゝか荒唐の言を極め、或は圍碁の爲に病者の招聘に應ぜぬこゝか、世上に能く傳へらるゝ瑣細な事柄を故らに韻文にして其心情、

情念に極まりなき快適を覺ゆるが如きは惟ふに已に早く性異常症に隨伴した前驅の現象も思はしめる、今、彼が三人の妻及一人の妾に對する如是き暴虐殘忍の行爲を委細に其「追思錄」紙上に窺ひ知らしむるに於て、之を上記の如く診斷せしむるは至當の事と信ぜしめる。

史話卷之下第
一三八頁參考

次に此「追思錄」中に宇田川興齋及坪井信友二人の事が見ゆるので之を抜萃する。

興齋は少年時代に漢籍を旭莊に學んだ（又、安積良齋にも就いた）、前記松子が臥病中、一日味爽「興齋を召して申付くる事あり」とある又、見舞に「興齋自身に極製の寒糕を求來り、白砂糖の汁粉を拵らへ勸めければ悦びたり」とある、其他、松子の江戸に來て未だ病牀に就かざる以前、即、其年の九月頃、婢春は興齋、安貞二人と松子に従て、東橋より兩國迄、舟に乗つた」と云々ある、又、松子の歿後、旭莊は江戸を去るこゝあらば松子展墓（小石川傳通院内の見樹院

坪井信友

境内)の事を信道及興齋兩家に託した。

安貞即、後の信友は長じて緒方洪庵の門に入り萩藩の外班醫員となりて其雅號を權花園と曰ふたが、平素病弱であつた、天保三年三十八生れで慶應三年六十八五月二十五日肺患で三十六歳を以て此世を終つた、天保十五年四十八九月、師匠の夫人に隨伴して舟を墨水に泛べた時は年十三の少年であつた、此少年は漢籍を旭莊に學び又、西嶋蘭溪（名は長孫、字は元齡、著書、「坤齋日抄」、「慎夏漫筆」、嘉永五年十二月歿、壽七十三）に學んだ、又此時、興齋は安貞よりも十歳の長であつた。

其二 旭莊が「九桂草堂隨筆」中に見る閨門史

「九桂草堂」は浪華伏見坊に旭莊が僑居の雅號である、旭莊は三十年來（十九、二十歳の頃から）夏初、秋晩の間六ヶ月、毎日丑牌午前二時に起牀し燈下に書を課し凡そ二時ばかり（二刻で四時間）如是くして平旦午前六時講を聽く者の集るを待つ

てゐた、但、寒天の時は之を休止した、安政二年乙卯旭莊年四十九、西紀一八五五、夏秋の交に伯兄淡窓の門人長光太郎長梅外の子で後の三洲である、來阪以後、旭莊家塾の塾長なつたが來て旭莊に學んだが旭莊は敢て當る所で無いこは思つた、然し唯、此夙興早起の風を勤めんが爲に毎夜丑刻に起牀せしめて旭莊が語る所を筆記せしめ天明始て之を輟めた、如是事凡そ一百餘日にして十卷の此隨筆を書き上げた、而して翌三年一八の春歸郷往復の途中、閑を得るまゝに従者西山祚五郎に口授して之に猶、十餘則を追加し又其冬、淡窓の喪に奔り四年一八三月東上の時、兒孝孝之助、維孝、林外、隨筆の校正者を隨行せしめ舟中無聊の時、孝は校正又數則を追加した、今、此隨筆から左の四項を摘録する。

一、旭莊は天保四年一八年二十七の時から安政二年一八年四十九の時まで二十三年間に「日間瑣事備忘録」を書いて世道の變遷、交友の存歿等遺す所なく漢文に寫し難きこを平板に記し實切を主として議論を少うし、十の七八は往事

の追敘にして、内、虚靈を主とするの議論は却て豊富に書き入れ、殆ど二百卷に及んだ昭和二年十一月、徳富蘇峰が「關西二十日遊記」中の「廣瀬家の文書」と題する文中には「日間瑣事備忘日記」百十二冊、同重訂日間瑣事備忘後編五十五冊、即、計百六十七冊ある。

二、旭莊は十七歳、龜井昭陽に従學し讀書涉獵、目及ばざるなく、昭陽師より「活字典」也渾名された、三十歳迄に三鏡、六國史、日本史等より十七史、十三經、資治通鑑、諸家詩文集等數百千卷原文の儘、三十七歳迄に太平御覽、說郛、知不足齋前後集等、三十八歳の時には須原屋茂兵衛書估より類聚國史、翁草、寫本類等四百餘種、約數千冊を借覽涉獵し其他、他家より津逮祕書、啟禎野乘、又邦典漢書二百餘種數千冊の借用讀破又西洋譯書百有餘種の抄録等、江戸在住四年間に互る努力で、安政二年一八迄十年間にて粗、五六千卷の大數に上つた。

然るに、此兩三年來(嘉永六年來を解する)記憶益置乏し従前讀過したものは空濛一夢となつた、其三十歳以前に讀みし書は百に一、三十歳以後に讀んだものは千に一、四十歳以後は萬に一を記憶するのみで、是以後のものは如何程讀むも竹籠で水を掬するが如くであらう云々ある(以上隨筆卷之一中から)。

三、雨森芳洲(名は東、字は伯陽、木下順庵の門下)が其年將に八十ならんとして稟質健剛(素より性の上にも)を説く一條下に旭莊は次の如く懺悔してゐる。

旭莊は年十五の時より「情慾の念動き種種の病症を發し父兄の憂を遺すこと少なからず」こある、素より其年輩で春機發動は當然であるが父兄の憂を遺す程、種々の病症を發すことは徵候の發動、所作又其病症の記載が缺如して不明である、恐らくは「性に關する異常症」が後年夫婦間に發した如く起つて常習の樣にもなり、父兄に心配を懸けたことであらう、「於是、山川を跋涉し或は耕耘、

汲水、角觚等筋骨疲勞の工夫をなしたれども、大本の情慾熾んなる故、格別の大病にはならず、唯、氣鬱するのみ」こある處から非常に猛烈な情慾の昂進であつて諸般の筋骨勞動の工夫又山河跋涉の勞力による轉換法も之を抑制するの力なく又、病にはならざるも氣鬱し懊惱するのみであると言ふこと、思はる、旭莊は斯くして二十四歳の冬に妻を迎へたが二十八歳迄、此悒鬱が持續し二十九歳には總身の疼痛の爲に臥蓐五ヶ月にも及び、三十歳の時、意を決して上國に遊び、復、風土の變じた爲に、常に病み勝ちとなり大に微氣(俗言である)を發し二年程、骨節に疼痛が歇まなかつた處、幸に全快し、三十七歳、江戸にて更に瘡に襲はれ臥蓐百餘日にも及んだ、此際既に絶命の詩を賦して覺悟する處があつた、四十歳、亦大阪に入りても時々骨節痛を發し多少懊惱したが四十三四歳の時、近在の行旅を思ひ立ち山水を跋涉して病を稍輕快せしめた、然るに記憶衰へ生平の讀書中、忘却するもの十の九となつた、嘉永六年(一八三三)四十七歳の時には眩暈を發したが、險岨を攀登し爲に治して健全となつた、如今、飲食

は三年前よりは進むも之に反し心力日に萎靡し瑣細の事に疲倦、懶惰を覺へ、剩さへ壯年よりは「剛急にして怒り易く」(此剛急は頑強急燥の意か)又「多言の癖を起して來た、今は然し之は止んだ云云」(約三十三年間の病症を略述してある。

又旭莊は作詩に動もすれば數百千言で常に猶、意の未だ盡さざる處あるを以て自ら恨事ななし、其意の盡きない言ふは才力餘りある爲でなく、多くは足ることを知らぬ爲である、而して我病は獨り作詩ばかりで無いと思ふに、眞率に又隱約の間に「或る事」をも告白する如くに洞察せらるゝ(以上隨筆卷之九中から)。

四、次に旭莊の閨門の研究であるが茲に筋書又表の様にして煩雜を避け要を摘する(隨筆卷之十から)。

年 月	西 紀	年 齡	事 實
天保元年十二月	一八三〇	二四	足立氏と初婚
同 二年	一八三一	二五	離婚
同 三年十一月	一八三二	二六	合原氏松子と婚
同 五年	一八三四	二八	女誦を生む、次年病死
同 七年 十月	一八三六	三〇	兒孝、(同十一年、兒悌を生む、悌夭)
同十五年十二月 (弘化元年)	一八四四	三八	松子死、年二十九
弘化二年	一八四五	三九	妾平野氏、信濃向關の人
同 三年 六月	一八四六	四〇	平野氏、兒忠を生む、大阪
同 四年	一八四七	四一	忠を兄、棟園の養子となす
嘉永元年 七月	一八四八	四二	平野氏過ちあり離絶す
同 二年	一八四九	四三	姫路の人、木村氏を娶る
同 三年 六月	一八五〇	四四	女信生る冬、驚風に死す、一月を経ずして 忠も亦死
同 四年	一八五一	四五	歸省、兒孝、淡窓の養子となる、木村氏

妬悍甚し即復離絶

長府の人、清水氏を娶る、此月木村氏見仁
を姫路に生む

同 同 十月

同 五年 二月 一八五二 四六

木村氏、兒、仁を旭莊が家に送附

同 同 六月

清水氏女義を生む十二月痘に罹り死

同 六年 正月 一八五三 四七

男、正生る

其記する所に據れば合原氏松子の歿後「我身一變して妻妾屢かはり」、又睡眠に關して「十四五歳迄は眠を嗜むこゝ衆に異なり、十七以後は眠甚少なく二十四五より四十迄は三夜或は五夜に一時或は二時睡る位の事也、其間は記憶頗強く人の詩文を視て二度讀めば大抵は誦せり、四十以後、次第に眠多く今は（嘉永六年、年四十七）又少なくなり毎夕二時も眠る位となり記憶次第に衰へ書を讀みて十の九は遺忘す」を記してある、即、睡眠の多少を記憶力の強弱は概して轉比例である事を斷言してゐる、又、此記憶力なるが睡眠時間多くなつてか

ら十の九は遺忘するといふ點で、十の一は一、先、記憶に注意に存したのであるから、所謂、記銘圈は或は唯、時の問題であつたを解せられる。

以上、程朱の道を遵奉した學者、東國詩人の冠冕を推稱せられた旭莊は最赤裸々に眞率に彼慮騷の如くに凡ての行爲、閨門の事情を告白したのである、第一、午前二時に起牀して門弟に我意見を口授し、天明に到つて之を輟め如是事百餘日で十卷の草堂隨筆を書かした（其筆記の理由は旭莊は高度の近視眼であつた爲めである）、其午前二時までは好し如何に夙起を勧めんとも人間の起牀すべき時間では無い、世上如何なる邦土にても此習慣は無かるべき筈である（禪僧の行事は別として）、長三洲が兎に角に一百餘日、師命に服従して實行した、第二に二十三年間の日記として世上の出來事、隆替變遷、交際上の事柄を網羅したといふ一百六十七冊の備忘録に至つては（今日の新聞紙の如く）當時の史料、學問上の考證研究ならばイザ知らず（九桂草堂隨筆は別問題である）唯、瑣

事(此語或は自家の謙讓にして)の日乘なりせば便ち書痴症(濫書症)に外ならないと思はる、第三に旭莊は三十歳前に已に數百千卷を讀破し、三十年代には江戸に其他に到る處から(書舖又藏書家)借用涉獵するこゝ多數に上り、西洋譯書の抄録亦百餘種言ひ、四十八年時代には十年間に約六千卷を讀破したるは眞に屈強な多讀家といふの他なく或は亦濫讀症に非るにやこの疑問を生ぜしめられ得る、第四に十五歳の春機發動以來、色欲熾烈を極め之が抑制に難く、筋骨勞動に邪念を壓し難く、時に一時的又持續性の鬱悒を惹起し二十九歳以來、總身の疼痛を發して臥蓐の身となり爾來骨節痛を遺貽し或は長く瘡を患ひ其上にも復、燥急の性に變じ忿怒し易き神經質の人となり時には全く記憶力を喪失し或は一時的ながら多言癖となり神經の衰弱又亢奮、消息凡て不安で定まらぬ事となり又使命としてゐる詩作には長篇を賦して意を盡くさんとのみ「あせり」、句を排列し來つて、多く足るを知らない様になつて來るが「啣つ處が面白く思はる、又其閨門史としての悲劇様の大略は已に「追思錄」中に述べられてゐる

る、今更に之を括言すれば其五人の夫人中、第二は「追思錄」になつて賢婦の徳を以て惜まれて死別し、第五は隨筆執筆中、最近の夫人として存し、他の三人は生別離絶したのであつた、其一是旭莊の暴急に事へ難しめて去り其二は妾の資格であるが過ちありて去り(四年間)、其三是悍妬甚しめて去つた(三年間)のである、如何に文字を以て赤裸裸に閨門の祕事を告白せんといひても几帳面な儒者肌の人には筆墨の汚漬として出來兼ねる次第でもあり、殊に又廣瀨家の主義として「遠慮」の二字(隨筆中に見ゆる一條)を守る家訓であつたので巨細の閨事經緯には及ばなかつた、且又、一兒を産した夫人に「何の過ち」の在つた事か、又、二人を産した夫人が如何に「悍妬」であつたかは筆に觸れてゐない、然し第一に第二に於て明瞭に動的姪行の發作が隱約の中に示されてゐる處から第三、第四に於ても亦、或は之と同様の仕打であつたかと思はしめる。

其三 餘話

天保五年、旭莊二十八歳の時、桑原子華が天草に歸へるを送る詩句に於て蘭醫學者を罵詈した事は前述の如くである、然るに約十年を経て全然異様の人格者に變じ江戸に於て寧ろ蘭醫學者ニ相親ニみ相敬する人物ニ成つた事は約變亦ハ甚しいニいふ觀を呈する、此約變は但、彼が修養の結果ニも思惟せらるゝは其三十八歳、江戸に在りし時、西洋譯書數百種を讀破又抄録したニいふ事に由て證明される、(前章其二の二)又、其妻松子が罹病の際、坪井信道(誠軒)は其主治醫であり又義兄弟の約を訂結した人である、其他、伊東玄樸、大槻俊齋も其相談醫ニなつて出入し、門人には信道の子、信友(安貞)、宇田川榕庵の養子興齋も居つた事は前項に詳記した。兎に角に、修養に由て十年前ニ打つて變つた人格を表現したのである。

旭莊の詩集は「梅墩詩鈔」ニ曰ひ初編から四編迄、一編上下二冊のものである、其三編上下迄は門人、坪井信良(名は教、江戸)及、伊東子高(名は邵、肥前)の

校に繋り、四編は同く門人劉君平(名は昇、豊後)及柴東野(名は莘、阿波)の校する所ニ署してある、是に由て見る時は信良は信道の養子で其長女に配した人である、別に家を成し後年、幕府の侍醫ニなつた(文政六年生、明治三十七年、歳八十二で歿した)、伊東子高名は邵は不明であるが肥前ニある處から或は玄樸字は伯壽の初名かニも疑はれる、劉君平は冷窓ニ號じ京都に住した詩人である、柴東野は秋村ニ號じ字を綠野ニ曰つた人であつて天下の奇才ニ稱せられた人であつて皆、名を成した。

「詩鈔」の三編下卷には誠軒ニ舟遊の作、病起、誠軒を訪ひ且、謝するの作、誠軒が春初病中作に和するの作、梅雨中誠軒に晤ふの作、冬夜誠軒至の作、十二月二十六日與誠軒從界師探梅の作がある、此界師ニは誠軒の兄、淨界師であつて當時、京都某寺の住職ニなり此弘化元年(天保十五年十二月改元四一八)十二月に江戸に弟を尋訪したのである、此旭莊は其北鄰に住する鹽田松園(順庵、其一の五)なき、唱和し「書聲隔壁共殘夜、杏杪跨垣分半春」の句がある、其殘夜

の書聲には殊に旭莊の夙起依然、舊の如きかを想起する又、此松園ミ信良ミ永代寺に遊び寺僧が酒を供した作、杉田成卿後園の作(天真樓時代)又堀内忠亮(適齋)が米澤に歸へるので朝鮮扇を餞別にした五古、戸塚靜海が雙鶴樓で中秋前一日に詩會を催うした七律、相良蘭雪が子某(誠軒門人)の放蕩を戒しむる五古等がある、以て旭莊が當時の蘭醫家知名の人々ミ相交際した事が分明である、余は多年、此「詩鈔」に尸祝して黙誦する所であるが其今日謂ふ所の「性」に關しては、何等、韓偓如き香奩體で諷詠した一句だも又竹枝如きものも覽る所で無い、又此「詩鈔」四編は嘉永五年の除日臥病(註に時女阿義歿、葬之中津川側ミある)を以て終りミしてゐる、旭莊が年齢は四十六の時で其歿年、文久三年六三八月に猶十一年を先んじてゐる。

嘉永六年五三の著「識小篇」は米使が浦賀に來て通商を求めたので六千七百言を草して幕府に上つた、「人名辭書」には「大分縣被贈位者略傳」を引用して其國防策は「徒に大言せず、夙に譯書を涉獵して歐米の事情を知り、妄に攘夷に馳

せず亦輕々に開國に贊せず極て剗切なりしミいふ」ミある、旭莊は大阪に卒し墓は天王寺内、邦福寺にある、大正十三年二月、從五位を追贈せられた、是より先、其四年十一月に兄淡窓は正五位を追贈せられた。

因に云ふ、旭莊の子は、合原氏出で天保七年三六十月に生れ名は孝字は維孝、號を林外ミ曰ふた、嘉永四年五二に叔淡窓の養子ミなつたが、淡窓は門人、咸宜園都講、矢野範治を養子ミし之に合原善三郎の女ミさく子を娶て其家業を繼がしむるミこミなり、維孝は舊に復したのである、明治の御代に維孝は修史局の吏員ミなり明治七年五月、四十五歳で終つた(人名辭書には三十九歳ミあるが誤算である)、其墓は小石川傳通院の見樹院、生母の墓側に在る、又範治青村は修史局、華族學校、山梨徵典館に歴仕し明治十七年十二月十六歳で歿した。

昭和七年十月二十三日稿

三、泰西名醫彙講所載、卵巢水腫（腹腔
包蟲腫）の剖見例（明治四十三年十
一月の舊稿）

箕作阮甫が纂述の「泰西名醫彙講」第二輯即、卷之四に「卵巢水腫、竝、死後
解臟紀事」、附、「水胞考證」に腹中水胞圖、大膜囊内盛數十胞珠圖ミが登載され
てゐる、其原文は「内外醫社翼編」第一編卷一に見ゆる和蘭、華爾獨弗の作で譯
者は備中、緒方章、公裁即、洪麻其人である、原文の説く所は一八〇九年文化
六年
の目撃で「名醫彙講」の譯文は天保八年三の鐫する所に登載されたので其間二
十八年の長年月を隔てゝゐる。

之を單簡に摘録すれば齡五十六歳の婦人が一八〇七年五月十日、一醫より初
診を受け又外科醫にも協議して腹部膨滿、周圍六尺一寸許りなるに穿刺された、

泰西名醫彙講所載、卵巢水腫（腹腔包蟲腫）の剖見例（明治四十三年十一月の舊稿） 三九

爾來二年間に穿刺八回、毎回大約十四乃至四十四ポンド（五〇四〇乃至一五八四〇瓦）間の粘稠褐色液を排泄した、最後の穿刺の時には褐色液、腐敗悪臭あるもの三十四ポンドを排泄し爾來衰弱を極め三週間後、一八〇九年七月十四日竟に簀を換へた、其遺命に由て剖検するこゝなり次の状況を明かにした、即、此大塊は子宮に牢附し左卵巢は些の蹤跡もなく消失し唯、左喇叭管は圓韌帶と合して大塊に牢附してゐる、右卵巢、喇叭管には異常なきも諸腸管は壓迫を受けて縮窄し、膽嚢は滯溜して結石を有し肝、胃、脾、脾皆胸腔に向て壓迫せられ萎縮、扁平の他、別に異常が無い、而して大塊は裡面に遍く無數の小膜胞を有し每胞連絡なく拳大、胡桃子大、硬韌軟脆、膠白の者等にて褐色、密稠、赤色、膿様等の液を含む云云云ふのであつて左卵巢の化して此大塊を作つたもの結論して居る。

此附録は阮甫が「水胞考證」を題する者であつて「孔氏原病解剖篇」を引用し腹水病の由來、成分を記してあるが「造力、腹内諸蟲を生ずるの餘勢、薄軟にし

て略、光亮、繫着する所なきの胞珠を産す、中に盛るに清稀物乙液を以て大小倫なく或は器體中に産し或は諸腔内に生じ肝、腹腔、卵巢、腎、腦、肺、辜を最多とす、之を名つけて水胞と曰ふ、其賦稟酷だ蠢動の族に類す」（原、漢文）
 此水胞を説明し、且、其寄生蟲に由て各部位に發生するものと漠然の間に言明してある、其他、水泡發生に關し阮甫は布廉幾の説、「似蜂窩體」、「海綿體」の化する所であつて水脈の缺如よりして「血脈末抄」の化する所でない」といふ言を註してゐる、又呂一思の意見をも記し解屍二例の目撃を論じ、女人は之に罹るこゝ男子より多く且、之を卵巢に得るこゝ尤多しと記し其他、孔氏は肝中に善く生を托する所以は水胞は肝と其性相得て適するものがあるといひ紹介してゐる。

次に天保六年三秋の秋に「西社」が官に刑屍を請ひ回向院別荘に剖検し肝内に噴嵌した一大膜囊の例（附圖第二圖）である、而して其第一圖は呂一思が剖検例で腸間膜に發生したものに非るか、水脈の異常開張に造化したものであるまいか

疑を置いた實例のもの)を實驗した事ミ米澤の堀内寛が兎を解剖して肝胃下面、左腹結腸方位に小胞子數百枚を目撃且、摘出した事をも附記してある。

以上、今日(明治四十三年、一九一〇年十一月)を距るこゝ、原文ミは一百二年、譯文(緒方洪庵)ミは七十四年である、之を按ずるに水胞は「ヒダチイデン」の譯であつて既に中古時代には水脈管の擴張で其理由は不明といふ事に歸してゐた、一七六〇年バルラス Pallas は始て牛羊に其腫瘍は寄生性であるこゝを證明し條蟲との關係を明かにして之を水胞性條蟲 Taenia hydatigena ミ命名した、一八二一年(文政四年)に維納のブレムセル Brenser は人間に此包蟲(Echinococcus、希臘語「エヒノス」は隆起の意)の寄生するこゝを初て説きし輿論を驚動した、それは一婦人の鎖骨下部に發生した鶏卵大の腫瘍であつて三十個の嚢を有し包蟲は猶生活してゐたといふ例であつた、此報告から我醫學上に包蟲腫病の端緒を開き陸續ミして Budd, Andral, Davaine, Frerichs,

Murchison 等の臨牀報告、又、Küchenmeister, Thudichum, Heller, Raubner 等の原因諸説が公にせられた。

此文獻から言ふ時は和蘭のワルドフの實驗時代には水胞發生の原因は猶不明であつた、一八〇九年の事であり又譯者の執筆時代はブレムセルが人間に寄生する包蟲の明瞭になつた一八二一年からは約十五年以後の事である、故に阮甫の「水胞考證」ではコンスブルッフの「原病解剖篇」を引用し腹内諸蟲を生ずる餘勢、胞珠を産し其賦稟は酷だ蠢動の族に類すミ説き又諸器體中、及、諸腔内に生ずミ説いたのである、因にコンスブルッフはブレムセルが發表年度に猶生活してゐた人ミ想像する(一八二〇年我文政三年に「袖珍病理學」の著、ライプシヒツ府刊行のものがある處から)。

而して原著者、和蘭のワルドフは剖屍の結東、該水胞は左卵巢に發生したものであるこゝを其喪失ミ左喇叭管圓韌帶又子宮に癒着してゐる目撃ミから證言してゐる、又コンスブルッフは諸臟器中の發生に卵巢を算し呂一思の剖見例に

も卵巢に發生するこゝ多しと説いた。

今日此包蟲腫病理上に包蟲「エムブリオ」の侵入次第を説く逕路は頗詳曲を盡くして來て其肝に來り膽嚢に、肋膜腔に穿破し又肺、腎、皮下織、筋織中に轉移し又一方、「エムブリオ」は容易に腸管を穿つて腹膜腔に游離、増殖し鄰接器關を壓迫し牢着する其仕業は明瞭にされてゐる。然し前論文の卵巢發生説は謬見であつて、是は腹腔内に遊離した「エムブリオ」が増殖し年所を經過する中に腺組織の卵巢に癒着し、容易に亦迅速に他の機關と違ひ之を荒蕪し去て原織を消失せしむるに至るのである。

七十數年前に譯者が原著に由て卵巢水腫と譯した事は無理も無いが之を一疾病の發達史と見做し、當時の翻譯家が如是く考證に倦まざりし事共をも追想し爰に敬恭の意を表する、而して余は本年五月發刊の「北海醫報」第十卷第一號（腹腔包蟲腫ノ一手術例）（手術は明治四十二年九月十九日に執行）と題して實驗を

報告し尋で恩師宇野朗先生選曆祝賀論文集に登載の榮を享有したのである、由來此報告例は患者其人が曾て先生及ベルツ先生の診斷を受けて渡北し我手許に來たこゝいふ因縁を荷つた者であつた、此報告に際し余は「泰西名醫彙講」中の此貴重なる文獻を其題目「卵巢水腫」といふ點から全く逸し去つた事を遺憾として此一文を追加した次第である、此時、明治四十三年我四十五初度の日。

此一文は既に云ふ如く今を去る二十二年前即、明治四十三年十一月の舊稿である、惟ふに我邦の外科史上の一史話として趣味あるものゝ一である、且、今日我知人中に醫史學上に涉獵する人も逐次増加し來るに際し爰に阮甫が「名醫彙講」中、一症例の譯文摘録及考證に關する一舊稿を我筐底より取出して之を記し以て將來の參考の資料に供せんとする、昭和七年六十七初度前十五日。

四、鳥居耀藏及澀川六藏の末路

林大學頭の八代信衡、述齋の次子に耀藏名は忠耀、號を胖庵と曰つたは鳥居一學の養子となつたもので、人となり陰險猜忌、亦權略に富んだといふ事は世の遍く知る所である、此性狀が如是露出するに至つたのは林家の儒生中、當時、蘭學に心酔し鳥跡を棄て、蟹行に就くものあるに云ふに憤慨したに始つた傳へらるゝ、殊に渡邊華山が曾て贊を林門に委しながら「モリソン」號來船の件に就き主唱したのは是、妖言である、廟堂を蠱惑し民心を煽動するものであるに閣老水野越前守に陳訴した、是が彼の惡辣手段着手の第一歩となつて高野長英が蠻社遭厄事件、高嶋秋帆が捕獲、且之が死刑處分に垂んじた事實、中傷、嫉妬、讒陷又暗殺等たらざる無き惡事の目論見が相踵いだのである、然るに皇天は明鑑あり遂に其何等かの姦策が自家徒弟の訴願となつて評定所は之を糺明し澀川六藏、金田故三郎、本庄茂平次等と偕に罪惡悉く暴露するに至つた、

於是、耀藏は弘化二年^{四一八}十月に京極長門守高朝に預けられ、丸龜に幽囚の身となつた。

三八

木村芥舟（徳川幕府末路の名臣、軍艦奉行、海舟、泥舟、三舟の一人、明治三十四年十二月九日歿、壽七十）が「黄梁一夢」を題する隨筆中に左の一節がある。

鳥居胖庵、名耀、任甲斐守、林述齋先生次子也、才鋒銳敏、極長吏事、天保中、自監察擢府尹、釐革舊弊、摘發奇中、姦蠹罔攸遁形、後蒙譴謫丸龜、讀書一室、三十餘年如一日、足痿不能起、會滄桑之變、朝局一變、赦命無攸出、藩主縱之還、齡已古稀、滿頭白髮、故舊族人、無識之者、然健啖雄辯、無異昔時。墨梅云、東君呼醒玉梅魂、疎影嬋妍月一痕、從自孤山人去後、暗香閑却幾黃昏。竹外籬邊稱得宜、微雲低壓兩三枝、長教筆露含生意、苦雨狂風無謝時。此係少壯作、而詩意頗如成讖者、亦奇矣。

明治維新赦されて七十餘歳で東京に來り尋で駿府の實家、林晃（十二代、

字は文毅）の家に寓して明治七年十月三日に死したが（文明東漸史、名人忌辰録）、姦物の一生を記する是にて十分である。

彼の蘭學者で天文曆數又地理に精通した高橋作左衛門至時（即、文政十三年^{三〇八}三月二十六日、シイボルト事件で死罪となつた御書物奉行、天文方兼帶である景保の父）の次男、澀川助左衛門景佑なる人の子として生れた六藏名は敬直といふ者は天保十年^{三九}七月に「蘭學取締意見」十條を其筋に提出した、其大體は蘭學者は實用の學を修めないで奇説を縷敷し儀器類を作製して新案工夫し牽強傳會するを誇りこなし以て世を惑はすは政治に害を致すものである、長崎の通詞を取締り宜しく其家來に蘭學を教ゆるを禁すべく又醫師は蘭名を蘭字で其藥袋に認むるは賤少きは謂ひ蟻穴より堤防を崩壞するに同様、其増長は國體を損じ風俗を亂るの基なる云云と言ふのである。

此反應は同年十二月、幕府より蘭醫に示諭する所となつて奇異の説を唱ふる

三九

を禁じ又翌年五月、天文方へ其筋にて取扱ふ曆書、天文書、醫書、究理書類の外は濫りに世上に流布せざる様、諭告が公布せられた、於是、天文臺譯員杉田立卿、宇田川榕庵、大槻玄東（玄澤の孫茂棟）、箕作阮甫、杉田成卿の五人は連署して世上既に蘭醫書中、病名、藥品竝に分量の誤謬、粗譯或は「譯鍵附録」の藥名衍誤あるは詮方なしとして爾今右等翻譯物は我等譯員が一應檢閲した上、刊行を許可するは當然である、伺ひ出て其義は將來許可になつた。

六藏敬直は耀藏の使喉に由て陰險讒誣手段をのみ考究したが遂に堀田攝津守、成嶋圖書頭以下數名を讒害せんを企てた處、耀藏と與に數多の罪惡が未然の中に暴露して豊後臼杵藩主稻葉右京亮に御預けになり幽囚零落、其末路を銷了した。

五、秋風道人、殘夢（附言、田代三喜）

（緒言）余は幼少の時、故老からして我會津（會津は今日の會津郡を指すのみでなく往時は寛文六年の「會津風土記」が示す如く他の耶麻、大沼、河沼三郡に互つて總稱したもの、解せられる）の傑人として、殘夢、天海、兼裁等の話を耳にしてゐた、此中の殘夢であるが仙人如き人で亦、僧醫とも謂ふべきものであつた、且、此人は義經も辨慶も目に見たといふこと、其時代の世の中を物語り鎌倉、室町時代を通じて天文の頃迄生活した長壽の人であつた杯、今にも記憶に存するが、幼少の時殊に川柳撰の「秀雅百人一首」には殘夢と福仙無無（二人になつてゐるが或は一人であらう）の肖像と和歌が記載してあるを朗誦し且、其風貌は目から離しても在り在り浮出づるのである、好し凡てが荒誕な事にもあるとして甲斐の徳本は殘夢に學ぶこともあり又徳

本は曲直瀬道三と共に古河の三喜の門人でもあつた、此等の點から荒誕な事柄を排除して残夢に關し次の事だけを記述する。

残夢の史蹟は飯田忠彦の「野史」第二七四卷隱逸列傳中に記載され主として「會津風土記」、「會津舊事雜考」、又、「萩原隨筆」から材料を取り其荒誕無稽は何等撰擇取捨することなく網羅してある。

残夢は會津實性寺第二十二世の住職で字を日白(又自白ともある)といひ秋風道人と號じた、台密(天台密教)の學を修め諸州を歴遊し時の名僧を訪ひ參禪の功を積み傍ら當時の趨勢、僧醫全盛の時代の上から醫道を修めた、其崎行の傳説、例之、天文中磐城郡の僧無無、磨鏡工福僊の如きは之を無稽とする。

残夢は文明年間自一四六九至一四八七に生れたとして九十歳位で天正四年一五七六三月二十九日に寂した、曾て天海僧正天海は天文十七年(一五四八)正月元日に大沼郡高田村に生れたとあると邂逅し枸杞飯を嗜なみ喫したとあるが天海は残夢より猶少壯であつた或は兩者間多少師授の關繫があつ

たかと思はれる、天文年間自一五三二至一五五〇の事といふが、永田徳本が來て醫道を問ふことになつて悉く之を教へた、當時徳本は修業の爲、名勝靈區、窮村貧邑到る處に治療を施しつゝ其道の先達を尋訪した。

此他残夢の醫事及其功績に關して何等傳ふるものが無い、其行跡は悉く奇怪、崎事にのみ蔽ふはれてゐる、爰に唯、言ふべき事は残夢、天海、兼裁皆會津及大沼郡中から出自してゐることである。

因に言ふが残夢に關する記録の方では門人に也足齋といふがあるを書いて、徳本には無い、是が疑問である、「徳本傳」知人小松帶刀の著であるに據るに徳本は知足齋(又乾室)と號じたので也足齋では無い、然る上は徳本に凡ての醫方を授けたといふことは疑問なる訣である。

要するに徳本と云ひ、古河の田代三喜と云ひ其事蹟に就て明瞭を缺き寧ろ荒誕に走るものが多いといふ事は遺憾とする、徳本に關しては小松帶刀の「醫聖

永田徳本傳」又三喜に關しては服部政世（下野國佐野の醫家で博學を以て聞えた）の「三喜備考」に最精確に悉くしてゐる、唯、此三喜に就いて一言を附述したい事は次の一事である。

三喜の足跡は古河地方を中心とし白河又會津地方にも及んだ事と思はれる、京都の曲直瀨道三（正慶一溪、雖知苦齋、翠竹院）が北上して享祿元年（一五二〇）二歳の時、足利學校に入學し文伯に就て研修し同四年（一五三三）十一月初て三喜に從事し得たのであつた、其師弟相逢つたのは柳津といふ所であつて其地は武藏の川越附近であると言はれてゐる、（是は策彦が「啓迪集」の序文から考へて然らん云々ある）又、其上に道三は野武二州間に從遊十有八裘葛記してある、然し此十八年の從遊は誇大なる虚妄である、三喜は天文六年（一五三七）二月十九日壽七十三で古河で歿し城下の長谷村一向寺に葬つた事あれば此年代の上から此從遊は五、六年の間より他に見られない、又柳津といふ地名は東北地方では會津方面、即、河沼郡中の有名な靈地にして誰人も知らぬ者の無い程である、殊に

秀吉時代から一大靈刹となつて東北には比類なき大領地を占有してゐた（新編會津風土記卷之十一、河沼郡の六）恐らくは僧醫として月湖、玉鼎の流を汲んだ三喜は此靈場に從前から學院も有つたので音傳れてゐた其際に道三は跡を追ふて來會し先、此地で教を受けたものと思像される。

古河公方の召聘に應じ三喜が古河に來たのは永正六年（一五〇九）で其年紀四十五歳の時である、同七年に猪苗代兼載の病を治療した、兼載は中風に罹り其年の六月六日年五十九で白河關外の耕閑齋（又相園坊）に歿した、此兼載は猪苗代小平瀧（又小出方村）で享徳元年（一四二四）に生れた、父は式部少輔平盛實といひ母は石部丹後の家婢であつた、足利學校出身で文明十三年（一四四一）年三十の時、京都に赴き、連歌を宗祇に學び達人の稱があつて宗祇が「犬筑波集」中に其歌句が載せられてある、又禁庭に入り源氏物語の侍講となり法橋に敘せられた、後年古河公方の聘に由て古河に來り後、白河關外に隱棲した、其著に「園塵集」といふがある。（梅屋が「會津人物史」卷二、「梅屋雜記」卷九）。

生	死	壽
8. IV. 寛政六年間、 文明正四、永正十、 喜慶本	19. II. 天文六、 29. III. 天正四、 14. II. 文祿四、 寛永七、	73 (1465—1537) 90(?) (1469—1576) 89 (1507—1595) 118 (1513—1630)

六、蘭學者又醫家の雅號(又渾名)及、

書齋名、堂號の概略

(一) 前野良澤は名は達、字は子悦で諱を熹ヨシキと曰ふた、此熹を書く代りに亦餘美壽ヨシスとも書いた、元來、此熹字は宋の朱子の名で——熱、蒸、炙、盛、熾等の意である、良澤は之を一生の精神の上に表現したと思はる、然るに朱子は字を元晦又仲晦といつて熾盛蒸熱を晦澀にしたが良澤は達といふ名から字を子悦ヨシキとして心竊に英華の煥發に悦ぶといふ如き感を生ぜしめる。

良澤は其通稱であつて澤の字は叔父の官田全澤から得たと思ふ、而して別に樂山の號もあるが是は堂號の樂山堂(堂記が良澤から物されてゐる)の略である。其法諡は樂山堂蘭化天風居士と言ふた。

又江馬細香の「前野蘭化先生傳」には名熹、字子悦通稱良澤とあつて諱を名ヨシキ蘭學者又醫家の雅號(又渾名)及、書齋名、堂號の概略

してある、思ふに熹は實名敬避の稱(「タブウ」から來た)であらう。

(二) 杉田玄白の號は鶴齋である、鶴は鷓鴣(ミマツドリ)で即、「ウ」(俗の鷓)の事であるが或は「鷓の眞似」といふ俗言から取つたのであらうか不明である、而して名を翼、字を子鳳といふたが、此鷓には適切でないから、或は亦、他に出處があるかも知れない。

性燥急と言はれて講明社中の社友から笑を招き桂川甫周が玄白の語中より「草葉の蔭」を渾名した(蘭學事始第二十四項)、然し語呂が悪るので餘り流行しなかつたと思ふ、又一生に九回の幸福に遭遇して九幸老人とも云ひ石川丈山を敬慕して小詩仙堂主人(「形影夜話序」,「七不可」の跋言)とも謂ふた。

(三) 植物を以て號しし堂號した學者を蘭學者に求むるに宇田川一家は三代槐園、榛齋、榕庵を號じてゐる。

槐、エンジュ、 Sophora japonica, L.

榛、ハシバミ、 Corylus heterophylla, Fisch.

榕、カヅ(ズ)マル、 Ficus retusa, L. var. nitida, Mig.

(漢醫家の伊澤蘭軒も亦、榛軒、棠軒、栢軒の四代に互つてゐる、宇田川榕庵の名榕は幼名、一鷹、勝丸ともいひしか不明である)。

小石元瑞は櫻園を號じた、櫻は御柳であつて櫻柳、垂絲柳、觀音柳等の異名がある、學名は Tamarix chinensis, Lour. である。(九代の林大學頭煌も亦、櫻字を號じた)。

箕作阮甫の號は樅堂といふた、樅は櫻にもあるが、然し「モミ」の樅で Abies firma, Sieb. et Zucc. である。

本間棗軒は玄調の號である、棗は Zizyphus inermis, Bunge. である。

(四) 宇田川槐園は容貌婦人の如しといふので東海夫人を渾名された、是は淡

菜又貽貝「イノカヒ」、「イガヒ」の異名であつて猥褻名である、磐水の評言に「目は市川荒五郎(團藏の後)、鼻は荻野伊三郎(上村吉彌の後)に高麗屋、松本幸四郎を合せた氣味合なり、天性寡黙にして多言ならず、言語舉動婦人の如く友人等戯に東海夫人に渾名す」にあり、槐園の肖像は「好古事彙」卷一、史傳部類に出てるが其特徴は隆準にある。

外貌から男子を女性視するこゝは其 Anandrie で無き以上は粗暴である、素より世上には男性で女性に近き體型の無いでは無く、往々 *Facies anorchistica* *s. castrata* として其面貌に現著に或は音聲に或は態度にまでも女性を現するこゝがある。

又磐水の戯評は「いへ、友輩の面貌を評して俳優に比するこゝは卑劣極まるこゝ言ひ度い、思ふに磐水では無く他の小輩が戯れた言を磐水に託したのである、武士道からは他の面貌を評するこゝは避けられ、戒められたのである、況や當時、人の風上に立てぬ俳優に其鼻目を比し且、評するに於ておやである。

(五) 大槻玄澤は蘭學を良澤から、醫術を玄白から受けたと云ふ處より其偏字を取り附けたといふこゝである、素より、玄は曲直瀬玄朔に本づいたのである、其號の磐水は其祖先の支配地(采有地)を流れる磐井川から來たのである、(高野長英の號、瑞阜も亦、膽澤郡の水澤を美化したので俱に岩手縣下である) 其長子茂楨、玄幹の磐里、次子清崇の磐溪も亦皆然りである、玄澤は戯文「醫者あきんき」に半醉先醒といふたのは磐水を化したのである、又、堂號を不識堂と名づけたのは不識即、芝蘭の化である、其書齋は消遣精舎(伊波比倍考證に)、月洲精舎(磐水漫草に記する所で月洲は築地である、後の岩瀬蟾洲も同じ意である)といひ或は三十間堀に僑居しては之を畹港といふた、畹は三十間(畝)で蘭畹なき、云ふ處から名づけた(畹港漫錄、蘭畹摘芳といふ著書がある、然し芝蘭堂は常用の號であつた、子、玄幹磐里は又常に「不錦書屋」の堂號を用ひて居た。

(六) 宇田川榕庵の「菩薩樓」は榕の異名、菩薩樹(八絃譯史)から出自した事は

「史話」に於て説いた處だが、其藏書印は「菩薩樓圖書記」にあり板本は概して「菩薩樓藏板」にふてゐる、其狂歌集は「菩薩樓集」に名づけ又、狂詩には「長野洞沖」に曰つてゐる、横文では Wa. Joan の記し木印にして捺してゐる（ビエテ
ル、マプリンの會話謄寫本）又謄本の末後には縁舫老人字榕識（天保十三年 四一八
八月の「兩浙輶軒鈔錄」の最終頁）にあり、此狂名も縁舫も人の知らざる所である。

(七) 箕作阮甫、縱堂が右肘關節に幼時外傷して多少の矯正を遺貽した爲に自ら仔名づけ（仔は右臂が無い意）又、蟲臂生とも稱したことは兎に角に之を股脚の方に轉用して夔庵、一足庵に號したことは亦奇である、其夔は一足の鬼である、又嘉永七年七月に湯嶋天神祠下の中阪に新築してから樓名を天竺樓といひ、環堵之室、十歩之園、固無足道勝概者、又、竹翠松綠、荷香梧陰、四時代呈、自足以暢叙幽情、陶寫雅懷、といふて軒を竹雨軒に曰ひ、別號を竹雨にも言ふた、壯年の時より醉紫川、紫川生、紫川西史、逢谷生なき、交も用る、

玄甫、阮圃、阮甫又虔儒の數名で字を庠西にいひ、名號、如是く豊富で其人により風韻清雅を偲ばせる。

(八) 究理堂、龍門樓は小石大愚の齋名又學塾名で元瑞は之を襲ひて其生を終ふるに及んだ、而して元瑞の書齋名は用拙居、衛生堂（大愚から）、何求齋に稱し風雅の方面には用拙居、又別號、秋崑僊史を稱した。

(九) 坪井信道は深川淨泉寺の門番舎から冬木町の河岸に移轉して冬樹に號した即、誠軒の別號である、杉田成卿が「濟生備考」の序文中に「信風從冬樹坪井先生、學西洋醫方、專先用意於彼邦文法、循序精研、始得窺醫道之大經、今已十有五年矣、嘉永三年庚戌二月中浣、杉田信書于濟衆廬之南窓、」に記してある。

誠軒は業を深川に開いたのは文政十二年に於て其堂號を安懷堂に曰ふた、次年即、天保元年には川本裕軒又其二年には緒方洪庵、其七年には年紀

二十歳の成卿が入門したのである、誠軒は和蘭文法を講習するを堂規とし其讀法を作文に力を致すを専務とした、即、序文の序に循がひ精研するは之を言ふのである。

因に言ふ、成卿梅里が始めて醫道の大經を窺ふを得たといふは之を推して其十五年は嘉永三年^{一八〇五}で其年が三十四歳の時である、而して成卿が棲居は當時猶、天真樓(山伏井戸)であつたと思はれる、又其書齋名は濟衆廬^{いそく}と曰ふたのである、成卿が別號に風葉山人^{ふうえつじん}といふは何時頃から使用したかは分明でないが、鐵砲洲別業中の事であるを想像する。

又、成卿が「蒸樓記」に呵呵凡山人^{かかばんじん}といふ戲名がある。

(十)、「新訂増補和蘭藥鏡」卷四、遠志條下に、江戸藥舖、大阪屋四郎兵衛、清雅云々又、卷十六、百藥煎條下に藥舖、樂只亭、清雅と出でゝる、此人は藥研堀に住し、本草に精通し又蘭漢藥の鑑定なきに明かであつた、文政六年^{一八二五}

に「手形發蒙」を著はし書中には蘭名を我譯語を記入したものであるが、沖翁、小泉榮次郎氏が武藤半司氏に語る所に據れば此書は夙に市場に絶えたこの事である。

(十一)、蘭化以來、和蘭學者は雅號を堂號に蘭字を充てた人が多數ある、今之を蒐集するに次の如しである。

- 蘭 阜 本木仁太夫良永
- 蘭 汀 同 庄右衛門正榮
- 蘭 齋 熊坂秀英 江馬元恭 大槻俊齋 宇野廣生
- 蘭 臺 齋藤方策
- 蘭 屋 小石紹
- 蘭 室 辻章從(爲槻)
- 蘭 嶋 佐々木忠澤
- 蘭 山 小野職博

蘭圃	安部龍平	武部游
蘭疇	松本良順	
芝蘭堂	大槻磐水	
馨蘭堂	吉田長淑	
好蘭堂	江馬春齡	
幽蘭齋	越村德基	
香祖堂	本木蘭皋	

訂

又蘭學者は洋名を渾名又號とした

桂川甫謙五代 Johannes Botanicus, Caneelriver senior. (老桂川)
 同甫賢六代 Wilhelm(s) Botanicus, Caneelriver junior. (少桂川) 奥に

ドオフの命名する所である、甫賢の方はドオフトとトゥルリ
 ングと協議の上の命名とある。

高橋景保

Globus, Johannes Globus 又 Bambus. 蠻蕪白、蠻蕪(竹の
 學名)

馬場穀里

Abraham.

山口行齋

Karel 其妻は Ljise と名づけられたが疑問といふことであ
 る。

奥平昌高

Frederik Hendrik ドオフの命名

同昌暢

Mauriz.

横山與三右衛門

Brasman. ケンペルに隨行した大通詞であるが、此は渾
 名で遊治郎の義である、衛藤本のケンペル傳には鐵面皮
 漢と譯してある。

石川大浪(大臈)

Tafelberg, 希望峰の山名を取て机山とも言ふた、大浪は恐
 らくは亞弗利加西北端の「アトラス」山に取つたと思はる。

(十二) 蘭學者の書齋名又家塾名を年次に順序なく次に記載する(但、前項一、二、三、五、六、七、八、九に記したるを除く)、

- 得性軒 檜林鎮山
- 成秀館 吉雄耕牛
- 映山塾 同 獻作
- 觀象堂 同 南臯
- 絲漢堂 橋本曇齋
- 貽安齋 小森桃塙
- 亦樂舍 鳩野宗巴
- 知不足齋 齋藤方策 又孤松軒
- 驅豎齋 新宮涼庭
- 衛生堂 小石大愚(其他究理堂、龍門樓)
- 歸一堂 各務文獻

- 卉畹草堂 千野良岱(卉畹道人)
- 春齡庵 江馬蘭齋
- 格物堂 西脇秀挺(岐阜)
- 蓼莪堂 吉雄元吉(紫溪)
- 紅梅樓 宇田川興齋
- 見道齋 伊良子道牛
- 無荒堂 同 光顯
- 春林軒 華岡青洲
- 松籟館 平賀鳩溪
- 台州園 荻野元凱
- 擴充居 高野長英 又瑞臯堂、大觀堂、詳證館
- 全樂堂 渡邊華山
- 雙屈舍 船越卓堂

蘭圃書屋	武部游
適齋	堀内素堂
適塾(齋)	緒方洪庵
象先堂	伊東冲齋
廣胖堂	同貫齋
衆芳軒	小野蘭山(朽匏子)
品字社	伊藤錦窠

史話追補

桑原宗庵の猿療外科簡要集
高須松齋(清馨)の事歴

桑原宗庵の著
書に就て

寶永五年〇八に肥後の益城郡醫、桑原宗庵(如伯)といふがあつて「猿療外科簡要集」(四卷本)を著はし此書は其後六年、正徳四年一四七五月に大阪心齋橋の書肆から刊行された。

今此書を繙くに全部漢文で綴られ卷一に金瘡論、其主治方又、阿蘭陀秘傳膏藥方を記し、卷二に癰疽、疔瘡の外治又内治法を説き、卷三に外科本草上三題して油、脂、蟲鱗、禽獸、金石、米穀、卷四に其下三題して、木、草、通計一百數十種を掲記してある、其癰疽の項は皆在來の漢醫家の説く所を説き毫も怪奇妄誕を避くる所なく、行文中に錯雜してゐる、其内治方如きは全く外科正宗に則つて其特色は無い、或は多少繙縛方、貼膏方に、蘭方を混じてゐる如き情

勢が見える、其金瘡論末に阿蘭陀秘傳膏藥アランタヒツツにして約二十膏方アランタヒツツ一散、一湯アランタヒツツがある、之を見るに皆、栗崎外科にて説きたるもの吉田安齋キタヤス（自休、漢夷三和流）時代に折衷して内外療法を主唱したものを因襲した云ふに過ぎ無い、又外科本草の如きは動植礦三物に區分して其効能用法を列記したのみである。

其中に目に着く洋藥アランタヒツツ云ふべきは椰子油、琥珀油、知也牟アランタヒツツ（瀝青）及「阿世登字那乃阿布良」アセトオナ油、即、阿列布油、史話上、第二一八頁参照）であつて、此阿列布油は「誠に外科中の要油也」を説いてある。

而して此題簽の繚字アランタヒツツは字彙には西南夷の別名を謂ひ、著者は此字を以て和蘭を指し繚郷、又は繚醫アランタヒツツを曰ふて其郷土又、醫人を指してゐる、殊に此奇字を應用したるは亦奇であり好奇心である。

著者は其序文に據れば内科醫であるが外科に志して長崎に赴き親しく蘭醫

（外人）の教を受けて其治術に通じ歸郷して熊本藩命により益城の郡醫（郡中の市町名は記して無い）となつて醫療に従事したとある、其來歴は是のみで明瞭でないが惟ふに蘭醫にも親炙した外に、栗崎又吉田の流派に教を受けたものと見られる。

又、此著は寶永五年の十月に出來たことは其序文末に見ゆるが、榎林鎮山が「外科宗傳」を其三年〇六七（貝原益軒の序文）に成つたものとすれば僅に二年後の事であつて、其後六年に初て大阪にて刊行したと、或は世上に出たのは「外科宗傳」より早かつた事と思ふ、「外科宗傳」は長く家塾本とし門人以外には示されなかつた次第は「史話」上卷の鎮山の條項中に於て記述した事である、又素より其内容に至つては全く別様の者が見られる。

惟ふに是の如き書は今日迄の醫史上で其著者名と與に傳ふる所でない、獨り題名の奇のみでなく熊本の西南郷土に是の如き人のあつた事を傳ふるは亦、吾人の任務である（此書は藤浪剛一博士の藏本である、又奇書として愛書家の珍

藏さすべきである。

「史話」上卷第二三七頁に榎林峽山の門人、高須清馨(字は子成)に就て記する所があつた、今、次に此人の來歴を追補する。

秋田藩に稻見升貞、武種といふ藩醫があつて多賀谷侯の侍醫鈴木重治(升民と號じた)と共に江戸に出て次で長崎に赴き、榎林峽山の門に入り外科を研究した、偶、同門に高須松齋(又昌齋)名は清馨といふがあつて漆膠の交を結び、深く相提携する所があつた、余が藏本の「外科宗傳」(五冊本)は此松齋の自筆本であるが其卷三、硬膏の末尾に朱筆にて

文化八辛未晚夏下旬、於崎陽榎林峽山先生之塾、執稻見家藏書、而鑑先生之原本、而或刪或增、或増減分量云爾、高須清馨昌齋筆之。

と記してある、即、稻見升貞が寫本を清馨が峽山先生の原本(是は已に鎮山本

稻見升貞及鈴木升民

高須松齋

を多少増補したものである)と校合して増刪し又は附箋を貼したものである(余が此藏本には鈴木藏書印と横文「タカス」の圓印が捺してある、藏書者笹森基亮は、此書は後年、松齋が鈴木家に贈與したものであると余に告げた)。

松齋は江戸に歸り馬場貞由(穀里)を師友とし文化十二年一五八三月には小塚原に於て同志の人と一刑屍を解屍した、天保六年一五八には稻見氏の推舉で秋田藩の表醫師になり後に奥醫師に進んだ、其居は淺草福富町に在つた。

彼は天明八年一七九七に生れ明治二年一八六九に壽八十有二歳で歿したこの事である(墓碑は谷中天王寺にある)。

高須松亭

松齋に子なく、備前國の商家、光岡萬次郎の三男、保(又、茂貞字は子堅、號は松亭)を養子として家を嗣がしめた、此松亭は文化十一年一四八十月に生れ、天保五年三四年二十の時坪井信道門に入り在塾三年の後、松齋の養子となり、弘化三年一八四十月、幕命にて天文臺出仕、蕃書和解御用を命ぜられた、安政元年一八五四に蝦夷地御用を命ぜられたが眼病の爲に赴かずして止み、其二年に佐竹

侯に仕ふるこゝなり同年十二月、蕃書調所設立に際し辭任して専ら佐竹侯の侍醫として執掌した、明治四年八八廢藩の爲、東京府貫屬となり明治二十二年八八七月七十六歳で歿した(自作墓表に據る)

因に云ふ、稻見家の後は今日の武彦博士である、鈴木家の後は曾孫松軒(秋田縣五城目町)を以て祀絶ゆこの事である(以上、深見貞治君所談、笹森基亮君調査等)。

仰慕詩鈔

予少時學詩、有師焉。評論之、有友焉。及晚年兩者俱無、而殆忘所學史書、無復所記也。是故賦句不知用典故、無典故則全缺其興趣。雖然如諸家詠史、則其所引用典故、跋覺者多矣。爲覺不相駢馳也。今日觀我仰慕詩篇四十首、無有一典故、雖以非謂無跋覺、亦於言其志、於仰慕先賢、夫何有乎哉。昭和壬申十一月七日。

理堂道人識

題舊著前野良澤傳稿本後

明和辛卯浩蕩春。春風遙從墨水津。郊上俊髦相牢誓。麗澤講明氣益振。主盟何人字子悅。短軀溫容樸而淳。切劘四年如一日。遂成大業幾艱辛。業成不敢居功績。杜門謝客累牘陳。一心貫徹阿叔訓。窮理卽足攸誓神。門下桃李不嫌寡。君侯聰明魚水親。缺舌自在公治長。芷蘭之馨稱化身。述作不須他誇揚。韜光葆真不搖唇。蘭齋蠶書造君室。樂翁引君爲上賓。仁者樂山名不背。先鞭既着何後塵。大東文明賴君發。况藏憂國膽輪困。世上幾經滄桑變。英傑開途時運新。星霜一百五十載。誰不欽仰君子人。君不見幾百情夫爲之起。文物勃興贊皇綸。幽明更拜聖德大。贈位其門慶祥臻。追懷春風骨原會。又想老屠撥皮真。苔封菅廟碑上字。健筆千古勒貞珉。後輩吾生應慚死。昭代碌碌伍等倫。剪鐙對案理舊稿。惟憾才綏與學貧。

大正十五年二月作

杉田玄白

冠冕悠揚長者風。濟生奕葉克全功。賴君勦耒栽培力。始見蕙蘭芳郁叢。
筆華高與劍光寒。獨語雄篇披鐵肝。半面風流人識否。藥丸一半是詩丸。

野叟獨語

崑崗遺玉一篇書。出世驚人聖代初。說去蓋簪創業苦。講明舉實有誰如。

蘭學事始

童顏銀髮列僊儔。木像軀靈何處留。縱使滄桑衢路變。後人必記天真樓。

吉雄耕牛

學徒晨夕訪書樓。多載啓蒙不暫休。技互瘍科推巧妙。偉材豈啻狄鞮流。
參觀輪誠五十年。常看旅館講書筵。櫻花萬朵開文化。時是江城三月天。

參觀常在三月

蘭陀樓上飽觀瀾。又對琳璆袖手看。夕日春時客三四。蒲桃滿甕坐團欒。

藥苗雨霽遍春田。秋穫郊莊草帶煙。三餘業外存能事。屢傾管鏡候蒼天。
地文天理得君開。驚殺梅園卓犖才。足證西遊江漢筆。纏身名利附浮埃。

獲本木蘭阜肖像畫及書幀賦所感

蘭化芝蘭又蘭阜。蘭字名號功皆高。九畹繁茂百藝種。發揚奎運及六韜。幕府奸策
耘香草。痛哉蠻社時難遭。烏啼悲愴夢頻愕。堪想酷似賦離騷。時難雖然再三起。
顛沛溝壑幾英髦。星霜變遷閱擾亂。時運偶見起俊豪。開來明治大鴻業。聖意優
渥彰勳勞。唯憂子孫今何在。誰祀祖先報旌褒。何幸偶獲蘭阜像。斯像似成大家
毫。又有祖先靈位記。春秋可以獻飾羔。更有小幀書四字。父母師恩揮穎毛。書
此三恩爲家訓。永以斯道傳兒曹。嘗藏蘭阜本草著。書齋珍重過寶刀。思古呼快
對像畫。醺醉三杯碧葡萄。

題本木蘭阜肖像

玉如溫藉見威容。自使人懷星斗胸。不啻狄鞮專獻舌。廿篇著譯大文宗。嚴冬掬水灌膚肌。素跣敬虔禱古祠。辛苦太陽窮理譯。皆成鑪凍月殘時。

昭和五年九月初六作

大槻玄澤

繼承師著大篇成。着取先鞭率後生。精緻古今推獨步。剩看壽頌報恩誠。煙草金城齋瓮編。摘芳蘭畹費精研。史才三長收餘力。考證闡幽冠世賢。盛名東奧養賢堂。尚要刀圭更主張。稿去醫師育英案。堪憂有司不循良。飛耳已聰長目明。天來思想卓然生。開顏賀宴新元會。一醉陽春蘭學盟。

宇田川槐園及榛齋

以貌取人古所尤。誰評面相比俳優。等身著譯非凡手。該博茹含第一流。桃李滿門多俊豪。誠軒阮甫最英髦。雙賢更有殊旗幟。本草勸農其德高。

指飯沼慈齋及佐藤椿園

同榕庵

醫方藥鏡灑胸懷。二代增脩挺等儔。更說兩機元素論。千年固陋一時排。想着三樹碧葱蒨。錯節盤根推巨榕。植學啟源椽大筆。菩經一本別爲宗。

又

文章悉把麗辭修。半夜挑燈專博搜。携稿溫泉、石雨。草詩熱海、門秋。是仙環珮玎璫集。亦佛蘿纏菩薩樓。曾泛墨江逢鬼處。聽絃說夢又風流。玎璫集者書名

讀桂川甫筑自筆本瘍府

甚哉漢人名癩疽。其數將上千有餘。或據窰穴或物色。又取隱名遂紛拏。惟知名稱之可尊。不論檢症精與疏。宋元以來參俗名。諸家文獻多齟齬。法眼甫筑英妙選。涉獵內外幾舊典。漸經歲月纂名稱。悉隨部處皆分辦。細加注脚明字義。必

分異同正錯舛。迷罔百端由是詳。冤業妄誕由是顯。素問弊套說五行。運氣經脈論陰陽。學理因襲入邪道。孤陋不解隨新方。六淫七情皆起因。百家甘心括瘡瘍。根柢枝極如麻亂。吉凶一觀說金創。六卷瘍府好網牒。悉將異稱附統攝。束括病訣悉分類。可謂既是一鴻業。殊觀肉筆塗乙痕。雌黃點竄每楮葉。剩觀賢兒簡閱功。恰如整頓萬厖雜。

小石大愚及樾園

大愚不愚傑人魁。骯髒夙揮曠世才。元衍鉅編天地妬。一宵附去丙丁災。當年巨擘有樾園。究理濟生探本原。領略山陽竹田識。堂堂風雅藹然存。

與菅野弘一翁赴圓山大恩寺展海上隨鷗墓

能排艱苦重聲聞。先哲雖多常思君。下手西書神蓋世。專心辭彙力超群。惟將海上隨鷗意。不策人間逐鹿勳。落日招提春籟寂。瓣香一握展孤墳。

以上三首昭和四年三月作

讀橋本曇齋傳二首

身起繖工絲漢堂。關西學藝繫瞻望。人間不患無墳墓。著述粲然留耿光。好爲邦家避禍羅。隱棲三載靜中過。執毫超逸情塵外。豈學忽忽赴燭蛾。

讀新宮涼庭弊家修繕話

居常慷慨又纏綿。國用廢頽誰轉旋。結課減租經濟祕。勤清仁惠貨財篇。嘆嗟衮職趨時弊。戒飾君侯誤利權。大筆縱橫傾義膽。獻芹具眼總堪傳。

又

醫國丹心千萬言。篇々莫不積誠存。灑來五十餘年苦。夜雨窓頭常綠樽。

譯書詩中、有自

哈五十餘年苦有窓前夜雨知句。

更將滿腹衛生經。書院育英稽典型。不作兒孫美田計。醫中俊傑有涼庭。

天出奇才如劍鉞。言行超跌不尋常。常人月旦評何問。凡眼所觀皆近狂。

三五

讀涼庭言行錄

讀坪井誠軒與兒安貞書

行跡辛酸命運疏。千言腸斷寄兒書。阿兄友情濃處。夫子周旋志切初。導引換
翻真苦學。徵招就職始安居。比來范邵程張誠。血淚滂沱誰得如。

坪井誠軒

回顧當年師弟情。漸磨成就學皆精。雙、脊戀無他事。偏爲邦家葵藿傾。
門生皆俊子孫賢。德望一家誰比肩。又有鍾靈箕作氏。勳功竹帛與相傳。

杉田梅里

博識宏才夙下帷。等身著譯不矜奇。行文簡勁猴屍記。長句清瘦烏賊詩。常潤肺

腸傾美酒。

巧羅洋字寫新辭。挂冠翎澤春林晚。按劍悠悠懷昔時。

第六句指道實序文、
玉川紀行、讀赤鷲賦

等之爾
文詩

大震燼燒書萬卷。天災奪去十年歡。幽莊梅老春風暖。廢逕菊闌秋雨寒。麥隴行
穿新杖履。樵村慵着舊衣冠。英雄不起時將亂。醉把鈴韜仔細看。

次梅里翎澤村墅詩韻

橋本葵園

紈袴青年負大才。陸離神彩自天來。寄師詩句教人泣。惟是囚房對壁裁。
常山之髮侍中血。韜晦天關日月光。剗刮盤根腫瘤手。將收亂理奉皇綱。

起承出自葵園遺草題字文天祥句

醫國醫人兩趣同。經綸大策待英雄。冢原碑勒千年恨。麟閣功名雪一空。

華岡青洲

三五七

外科大略委膏方。漫懼淋漓手術創。天起伊人出南紀。臂振妙技冠東洋。再興千載華陀法。復胤舊稱麻沸湯。抽割瘍瘡眞曠世。刀光閃處是韶光。

西醫學東漸史話餘譚 終

附載

一、史話下卷、宇田川榛齋肖像の訂正且、陳謝

筆端、儼格に留心しながら或る事柄の記載に誤謬は免れざる者こそ「偶然に出来た事は亦或は已むを得ないを考へられる」、好し復、此偶然であるが油断して居た時ならイザ知らず、寧ろ頗緊張してゐた時であつたのである。

今、爰に史話下卷第一一六頁に「玄眞、榛齋が肖像は谷文晁が圖したのを云云」に榛齋の容貌を略述した事及、次の挿入圖も全然抹消し去る事とする、即、榛齋としたのは誤りで、それは小野蘭山名は職博、字は以文なる本草大家の肖像であつた。

蘭山の左の顴骨部に膨然たる腫瘤（良性）があつて一見稍、醜容を具してゐた、

史話下卷、宇田川榛齋肖像の訂正且、陳謝

其文晁に肖像を描かしめる時、文晁は出来榮の上から素より右の横顔を描かんとした、然るに蘭山は其平生の性分を發揮して故らに腫瘤ある左顔を描かした、即、此圖では判然とは仕ないが、髣髴の間に左様も思はしめる位である。

此事は此寫眞像の所有者、乾乾齋主人、藤浪博士の懇々指教する所であつた、儼格に執筆最中に茲に「偶然にも出来た」粗忽、誤謬、過失を訂正し改めて蘭山其人の肖像として紹介する。

而して今回更に乾乾齋主人に陳請して榛齋の寫眞像の惠與を受け、改めて次に掲載し偏に主人に我粗忽を謝し重ねて看客諸賢に對し申譯の無い「偶然の粗忽」を深く御詫申上げる。

此掲載の圖に據れば榛齋は稍、扁頂な廣顙で廣額の所有者である、此奇相よりして其人の偉大なる心性を解説せんこゝは寧ろ石龍子が「形貌學講義」中の第五章に委して此處に之を略する、凡て相貌を描くは可であるが、之を批評して

其心性に及ぶは其忖度に誤るこゝが酷だ多いので、殊に之を我東洋人に見る所である。

近年、西人は史乗の上に於て英雄や偉人の容貌を文字に現はし且、其性情に及んでゐるこゝは少しく着目すべきである、其例として「新獨逸外科」の第十五卷の著書、マアルブルヒ大學教授エルンスト、キユステルは「新獨逸外科史」上に於て「フホーン、フホルクマン」。「フホーン」、ベルヒマン。フランツ、ケエイニヒ。テオドオル、ビルロオトの面貌、鬚髯、又、嗜好及、心性を記述して詳細であるこゝを茲に附記する。



宇田川榛齋肖像

(史話下卷二六挿入)

二、西醫學東漸史話贊評概略

先輩雅契より寄せられたる朶雲、
淨机の上に飄颻たり、中に就て
贊評に關する句句を鈔記し諸賢
の所感一斑を載録して特に感佩
の意を寓すること次の如し

齋藤阿具君 北地に在られて是程の資料を御蒐集被成候御苦心實に不堪驚歎候
……何れ拜讀可裨益、之を樂み致居候。(二月五日)

藤根常吉君 由來世相は物質的に傾き精神的方面に耳を傾けざる様に相成候事
誠に不堪憤慨候歴史は大にしては興亡成敗を知り小にしては先哲の業績を視

て其苦心を按ずるに同時に自己の精神を修養すべきものに候へ共、之を繕くに一種の道樂さ心得る者多きは是、日に不良の徒を増すの原因の一も常に存居候、今、尊著によりて少なくとも醫界に警鐘を發せられたる感を起し申候。
(二月五日)

木崎好尙君 忙手開析拜讀申上候而未終編候得共御叙述之御苦心歴然史話之「史」に非ずして而も「史」のいかめしくして却て窮屈なるに反し話説の内に分之「史」を發揮なされた事一層奥ゆかしく奉存候是畢竟御自謙之儀に外ならず誠になめらかに樂しく親しみある御筆法深く奉敬服候、是より十分拜讀、斯界之歴史納得致度奉存候、殊に插圖之御配列竝々ならぬ御努力、さこそこ拜察仕候。(二月六日)

平井毓太郎君 偕、兼而より御苦心の西醫學東漸史話御上梓に相成り上下兩編

御惠贈を辱うし感謝之至に不堪候、資料御蒐集、考證等容易の事に非ず、筆蹟、畫圖、寫真版等も多く挿入せられ實に見事の出來榮、只管敬服之至に不堪候。(二月八日)

北里閑君 醫術には門外漢に候へごも久しく大阪醫大豫科長之職を瀆し居りし關係上、趣味ふかく拜見出來可申歟さ樂しみ居申候、御序言には御謙遜之辭をつらねられたるが一入ゆかしく存上候。(二月八日)

内田遠湖君 數百年西醫學之發展、數十人勤苦勉學之事績、上下二卷之中に括盡し而かも其間に逸事美談を挿入し讀者をして津津趣味を感得せしむ、此れ才學兼備の者に非れば做し得る能はずさ奉存候、尙閑暇を待つて全部緩緩流讀可仕候。(二月九日)

入澤達吉君 授高著西醫學東漸史話御惠贈被下奉謝候、完全なる圖書館無き地に於てよくも斯く迄、多くの好材料を蒐集ありて裒然たる大卷を御成就相成候段、敬服之至に御座候、拜讀之餘、蒙を啓くこゝに抄からず、厚く御禮申上候、

トウンベルクミ云ふ名は始めて聞いたミ云ふた大學教授(醫)あつたミか申すこゝに候際、特にゆかしく存候、呵呵。(二月十日)

富士川游君 多年御苦心之結果大成被遊候西醫學東漸史二卷御惠贈を蒙むり申候、御厚意之程深く感佩致申候、内容之豊富ミ體裁之優美ミ相待ちて洵に近來出色之大著述ミ驚歎致申候、犀利なる史眼ミ流暢なる文筆ミの所有者である上に多大の趣味ミ盡精の力ミを所有せらるゝ貴下にして甫めて如此の偉業を成就致され候事申す迄も無之、我醫史學界の爲に感謝措く能はざる所に有之候。殊に隨筆體の叙述は事實の真相を盡す上に好都合に可有之歟。小生の

如き斯學に興味を有するものが貴著によりて多大の裨益を得候事は勿論之事に有之候。(二月十日)

山崎佐君 多年御研鑽洵に學界之慶事而已ならず後學輩之啟蒙の好資料ミ存候。(紀元節)

新村出君 大體一閱の幸を得候仕合に有之……種種御新見を拜讀し裨益を得候所少なからず、向後永く座右に架藏し、参照の資に供し度ミ存候。(二月十五日)

附言、昨年あたりにや「蝦夷往來」の雜誌かにて例の手宮の假託(偽作)文字の件につき高文拜讀いたし候、明治二十九年ごろ故坪井正五郎博士より承及びありしこゝを想起し興味少なからずミ存じ居候。

長尾藻城君 北海道鎮臺の稱ある理堂關場不二彦博士が藤田鳴鶴の「文明東漸史」の向ふを張つて「西醫學東漸史話」を題する上下二卷の大著を公にされた。關場博士は醫家中の文筆家で學東西に涉り、特に漢文學の造詣が深く故土肥鷗軒博士を駢び稱せられた文章家である。此人が日本の古文獻をあざりて丹念に書き綴り上げたものが本書である。此書が博士得意の純漢文調を避け、て史話を碎けて出掛けた所に苦心の蹟がありあり見へる、それに著作の精神が古名醫、古碩學の幾多の行績が人の知らない犠牲心の結晶たるを力説して後の學者の模範たらしめんとする老婆心から出發してゐる意志が行文の間に流露してゐるのが嬉しい、况や著者は出處の詮索に凝り性な人である丈、此邊に骨を折られたであらうと思ふこ一段の敬意を表せざるを得ない。(昭和八年三月一日發行、醫文學、落葉籠中の一節)

徳富蘇峰君 何れの時代にも、醫者にして學者たる者あり、學者にして醫者た

る者あり。別けて現代に、其人少からず。一例を擧ぐれば故土肥鷗軒博士の如きが、其の標本だ。乃ち「西醫學東漸史話」の著者、關場不二彦博士の如き、亦た其流歟。

本書は戰國時代南蠻流外科醫から始まりて、幕府の末期、橋本左内を以て終つてゐる。その間、約三百年來、傑出したる西洋流の醫士、及びその著譯、その師授の系統を、年代順に歴叙してゐる。されば史話を云うは、謙遜の辭で、其の實質は、史を稱す可きだ。

我國の泰西文化を輸入するに際し、宗教を醫術とは、兩々相ひ並び來つた。但だ宗教は、寛永年間天草の亂を以て、殆ん其の禁斷の幕を卸したが。醫術のみは、滴滴相傳へ、以て徳川幕府二百六十年を終始した。されば泰西醫術東漸史は、直ちに文化東漸史を云ふ能はずんば、其の重なる部分を占むる

ミ云うも、不可なけむ。

關場博士は、胸に成竹ありて、其の緣起、來由を詳悉し。然も之を語るに極めて簡明。文にして俗ならず、質にして雅。而して其の挿む圖畫の如きも、概ね心目を洞快ならしむるもの。

されば此書は醫學史ミして讀む可く、又た一般史ミしても讀む可く、醫科の學徒固より讀む可く、學徒ならざる者亦た讀む可し。我等に取りては、如何にも興味多き好著だ。然も著者は飽迄も學者の本分を守り、其の一字一句ミ雖も謹嚴にして、苟もする所なきは、學問的良心の轉た鋭敏なるこゝが看取せらるゝ。

本書には外人にして、直接我國に來朝したるケンプエルや、シイボルトに就

て——尤も後者は既出の書ある爲めに、省略したる所多きが——それぞれ記する所があつた。我等は固より此の兩人が西洋を日本に紹介し、日本を西洋に紹介する點に於て、其の功績を認むるに吝でない。されど西洋醫術の効能を、日本に普及せしむる點に於ては、その時代は、本書の記事範圍の後であるが、米人ヘボン博士を忘却することは出来ない。此れは本書を紹介する機會に於て、序でながら此に一言して置く。

本書に挿入したる桂川月池の書に、「滿腹皆書、能害事。腹中竟無一卷書、亦能害事」ミあるは、單に醫師ばかりでなく、凡有る方面にも應用せらる可き警句である。政治家なきも、餘りに書物を讀み過ぐれば、却て煩を爲すが、さればミて、無學文盲の政治家は、猶更ら禁物だ。

(昭和八年三月二十四日、東京日日新聞夕刊、日日だより欄)。